

# 長岡京跡発掘調査報告

－京都市立小学校分校・中学校分校新設に伴う調査－

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2冊

1977

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 1 トレンチ全景（東から）



2 2 トレンチ建物群（北から）



緑釉羽釜と火舎

## 序 文

京都の西南方に西山の一つから舌状に丘がのびている。それを長岡丘陵と呼ぶなら、その長岡丘陵の南端部を含めて、長岡宮が造営された。延暦3年(784)年のことである。

その宮殿をもつ京が造営されているということは想像に難しくない。長岡宮そのものは、昭和35年(1960)以来すでに幾度かの調査を重ねて、朝堂院の大要と内裏の一部があきらかにされている。しかし、宮殿区域以外の長岡京そのものが、調査の対象としてとりあげられたのは極めて新しいことである。昭和49年(1974)、向陽高校が設立されるにあたり、その予定敷地が、もしも長岡京が平安京と同じ構成を持つなら、左京三条二坊にあたるということで、発掘調査を行って、条坊遺構として初めての溝渠類の発見があった。

ところで、そこに前提として、平安京と同じであればということがある。しかし長岡京と平安京と比較するなら、このような前提がなりたつものかどうか、疑わしいところがある。それは、平安京と比較した時、長岡宮朝堂院の朝堂の数が12堂から8堂になり、若干小規模になっていることが認められるからである。この宮そのものの相違があることを考えれば、京にも相違があるかも知れない。その相違は、まず、昭和49年の調査においても、三条大路が、平安京より幅が狭いことがあげられた。また、三条大路の北側溝とその北の小路(平安京の姉小路に相当)南側溝の間が、116.5mと実測され、平安京の約124mと計算されるものとは、比較して小であることが示された。この相違点をどう解釈すべきか、その発掘調査によってもたらされた課題となった。

推定長岡京区域の大規模な調査としては2回目の発掘調査が昭和51年(1976)7～11月に、日本専売公社が関西工場敷地として、京都市伏見区羽束師の羽束師神社西方の位置、西はほぼ東海道新幹線

に限られるような土地で、その広さは126,000 m<sup>2</sup>にわたり、これを買収したことに起因して行われた。平安京と長岡京とを、その宮殿を基準として重ね合わせるなら、左京四条三坊にあたる場所であった。結果としては、それと想定されるような、溝渠は出土しなかった。出土したのは、長岡丘陵の西側を通り、丘陵の南端を横切るようにして、東南方へ流れていたことを示す旧水路であった。これは、小畑川として、長岡丘陵の西を流れ、今は、堀割となって南方へまっすぐに流されているものの、もとの流れを発見したのである。この旧水路の自然堤防も現れ、そこに建築群跡のあることが、東西のそれぞれの堤防についてみることでできた。その東の建築群跡に伴う井戸を発見、その枠組の板が、板扉も古い形式のものであり、加えてその井戸において、隆平永寶を発見している。したがって、この建築群跡は、それが鑄造された以後あまり遠くない時に存在していたものと考えられる。それは長岡京として造営されたものが、いまだ消滅していない時と考えてよい。ところで、そのような場所に川があったとすれば、長岡京の時、この川の流れがあったことになる。結局、この川によって、長岡京の遺構がこわされてしまったのか、川があったため、ここは条坊となるような施設の造営をみなかったものかのどちらかである。それは次のようなことから、後者の場合、すなわち、条坊の施設はなかったと考えた。

この地では、発掘調査の前に、条里に関する溝がはしっているのがみえた。この条里はある箇所では、現在みるものの下に3回の付け替えのあったこと、それは重なっていて、下のものほどわずかに東へ寄り、ずれていることがわかった。もっとも東にある最下層のものと、下から2番目のものとの間に既記の川の流れがはさまっていることを、土層を点検することによりみつけた。最上層のものと、その次の層のものは、川が干し上がったときに作り変えられたと解釈できた。すなわち、川の氾濫の後に、先述の建築群跡をのこしたとすれば、その時条里はなかったのである。もとより条坊もなかつ

たのである。川によって消されたものなら、条里と同様な痕跡を残している。しかし、条坊の痕跡はみられなかった。即ち条坊が作られるとき、延暦3年を過ぎた間もない頃、調査地は小畑川が流れていたので、条坊を作ることはあえてしなかったとみた。

長岡京の条坊をさぐる第3の機会はこの報告書が示すものである。

以上の2度の調査をよくわきまえて、第3回目のこの調査にはいったのである。しかもその場所は、第1回調査地の東方で、同じ三条大路が出せるものと期待した。また第2回目の調査地から東北方にあたり、そこにはもう川の痕跡の出ることはなかろうと予測でき、条坊が布かれていたとするなら、その痕跡があらわれると予想できたところである。

予想のものは発見できた。特に第1回で発見された三条大路の東方への延長上、それとみるものがあらわれた。さきに問題点としてとりあげたものに対するものは、この調査でも未解決の分も多い。わずか10年間の長岡京が、その初めは条坊を設ける計画を持ち、わかったことは例え一筋のものであったとしても、工事は着手されていたものであることを明らかにしたのは大きな収穫であったといえよう。その報告が、長岡京の今後の研究に大きく寄与することを信じて疑わないものである。

いずれにせよ、この調査にあたっては、依頼者の京都市教育委員会から絶大な協力を得たことに感謝申し上げねばならず、またこの調査に援助を惜しまれなかった方々にもお礼申しあげるものである。

昭和52年11月28日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所長 杉山信三

# 例 言

- 1 本調査報告は京都市伏見区羽東師菱川町における長岡京跡の発掘調査報告であり、当研究所の調査報告書としては、『常盤東ノ町古墳群』に次ぐ第2冊目である。
- 2 本報告書の作成にあたって、調査委員の校閲を受け、梅川光隆が編集した。本文執筆は、第1章を中山修一、第2章3を平尾政幸、以上を除く章・節を梅川が担当し、第5章1については杉山信三との協議をもとにした。写真撮影は牛嶋 茂、図面・図版の作図・トレースは平尾・巽 俊郎が担当した。英文要訳は浪貝 茂氏に依頼した。
- 3 本報告書に使用した地形図は次の承認を得て、複写している。二万五千分の一地形図「京都西南部」「淀」国土地理院承認番号（昭和52年、近復、第159号）

# 目 次

第1章 長岡京研究史	
1 調査地の風土と歴史	1
2 長岡京の研究	5
第2章 調査の経緯	
1 調査経過	12
2 調査日誌抄	15
3 測量方法	22
第3章 遺跡の調査	
1 調査概要	24
2 層序	25
3 古墳時代後期の遺構	27
4 奈良時代後期から平安時代初期の遺構	32
5 平安時代の遺構	46
6 遺構の時期区分	47
第4章 出土遺物	
1 古墳時代後期の土器	49
2 平城京後期から長岡京期の土器	51
3 平安時代中期の土器	59
4 瓦	62
5 そのほかの遺物	69
第5章 考 察	
1 長岡京の条坊と地割・宅地	73
2 長岡京期の土器	79
3 平安時代中期の土器	85
おわりに	89
英文要約	90



# 図 版 目 次

- 巻首図版 1 遺跡 1 1 トレンチ前景（東から）  
2 1 トレンチ建物群（北から）
- 巻首図版 2 建物 緑袖羽釜と火舎
- PLAN 1 調査地周辺図  
2 検出遺構配置図  
3 1 トレンチ実測図  
4 2 トレンチ実測図  
5 3 トレンチ実測図
- PL. 1 遺跡 1 1 トレンチ全景（南から）  
2 1 トレンチ全景（東から）  
2 遺跡 溝 SD01～03（東から）  
3 遺跡 1 建物 SB06・07（西から）  
2 建物 SB07（西から）  
3 溝 SD02・03 と建物 SB06・07（西から）  
4 遺跡 1 建物 SB13（北から）  
2 建物 SB14（西から）  
5 遺跡 1 1 トレンチ建物群（西北から）  
2 建物 SB08～10・14（北から）  
6 遺跡 1 建物 SB15 と柵 SA16（東から）  
2 建物 SB11（東から）  
7 遺跡 1 建物 SB12 と柵 SA18（北から）  
2 柵 SA20（西から）  
3 建物 SB24（東から）  
8 遺跡 1 低湿地 SD21（北から）  
2 溝 SD22 と柵 SA23（東南から）  
9 遺跡 1 川 SD25（北から）  
2 川 SD25 南壁断面
- 10 遺物 SD21 出土土器 須恵器蓋（1・2・8・20）・杯（10・11・16～19）・皿（22）、  
緑釉陶器羽釜（248）・火舎（249）
- 11 遺物 SD21 出土土器 須恵器壺（26～29）・甕（32）・鉢（21・23・30）
- 12 遺物 SD21 出土土器 土師器蓋（48）・杯（37・49・81・82・92）・皿（40・42・  
46・83・90）・椀（33・34・53・70・71）
- 13 遺物 SD21 出土土器 土師器鉢（57）・甕（56・59・61・62・64・66・104）、黒  
色土器椀（78）

- PL. 14 遺物 建物・溝・低湿地出土土器 SD01 土師器皿 (190)、SD02 土師器碗 (178)、SD03 須恵器杯 (210)、土師器碗 (177・181)、SD21-B 群須恵器壺 (151)・杯 (137・140)、土師器皿 (111・124)・碗 (117)、黒色土器碗 (116)、SB24 土師器壺 (171)
- 15 遺物 SD25 出土土器 須恵器碗 (242)・鉢 (243)、土師器皿 (215・216・219・250～252)・羽釜 (231)、黒色土器碗 (223・227・228)、緑釉陶器皿 (235)・碗 (233)
- 16 遺物 軒平瓦 (256・257・259～263)
- 17 遺物 軒丸瓦 (253)、軒平瓦 (255)、丸瓦 (264)、平瓦 (265)
- 18 遺物 土馬 (266・267)、石帯 (268)、石斧 (272～274)、砥石 (271)、切石 (275)、墨書土器 (269・270)
- 19 遺物 SD21 出土土器 A 群須恵器壺 (26～29)・甕 (32)・蓋 (1～9・20)・杯 (10～19)・皿 (22)・鉢 (21・23・30・31) 淡灰色粘性土須恵器壺 (24)・鉢 (25)
- 20 遺物 SD21 出土土器 A 群土師器壺 (58)・甕 (56・59～64)・鍋 (65・66)・蓋 (47・48)・杯 (37・38・43・44・49)・皿 (39～42・45・46・50・51)・碗 (33～36・52・53)・鉢 (57)・高杯 (54・55)
- 21 遺物 SD21 出土土器 A 群土師器甕 (101～108)・蓋 (94・99)・杯 (79～82・91～93・95・100)・皿 (75・83～90)・碗 (67～74・76～78)、黒色土器碗 (78・96～98)
- 22 遺物 SD21 出土土器 B 群須恵器壺 (149～151)・甕 (129～133)・杯 (134～144)・皿 (148)・鉢 (146)、土師器甕 (127・128)・蓋 (123)・杯 (114・121・125)・皿 (109～112・124)・碗 (113・117～120)・鉢 (122)・高杯 (126)、黒色土器碗 (115・116)
- 23 遺物 建物出土土器 SB06 須恵器壺 (154)、土師器皿 (155)、SB07 須恵器蓋 (152)、土師器杯 (168)・碗 (163)、SB09 土師器皿 (167)、SB11 須恵器蓋 (153)、土師器碗 (164・165)、SB15 土師器杯 (160)、SA18 土師器壺 (172)、SB24 須恵器蓋 (161)・杯 (162)、土師器壺 (171)・甕 (173・174)・鍋 (175)・蓋 (159)・杯 (166・169・170)・皿 (156～158)
- 24 遺物 溝出土土器 SD01 須恵器蓋 (204)、土師器皿 (190・197)・碗 (179)・高杯 (201)、SD02 須恵器壺 (200・211)・杯 (205)、土師器杯 (183)・皿 (194～196)・碗 (178) 黒色土器碗 (188)、SD03 須恵器壺 (202～203)・杯 (206・208～210)・皿 (207)、土師器甕 (184・199)・蓋 (185)・杯 (180・182・186・187)・皿 (189・191～193)・碗 (176・177・181)・鉢 (198)
- 25 遺物 SD25 出土土器 須恵器壺 (241・244・245)・甕 (246・247)・碗 (242)・鉢 (243)、土師器甕 (221・229・239)・皿 (212～220)・羽釜 (230・231)、黒色土器碗 (222～228・238)、緑釉陶器皿 (235)・碗 (233)、無釉陶器碗 (240)、灰釉陶器壺 (232・236・237)・碗 (234)
- 26 遺物 瓦当拓本及び断面図 軒丸瓦 (253)、軒平瓦 (254～260)
- 27 遺物 瓦当拓本及び断面図 軒平瓦 (261～263)

# 挿 図 目 次

Fig. 1	長岡京・宮の位置と調査地	8
2	調査区と校舎建設予定地	12
3	1 トレンチ調査風景	17
4	1 トレンチ調査風景	18
5	2 トレンチ調査風景	20
6	1 トレンチ 2 トレンチ断面図	24 ~ 25
7	SF05 1 トレンチ北壁断面と盛土模式図	28
8	SD22 杭列出土状態	31
9	SD22 断面図	30 ~ 31
10	SB06 実測図	33
11	SB07 実測図	34
12	SB08 ~ 10 実測図	35
13	SB11 実測図	36
14	SB11 瓦出土状態	37
15	SB12・SA18 実測図	37
16	SB13 実測図	38
17	SB14 実測図	39
18	SB14 柱穴断面図	40
19	SB14 柱の抜き取り方向	40
20	SB15・SA16 実測図	41
21	SB24 実測図	42
22	SD01 ~ 03 断面図	44
23	SD26 ~ 28 断面図	44
24	SD21 断面図	44
25	SD25 東肩崩落状態	46
26	SD25 南壁断面図	46
27	古墳時代後期土器実測図	50
28	黒色土器の暗文	55
29	緑釉陶器羽釜火舎実測図	56
30	緑釉陶器椀実測図	56
31	軒平瓦当文様実測図	64
32	丸瓦実測図	66
33	平瓦実測図	67
34	製塩土器実測図	69
35	土馬実測図	70

36	石器・石製品実測図	71
37	錢貨	72
38	須恵器蓋杯の断面図	81
39	長岡京期における須恵器の3形態	82
40	土師器調整各手法	84
41	土師器甕のハケ調整	85
42	黒色土器(1)と瓦器(2)の内面のミガキ	87

## 表 目 次

Tab. 1	長岡京・宮調査一覧表	9・10・11
2	層序と遺構の関係	27
3	奈良時代後期から平安時代初期の遺構一覧表	32
4	奈良時代後期から平安時代初期の遺構の時期区分	47
5	古墳時代後期の土器の器種別数量	49
6	SD21 A群器種別個体数	52
7	SD21 2トレンチ出土土器個体数	57
8	SD25 出土土器層位別個体数	59
9	須恵器の胎土と器種の関係	80
10	形態の相違からみた各胎土の親密度	83

# 第1章 長岡京研究史

## 1 調査地の風土と歴史

### 菱川と周辺其自然

旧乙訓郡の東を流れる桂川の両側には、その氾濫によってできた石原と自然堤防が続いていた。上・下久我、鴨川の集落はその自然堤防の上に位置している。一方北の方、西京区山田のあたりから南の方に向かって、青い緑に覆われて続く洪積大地の長岡丘陵は、向日市上植野のあたりからしだいに姿を没しながらも菱川集落のあたりまでその余波の高まりを続けている。菱川集落と下久我集落の間を東南に向かって流れ下る羽東師川は、自然堤防の西にできた後方湿地の水を排水するための自然水路であって、昔はずいぶん蛇行していたらしい。

今回の発掘地は、羽東師川がまだ天然の河川であった頃は、その蛇行帯の中に含まれていた。従って、このバックマーシュ的な湿地蛇行帯の中に位置した粘土質の土地が、いつ陸化し、水田化されて行ったかを見定めることは大きな課題とされていた。

発掘の成果に従って、すでに弥生土器をこの地に残して行った人のあることがわかった。また古墳時代の遺物の落ち込んだ溝のあったことから、古墳時代にはすでに陸化していて、耕作されていた部分もあったように考えられる。

淀川の本支流にまだ堤防が造られなかった頃は、京都盆地全体の水位も低かった。この地域にも、屎塚・塚本橋などの古墳を思わせる地名があり、現にここより南方の低い知原というところには円墳が残っている点より考えて、予想外に早く開発されたところもあつたのではなかろうか。

### 条理の施行

6世紀の末から日本の開発に力をそそいだ聖徳太子の頃に、太子に愛された北山背渡来人系の泰河勝は、今の松尾神社のほとりで桂川に大堰を設け、その水を洛西地区にもまんべんなく行き渡らそうとして、現在の洛西用水のもとになる用水路を掘削した。その用水路の末が羽東師川に連結された。

この用水路は、向日市物集女・寺戸地区で南北の条理の重要な基準線となっている。同じ頃、久世郡では栗隈溝（くりくまのうなで）と呼ばれる用排水路が造られたと書記にも

みえ、その溝は今の古川であろうといわれている。古川も久世郡での重要な条里の基準線である。この二つ事実から、京都盆地の条里制地割りは飛鳥時代の初めには整備され始めていたと考える人が多い。

最初に大和に近い相楽郡の南部から、平地の北端に向けて、まっすぐな南北基準線を設ける。次にこれに平行に幾つかの基準線を河川や池沼をも含めて南北に引く。次いでこれに直交する東西の基準線を設けて行ったと思われる。条里の呼称は郡ごとに違っているが、その線は密接に連結しあって、平地全体に条理の網をかぶせている。巨椋池の部分は終わりまで条里の区里は造られなかったけれども、その南北や東西の地割りは池の水面を越えて、互いに応じあうように設定されていた。

発掘前、このあたりは条里地割りが美しく整っていた。久我家文書によって菱川の集落の北端を東西に通る畦畔が乙訓郡の条境の道であり、その道より南方の集落のある部分が七条に属し、北が八条であることがわかった。また集落のほぼ中央を南北に走る道と水路、すなわち小字東河原寺と西川原寺の境をなす道が里の境界線で、それより西の西川原寺を含んだ里が小切里、東の東河原寺を含んだ里が苗生の里と呼ばれていた。学校予定地の小字小塩は苗生の里 29 坪・30 坪にあたる。東の小字長権堂は 31 坪・32 坪にあたる。小切里の北は榎子田里（えのこだのり）、苗生里の北は衾手里（くるんでのり）である。小塩の北の暦田は、衾手里の 25 坪・26 坪であり、長権堂の北小字小入は同じく 35 坪・36 坪にあたる。

現在残っている条里の遺構は、長岡京の条坊を壊して、平安時代に施行したものである。奈良時代の条理については、はっきりわからないが、地名などから考えても、すでに条里の施行が行われていたことは間違いあるまい。

### 文献による史実

文献によって奈良時代以前に菱川付近で名が知られるのは羽束師神社である。『続日本記』によれば「大宝元年(701)4月3日、山背国葛野郡の月読神、樺井神、木嶋神、波都加志神の神稲は今より以後中臣氏に給せよ」という勅がだされている。当時乙訓郡はまだ葛野郡の一部であったので、葛野郡の波都加志神と呼ばれたのであろう。波都加志には高御産日神を祀る。この神は古事記によれば天照大神の時、大いに活躍した神で、宮中以外で祀られるのは、ここだけという神格の高い神である。はづかし部というのは、河川の氾濫によってできる細粒子の粘土を水にといて、土師器を造る人々である。発掘調査の際にも良質の粘土が得られたので、土師器の模作を試みた人があったが、できればなかなか

立派であった。このあたりに羽東師部が住んだのは、良質の粘土と無関係ではないだろう。

次に天平勝宝元年(749)11月に大宅可是麻呂から東大寺に貢進された奴雲足の旧主として、乙訓郡羽東里の長岡坂本国麻呂の名が現われる。このあたりにも奴婢を所有して農業経営を行っていた人があったのであろう。長岡という名を山背でみるのもこれをはじめである。

日本紀略によれば、大同2年(807)桓武天皇の寵児伊予親王とその母は謀略の疑いによって川原寺に幽閉され、11月12日共に薬を飲んで自殺したという。この川原寺を大和国城上郡と書いた本もあるが、これは菱川の川原寺であろう。なぜなら死後伊予親王は近くの桃山丘陵に葬られていて大和には葬られてない。

また同じ頃、はじめて崑崙人が漂着して綿の種子をもたらした。それを川原寺で栽培させたという。今も小字東川原寺の近くに綿貫という小字があり、土地の人は「わたの木」と呼んでいる。日本最古の綿作記事で、今に至るまで「わたのき」の地名があることはおもしろい。それから伊予親王母子が自殺したのが当地の川原寺であることがわかるであろう。

10世紀の始めの頃に編纂された延喜式巻39内膳司式によれば、園神祭14座のうち長岡園3座、羽東師園3座とある。従って平安時代羽東師には内膳司に材料を提供する園があったことが知られる。

淀川に臨む良港山崎と平安京の羅城門とを結ぶ道路の旧乙訓郡側は、まったく正東西南北の条理の蛙畔を無視して、ほぼ45度の傾きを持って山崎から東北のほうへ延びている。この道は後世久我縄手または京道と呼ばれていた。旧紀伊郡側では、羅城門からまっすぐに南へ延びる道は鳥羽の作道といわれ、桂川に架かる高橋によって連結されていた。

久我縄手が造られたことは、羽東師神社や菱川、上久我にとっても大変重要なことであろうが、その開設の時期は明らかでない。恐らく平安遷都後そう遠くない時期であろう。

なお清水、古川集落の東側を桂川にそって重要な道路があったこと、赤井河原(今の上桶爪)付近に河津や橋があり、刑場にもなっていたことが、今昔物語、その他によって知られている。すなわち羽東師郷付近は、交通の要路に沿う地方として大切な位置を占めていたのであろう。

この付近の荘園として注目すべきものに菱川荘がある。藤原頼長の台記別記仁平3年(1153)8月8日に菱河御荘とあるのを初見とするが、関白の渡領であったらしい。次に小塩荘がある。小塩の名は古今集に歌枕としてしばしば現れ、今も西京区大原野地区の一集

落として小塩と呼ばれる在所がある。向日市から善峰寺や三鈷寺へ行く途中に通る山麓の在所である。最近九条家文書によってその荘域の一部が明らかになった。それによるところの荘は、菱川、古川、清水、馬場、古市、開田、神足、勝蔵寺、海印寺、上野（上植野）水たり（水垂）、火爪（樋爪）、あか井（上樋爪）、円明寺、下宿（下植野の西北部）、野村（井ノ内の一部?）、今里、山崎にわたって散在した小さな田地を集めた荘園である。建長2年（1250）11月の記事を初見とし、随心院文書・東福寺文書・三鈷寺文書などにしばしば出ている。今度の学校建設予定地の小塩は、正しく小塩荘の荘田の一部か、または荘園の出張所でもあったものであろうか。

羽束師荘も田9町2段120歩とあり、建長2年（1250）に初見している。

長岡荘も菱川の西北にある散在荘で、鶏冠井（かいで）の中の小字山科などは本荘園の一部である。

鶏冠井荘は、前期の長岡荘の一部が独立して扱われるようになったらしい。後に、大徳寺家から善峰寺へ寄付されている。

清水本荘は三鈷寺文書暦応2年（1339）10月3日に初見する。南北朝時代久我家が北朝方として重要な地位についたために、このあたりに関する記事も多くなる。

河原崎荘は石清水八幡宮寺領34箇所の中の一つで、上桶爪付近にあったらしく、大赤目荘、小赤目荘、赤目荘も赤井（上桶爪）付近にあったものらしい。

久我本荘、久我新荘は正治元年（1199）の明月記の中に記事がある。久我荘を内大臣源通親に奉った人があったから、内大臣はすこぶる機嫌がよかったという。長らく久我家の重要財産であった。

もともと高燥の地ではなかったこのあたりは、豊臣秀吉によって宇治川・桂川・木津川に太閤堤が造られると、洪水の際に悪水のはけ口がないのに苦しみ、良田もしだいに芦荻の茂る荒田となっていった。そこで大規模な河川改修工事を行って浸水の害を少なくしようと考えたのが、羽束師神社神官古川為邦であった。しかし実際にその成功へ努力して完成したのはその子の為猛であった。為猛は文政3年（1820）より17年間の歳月を費やして、久我から大山崎に至る延長5,382.5mにおよぶ羽束師川を完成した。羽束師川は計画的河川であるから川幅も5間、7間と一定しており、用水・排水路として今も大いに役立っている。



## 2 長岡京の研究

### 明治以後の長岡京の研究

明治 33 年 (1900) 発行の吉田東伍著『大日本地名辞典』「上方」の中に

「長岡、長岡は桓武帝数年奠郡の地にして、その宮城址は向日町大字鶏冠井に存すという。因りて按ずるに長岡京の方境は今の向日町乙訓村新神足村にわたり、南は大山崎村、淀川に臨むものの如し、大略向日岡を北至として乙訓川（一名長瀬）左右を京城と定められしならん。……宮城の規則は平城平安の二京に同じ。相比視して其大略を察知すべし……」

「長井郷……長岡の地は廢都の後、物集長井鞆岡山崎の四郷を分置せらる……」

とあって向日市より大山崎町へ広がった都を想定している。

大正 4 年 (1945) 8 月発行の喜田定吉著『帝都』において博士は、「……長岡京の宮城の所在は、その長岡の南端すなわち向日町のあたりを主要部としたもので、京城はそれより左右にわたり、南方に延びておったものと察せられる。今向日町の市街の東方に、長岡宮大極殿址の碑が建設されている。その地は方一町ばかりの小字を大極殿といっているところで、その北に接して小字を荒内と称する。荒内は大津京においてみどころの蟻の内と同じく、荒廢したる内裏の称を伝えたるものに相違ない。すなわち大極殿の小字と相待って、宮城所在を明示するものといつてよい。その規模は明らかならぬが、思うに平城・平安に似たものであろう。……その地は東南の一隅、淀の低地に続いて幾分低湿であつたであろうけれども、後世の歴史家が普通に想像する如く、その地狹隘にして帝都を造るに不適當であつたがために、中止して平安京に移つたというが如きものではない……」としながらも、遷都の翌年造宮長官藤原種継の横死により、工事は頓挫してほとんど進まなかつたとしている。

昭和 15 年 (1940) 吉田敬市博士は、京都大学文学部 2600 年記念論文集に「山城乙訓郡の条理」という論文を発表している。その中に、「……三代実録に長岡京旧条坊内に再び班田を施行せられ班田帳を造られたということである。……喜田博士は……長岡京は地形の関係上 1 間を京間 6 尺 5 寸とせず田舎間 6 尺としたため、条坊の地割りを定むるに旧来の条里地割りをそのまま用いたと述べていられる。卓説敬服に値する。……長岡京の条坊は旧来の条里地割りをそのまま利用したもので、条理地割りは長岡京建設によって、何ら実質的变化は認められなかつたと思われる。而して廢都後その条坊址に条里制が実施せられ班田図帳も造られた（三代実録）のである。故に長岡京旧址がまったくその痕跡さえみ

られない理由の一つは、確かに条坊地割りが条里地割りをそのまま用いた結果であろうと考えられる。」（引用文は現代風に直してある）とし、条坊の大きさに注目して、条坊は条里そのままを利用したと考えられた。

### 長岡京の図上復原

前述の通り、喜田貞吉博士も吉田敬市博士も長岡京の一町は 36 丈四方であるとされた。

ところが戦後俄百姓をしていた中山は、ふとしたことから自分の管理している田が 37.5 間の長さを持つ田であることを知った。37.5 間は条坊の 1 単位 75 間の半分である。そこでこの田が長岡京条坊と関係するのではないかと考え、三千分の一の地図にあてはめると、75 間幅の土地が、右京の各地にあることを知った。この道路と向日市にある大極殿・荒内・殿長などの地名と考え合わせて、およそ一条～九条の大路小路を復元してみた。

しかし、南北方向の朱雀大路その他の大小路については不明な点が多かった。すなわち大極殿という土地の東西幅が 450m、南北幅が 100m も広い上に、土地の古老の呼んでいる大極殿という地名がどうやら今の極殿地名よりもっと南にありそうに思えたからである。

ところが昭和 28 年の暮だったか、29 年の 1 月だったかは記憶に薄いのだが、その時に読んだ延暦 14 年 1 月 29 日付の大政官符に、蓮池らしい 40 丈四方位の湿田を発見した。その大政官符とは、

諸司田事 園池付出

大政官符

合島八町

長岡左京三条一坊八町九町十五町十六町。二坊三町四町六町

右七町刺旨藍圃

三条一坊十町

右一町近衛蓮池

というもので、過去にも何度か読み、その島の復元図を造ったこともあった。その際藍圃が左京にあることはわかるが、蓮池は右京かも知れないと思って決しかねていたものである。その印象深い近衛蓮池らしいものを発見したのである。早速これを一万分の一の地図に書き入れて条坊復元図を完成し、京都大学の歴史地理学界の大御所である藤岡健二郎教授のもとに持参して講評を求めた。教授は、

「君も知っているように自分ももとは考古学教室の出身だ。発掘によって証明してもらわないと承認できない。ぜひ発掘によって証明しなさい。」

と教えられた。

### 発掘の進行

その後、紆余曲折はあったが多くの方々のご指導とご助力により、宮域内外にわたって80回近い発掘を行った。

その結果いくばくかの収穫を得た。宮域内においては、朝堂院の中の大門（平安宮では会昌門と呼ばれるもの）以北についての、ほぼ全貌を明らかにすることができた。ところが朝集堂院や応天門については正しい位置が不明であるのはもちろん、その有無についてさえまだはっきりわからない。朝堂院は儀式専門の建築群となり歴代都域中最小のものかも知れないが、大極殿院では小安殿がはじめて独立した。内裏が完全に朝堂院から分離した。内裏の築地回廊は平城京では堀立柱であるが、長岡京では礎石の上に立っている。

宮内では幾つかの建築跡が発掘済みであるが、それが何省の何という役所の建物かということはほとんどわかっていない。

京域では、当時都内最大であった乙訓寺の講堂とその左右に続く廊の存在がはっきりしている。京都府立向陽高等学校建設の事前調査の際、左京の東大宮大路の東側溝と三条大路の南・北両側溝、その一本北の小路の南・北両側溝もはっきりしたが、その距離間隔については右京での知見とは違ったものがあるようである。

#### すなわち

- 1 三条大路の幅が道路面で10.0m、両側溝を含め14.7m、三条大路の北側の小路（平安京では姉小路と呼ぶ）が道路幅4.3m、両側溝を含めた幅7.9mとなっていて、平安・平城両京の大路8丈（約24m）、小路4丈（約12m）に比べて非常に狭いこと。
- 2 三条大路と北側小路間の1町分の長さが116.5m、両道路心々間129mとなっていて、平安・平城両京のそれぞれ400尺（約120m）、460尺（約138m）に比べてやや短いこと、また長岡京の右京の道路に条坊の痕跡のある三条坊門小路と、五条坊門小路の距離1,080mから割り出した1町分の道路を含めた平均の長さ135mとも異なること、また平安遺文によると道路と道路の間が400尺となっているものとも異なっている。
- 3 朱雀大路心から東大宮大路東側溝東端までの距離589.5mと大内裏南端推定地から三条大路心までの距離566mは、平城京のそれぞれ約556m、約550m、平安京のそれぞれ約604m、約577mに比べるといずれも中間的な数値を示していること。

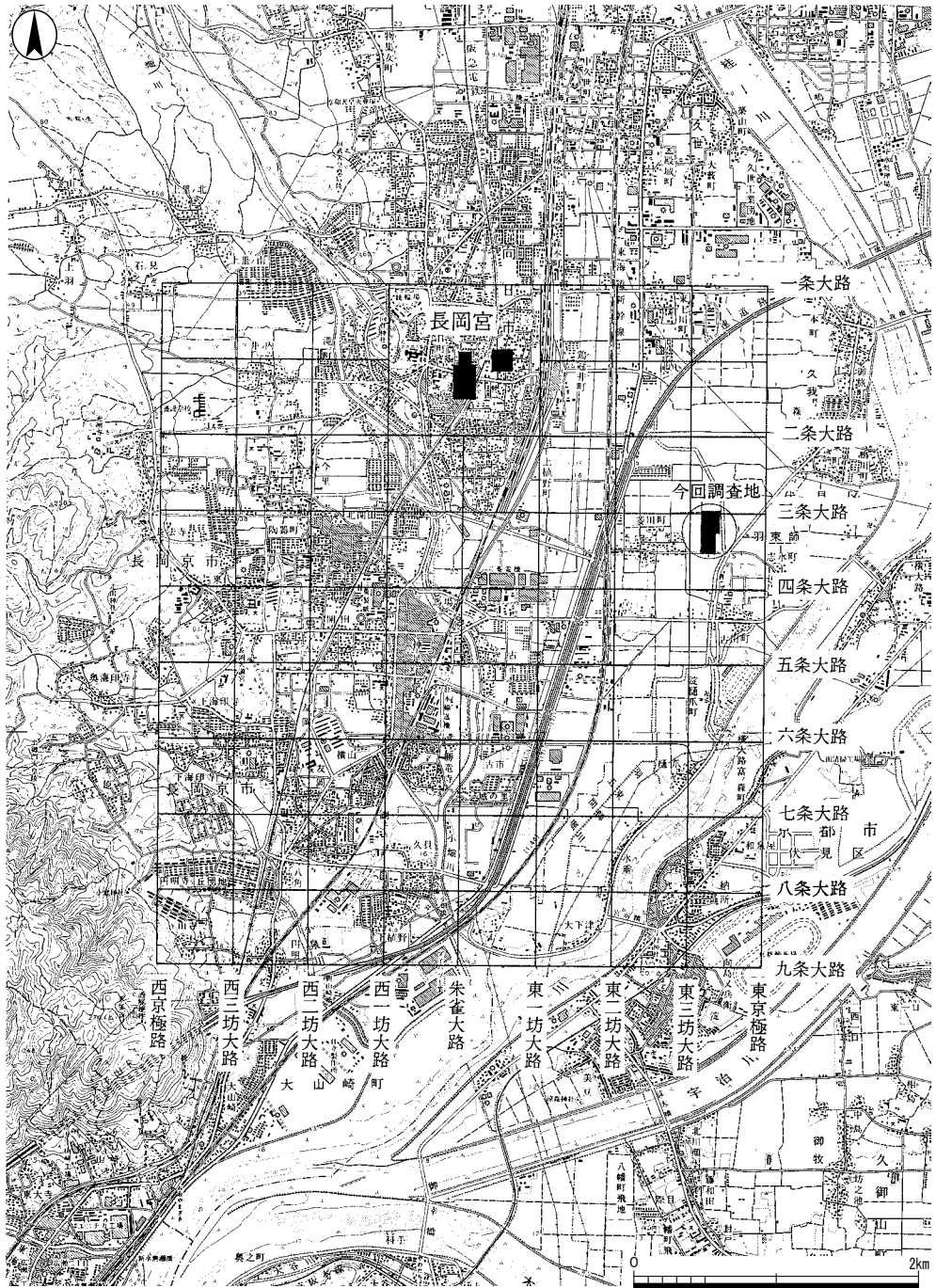


Fig.1 長岡京・宮の位置と調査地 (1:50,000)

以上のように右京の平均距離や平安遺文の文献による数値とも違う結果がでている。

しかし条坊については、まだ研究が糸口に達したばかりであるから、今度の発掘にかけた期待は大きかった。

第1にこの区域のような低湿地が当時住宅用地になり得たかどうか。長岡京の廃都の原因に洪水を取り上げる議論が圧倒的であるが、延暦11年(792)の大洪水の後までも、この低湿地は住居地として存在でき得たかどうか。

第2に住宅用地になり得たならば、長岡京の条坊制度がどのような形であったか。先の向陽高校の知見とどの程度合致し、どの程度異なるのか。

以上の2点に関する調査成果は後章で説明してくれるであろう。

Tab.1 長岡京・宮調査一覧表

次数	年・月	地区	所在地	面積	推定遺構	文献
宮・1次	S.30・1～4月	A地区	向日市鶏冠井町山畑		会昌門	『長岡京発掘』
2次	S.31・4月	B地区	向日市鶏冠井町山畑		豊楽院	
3次	S.34・4～7月	C1地区	向日市鶏冠井町大極殿		昭慶門と回廊	『長岡京発掘』
4次	S.34・4～7月	D地区			昭慶門東北130m	
5次	S.34・4～7月	E地区			昭慶門北部	
6次	S.34・4～7月	F地区	向日市鶏冠井町祓所	190 m <sup>2</sup>	朝堂院東第1堂	『府・概 S.41』
7次	S.36・3～4月	G地区	向日市鶏冠井町大極殿		小安殿	『長岡京発掘』
8次	S.36・4月	H地区	向日市鶏冠井町大極殿		大極殿	『長岡京発掘』
9次	S.38・12月	C2地区	向日市鶏冠井町大極殿		大極殿院東回廊	『長岡京発掘』
10次	S.39・7～8月	J地区	向日市鶏冠井町山畑	950 m <sup>2</sup>	朝堂院西第3堂	『府・概 S.39』
11次	S.40・4～5月	K地区	向日市鶏冠井町山畑	400 m <sup>2</sup>	朝堂院西第2堂	『府・概 S.40』
12次	S.40・4～5月	L地区	向日市鶏冠井町山畑		会昌門東北部分	『府・概 S.40』
13次	S.40・4～5月	M地区	向日市鶏冠井町山畑	200 m <sup>2</sup>	朝堂院東第3堂	『府・概 S.40』
14次	S.41・4月	N地区	向日市鶏冠井町祓所	730 m <sup>2</sup>	朝堂院東第1堂	『府・概 S.41』
15次	S.41・11月	B2地区	向日市上植野町御塔道	30 m <sup>2</sup>	豊楽院	『府・概 S.44』
16次	S.41・12月	P1地区	向日市鶏冠井町荒内		内裏回廊西北隅	『府・概 S.41』
17次	S.42・3月	P2地区	向日市鶏冠井町御屋敷		内裏回廊北辺	『府・概 S.41』
18次	S.42・6～8月	P3地区	向日市鶏冠井町荒内		内裏回廊西辺	『府・概 S.42』
19次	S.43・3～4月	Q地区		100 m <sup>2</sup>	大極殿西北100m	『府・概 S.51』

次数	年・月	地区	所在地	面積	推定遺構	文献
20次	S. 43・6～7月	B3地区	向日市鶏冠井町山畑	390㎡	豊楽院	『府・概S. 43』
21次	S. 43・8～9月	B4地区	向日市鶏冠井町山畑	290㎡	豊楽院	『府・概S. 43』
22次	S. 43・7～9月	P4地区	向日市鶏冠井町祓所	300㎡	内裏回廊西南隅	『府・概S. 43』
23次	S. 43・11～12月	R地区			左近衛府(?)	
24次	S. 44・2～3月	S地区	向日市鶏冠井町祓所	30㎡	大極殿院竜尾壇	『府・概S. 43』
25次	S. 44・4～5月	T1地区	向日市鶏冠井町山畑	300㎡	朝堂院南部	『府・概S. 44』
26次	S. 44・4～6月	T2地区	向日市鶏冠井町山畑	85㎡	朝堂院南部	『府・概S. 44』
27次	S. 44・7～10月	P5地区	向日市鶏冠井町東井戸	430㎡	内裏正殿	『府・概S. 44』
28次	S. 44・8～9月	B5地区	向日市上植野町御塔道	100㎡	豊楽院	『府・概S. 44』
29次	S. 44・9～11月	U地区	向日市森本町下森本	100㎡	内裏北方230m	『府・概S. 44』
30次	S. 44・10～11月	R1地区	向日市森本町下森本			『府・概S. 45』
31次	S. 45・2～3月	V1地区	向日市森本町下森本			『森本・概S. 45』
32次	S. 45・4～5月	V2地区	向日市森本町下森本			『府・概S. 45』
33次	S. 45・6～7月	X地区	向日市鶏冠井町大極殿		大極殿北方120m	『府・概S. 45』
34次	S. 45・7～8月	Y地区	向日市寺戸町東野辺	1700㎡	北方官衛	『府・概S. 45』
35次	S. 46・2～3月	W地区	向日市寺戸町殿長	320㎡	宮城北端	『府・概S. 45』
36次	S. 46・7～9月	13A地区	向日市寺戸町中ノ段			『府・概S. 46』
37次	S. 46・7～9月	14A地区	向日市鶏冠井町大極殿	320㎡	大極殿西北150m	『府・概S. 46』
38次	S. 46・7～9月	8A地区	向日市鶏冠井町御屋敷	350㎡	蘭林坊	『府・概S. 46』
39次	S. 46・8月	19A地区				
40次	S. 46・8月	14B地区			豊楽院	
41次	S. 47・3月	9A地区			内裏内進物所	
42次	S. 47・6～7月	15A地区				
43次	S. 47・7～8月	8A地区	向日市鶏冠井町御屋敷	300㎡	蘭林坊	『府・概S. 47』
44次	S. 47・7月	9B地区	向日市鶏冠井町山畑	90㎡	朝堂院東30m	『府・概S. 47』
45次	S. 47・8月	10A地区	向日市鶏冠井町堀ノ内	65㎡	内裏南方200m	『府・概S. 47』
46次	S. 47・8月	14C地区			豊楽院	
47次	S. 47・9～10月	14D地区	向日市鶏冠井町大極殿	160㎡	朝堂院北20m	『府・概S. 47』
48次	S. 47・12～2月	7A地区				
49次	S. 48・2月	7B地区				
50次	S. 48・2～3月	9C地区	向日市鶏冠井町東井戸	70㎡	内裏正殿東南	『府・概S. 47』
51次	S. 48・2～3月	9D地区	向日市鶏冠井町祓所	60㎡	内裏内進物所	『府・概S. 47』
52次	S. 48・7～8月	9B地区	向日市鶏冠井町山畑	350㎡	朝堂院東方	『府・概S. 48』
53次	S. 48・7～8月	9E地区	向日市鶏冠井町堀ノ内	450㎡	内裏南方	『府・概S. 48』
54次	S. 48・7～8月	15C地区	向日市鶏冠井町野上山	50㎡	宮南限	『府・概S. 48』
55次	S. 48・11～12月	9F地区	向日市鶏冠井町祓所	150㎡	内裏南外郭	『府・概S. 48』
56次	S. 49・2月	4A地区	向日市鶏冠井町御屋敷	300㎡	内裏北東	『府・概S. 48』

次数	年・月	地区	所在地	面積	推定遺構	文献
57次	S.49・6～7月	14E地区	向日市向日町南山		官衛	『京都考古17』
58次	S.50・1月	15D地区	向日市上植野町御塔道	120㎡	南限近く	『府・概S.49』
59次	S.50・1～3月	4A地区	向日市鶏冠井町御屋敷	260㎡	内裏北東	『府・概S.49』
60次	S.50・1～3月	4B地区	向日市鶏冠井町御屋敷	200㎡	宮東限	『府・概S.49』
61次	S.50・3月	1A地区	向日市森本町上森本	55㎡	宮東限	『京都考古17』
62次	S.50・9～11月	14F地区	向日市鶏冠井町大極殿	600㎡	豊楽院東華堂	『府・概S.50』
63次	S.50・11～12月	7C地区	向日市鶏冠井町山畑	100㎡	官衛	『府・概S.50』
64次	S.51・3～5月	6A地区	向日市寺戸町岸ノ下		官衛	
65次	S.51・7～8月	19C地区	向日市向日町南山		南園回廊	
66次	S.51・9～10月	14G地区	向日市鶏冠井町楓畑		豊楽院	『府・概S.51』
67次	S.51・9～11月	14H地区	向日市鶏冠井町山畑		豊楽院	
68次	S.51・11～2月	10B地区	向日市 <small>鶏冠井町山畑 上植野町南開</small>		朝堂院東南	
69次	S.52・2月	11A地区	向日市寺戸町殿長		官衛	
70次	S.52・3月	8B地区	向日市鶏冠井町大極殿		内裏と朝堂院の間	
71次	S.52・3月	15D地区	向日市上植野町御塔道		官衛	
左・1次	S.49・1～2月		向日市上植野町五の坪		左京三条二坊	
2次	S.49・7～2月		向日市上植野町西大田	1,000㎡	左京三条二坊	『府・概S.49』
3次	S.50・3月		京都市伏見区納所		左京九条三坊	
4次	S.50・5～7月		向日市上植野町西大田		左京三条二坊	『府・概S.50』
5次	S.50・8月		長岡京市勝竜寺 京都市伏見区淀		左京九条一坊	
6次	S.51・7～9月		京都市伏見区羽束師		左京四条三坊	
7次	S.51・8～10月		向日市上植野町中福地		左京四条二坊	
8次	S.51・10～11月		京都市伏見区羽束師		左京五条四坊	
<b>9次</b>	<b>S.51・12～4月</b>		<b>京都市伏見区羽束師菱川町</b>	<b>7,200㎡</b>		<b>本報告</b>
10次	S.51・12月		向日市森本町石田		左京一条二坊	『府・概S.51』
右・1次	S.41・		長岡京市今里町弘野		乙訓寺	
2次	S.45・		長岡京市今里町弘野		乙訓寺	
3次	S.47・		長岡京市今里町赤ノ上			
4次	S.48・		長岡京市今里町赤ノ上			

※ Tab.1の文献略号対照表(文献の発行年の前に記したSは昭和を示す)。

『長岡京発掘』→福山敏男・中山修一・高橋 徹・浪貝 毅 『長岡京発掘』昭和43年(1968)、NHK ブックス

『府・概』→『埋蔵文化財調査概報』各年次 京都府教育委員会

『京都考古』→『京都考古17』 昭和50年(1975) 京都考古刊行会

『森本・概S.45』→『森本遺跡発掘調査概報』 昭和45年(1970) 長岡京発掘調査団

## 第2章 調査の経緯

### 1 調査経過

#### 調査に至る経過

本調査は京都市伏見区羽東師菱川町（旧小字小塩）に所在する。近年、この地域における学童生徒の急増のため、地域住民より早急な学校新設が要望され、この地に京都市立神川小学校分校・同伏見中学校分校（いずれも仮称）新設が計画された。その事業主たる京都市教育委員会より京都市文化観光局文化財保護課へ埋蔵文化財についての問い合わせがあり、文化財保護課では、本地域が遺跡台帳により長岡京域内にあることが明白なため、

協議の結果、設立間もない当京都市埋蔵文化財研究所へ調査を依頼した。

委託を受けた当研究所は、学校建設の計画図を検討した結果、敷地全体に相当量の土盛りを行うため、校舎などの建物を除いては、遺構の破壊はないものと判断し、校舎・体育館・プールなどの建設予定地を中心に発掘を行うこととした。

しかし、遺跡の性格をかんがみした場合、トレンチ掘りで遺構を見逃すおそれがあり、しかも今日までの研究・調査成果により敷地内に長岡京の条坊、乙訓郡の

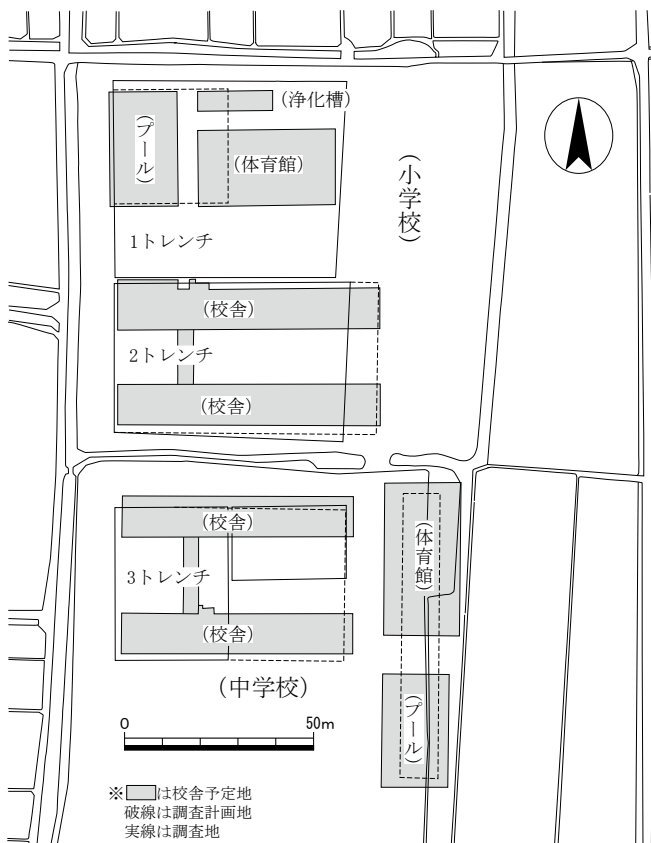


Fig. 2 調査区と校舎建設予定地(1:2,000)



条里遺構の発見が期待されるため、その意図に沿うよう調査地を設定した。ただし、乙訓郡条里については、その推定境界線が現在も農業用水路として生きている溝にあたるので、それを断ち切ることはできず、結局長岡京の条坊を追及することを第一義とした。条坊内の遺構については、建設予定地を全面発掘しても最大級 10 × 70m では遺構が調査地外へ延びる可能性が十分にあり、これを解消するために、小学校・中学校ともに 2 棟ずつ並列する校舎予定地を、2 棟間の中庭を含めて各々大きな発掘区として最大限 40 × 70m を計画した。当初の発掘予定面積は 6,850 m<sup>2</sup>であった。なお調査の結果、重要な遺構を発見した場合は、その保存を配慮するように申し入れた。

### 調査団の構成

この発掘計画をもとに、京都市と当研究所の間に調査委託契約をかわし、早速、当研究所を主体とする発掘調査団を編成した。人員構成は以下の通りである。

所 長 杉山信三

調査部長 田辺昭三

課 長 浪貝 毅

資料部長 木村捷三郎

課 長 江谷 寛

総務部長 松井克也

課 長 村内義廣

職 員 福西 喬 村木節也 吉田悦子 福島京子

### 発掘担当

調査委員 中山修一

調 査 員 牛嶋 茂 梅川光隆 平尾政幸 吉川義彦

補 助 員 家崎孝治 和泉田毅 磯部 勝 一村清美 太田勝康 鎌田茂子

下村貞之 巽 俊郎 田畑幸造 樽本正彦 津田正子 辻 裕司

寺井定子 西村慶子 山本奈々子 吉田勇夫 吉弘円秀 ほか 24 名

作 業 員 生嶋徳次郎 生嶋幸男 五十棲宏 大根清一 木村芳久 小寺伊佐雄

品川仙太郎 橋本健一 橋本 博 橋本政一 藤田太三郎 村上藤一

吉田藤三郎 吉田辰次郎 吉田保定 ほか 23 名

関係機関 京都市教育委員会

京都市文化観光局文化財保護課

## 調査の経過

当初の調査計画をもとに、昭和 51 年 (1976) 12 月 4 日から昭和 52 年 (1977) 4 月 23 日までの約 140 日間調査を実施した。この間、計 22 日を雨などによる作業中断や休日に費やし、実働日数約 120 日である。発掘面積は計 7,200 m<sup>2</sup>に及ぶ。

まず、層序および遺構面の確認のための試掘を終えたのち、学校敷地の西北に位置する一長岡京条坊の遺構の検出が期待される -1 トレンチから調査に着手し、堀削機械を搬入し全面を遺構面まで除去した。遺構検出の結果、トレンチの東および南に遺構が延びることが予想され、当初の予定を変更して、東は 30m、南は 2 トレンチの壁際まで拡張することにした。一方、堀削中の観察から、遺構検出の期待が薄いと思われる 3 トレンチを当初の予定より面積を縮小した。発掘作業は機械による堀削を終えた順に、3 トレンチ・1 トレンチ・2 トレンチと進んだ。途中、寒波に見舞われ、地表面が凍結し排土作業の不可能な日が続いたり、降雨により発掘区全体が満水状態となり排水作業に 2～3 日かかった時もあった。

このような状況の中で、調査の大半を排土作業に費やすという過酷なものであったが、得られた成果は多大であった。1 トレンチでは拡大部分を合わせて、北部に東西方向の溝が 4 条、中央部から西部にかけて建物が 10 棟、柵が 5 列検出され、また東部では東へ向かって湿地が形成されていた。それと共に、建物や溝に切られた発掘区中央、北部より東南方向に向かい、中央部から南部では南に向かう古代の道路遺構も検出された。2 トレンチでは面積の割りに遺構が少なかったものの、建物 1 棟、柵 1 列のほか、溝を 1 条と 1 トレンチの湿地の続きが検出された。3 トレンチでは大きく蛇行する南北方向の川が検出され、この付近は旧河川の氾濫原であることがわかり、この川に切られる東西方向の溝も検出された。

これらの遺構は、長岡京関係の遺構が多く、とりわけ 1 トレンチ北半で検出された溝群は、長岡京三条大路と推測される重要な遺構であることが判明したため、関係者に保存を要望したところ、この上に予定されていたプールなどの配置の設計変更が認められた。

現在遺跡には厚く土盛りが行われ、校舎建設工事が進み、地下の遺構は知る由もない。発見された推定三条大路の地点標示なり地上復元なりの何らかの手段を講じるよう、深く関係者に要望する。

なお発掘および整理期間中に下記の諸氏・諸機関にはいろいろと御教示・御協力を賜った。銘記して謝意を表する。 (敬称略)

個人 高橋美久二 百瀬ちどり 都出比呂志 永田信一 泉 拓良 宇野隆男

清水芳裕 西田 弘 小野ひとみ

機 関 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 京都府教育委員会 向日市教育委員会  
平安高校考古学クラブ 菱川町町内会

## 2 調査日誌抄

昭和 51 年 (1976)

12/4 現場事務所設営準備

12/6 発掘機材搬入。発掘区設定。学校敷地の西北隅近くに仮原点を設け、現存畦畔にあわせて南北の仮基準線をとる。原点を西北隅とする 30 × 30m のグリットを 1 トレンチ、原点より 50m 南を西北隅とする東西 70m・南北 40m のグリットを 2 トレンチ、原点より 110m 南を西北隅とする東西 60m・南北 40m のグリットを 3 トレンチ、原点より 105m 南・70m 東を西北隅とする東西 10m・南北 75m を 4 トレンチとする。計 6,850 m<sup>2</sup>を発掘予定。敷地外周に安全柵を設ける。

12/7 3 トレンチ西辺を幅 50cm ほど試掘。床土下に一応ベースと考えられる黄色斑文入りの砂質粘性土があり、この上面までを機械で掘削することにする。(後記、実際の遺構面はこの一層下にある。このため余分な労力と時間を費やす。)

12/8 昨夜の雨で機械の掘削不可能。

12/9 現場事務所完成

12/10 道路から発掘区までの地表面が軟弱なため、道路を整備。

12/11 機械による掘削開始。1 トレンチから着手し、深さ 60cm に揃える。

12/12 1 トレンチ掘削。トレンチ中央に南北方向に走る幅 3m の溝を検出。近代のものか。そのほか溝状遺構や柱穴らしきものもあるが、遺構内の埋土がベースに近く検出困難。

12/13 1 トレンチ掘削。中央北寄りに東西方向の溝 (SD02) を確認。

12/14 1 トレンチ掘削はほぼ完了。西側から清掃を開始。東北隅に斜方向の赤褐色土層を検出。旧道路か (SF05)。

12/15 1 トレンチ清掃。2 トレンチ掘削

12/16 1 トレンチ清掃。2 トレンチ掘削

12/17 雨のため作業中止

12/18 1 トレンチ・2 トレンチ排水作業。機械は 3 トレンチに回り掘削。敷地内のボーリング調査 (京都市教委) 始まる。

12/19 1 トレンチ中央を走る近代溝を、排水溝を兼ねて掘る。3 トレンチ掘削。近代溝のほかには遺構なし。ベースは北西隅が砂質粘性土で、東南隅近くには礫層・砂層があり、河川の堆積を示す。東西 30m、南北 40m を掘って遺構が期待で

きない場合は、当初の予定を変更し、遺構の期待される1トレンチの東・南辺を拡張することに決定。この時点で4トレンチの調査を放棄。

12/20 1トレンチ近代溝を掘る。染付と須恵器片各1片が出土したのみ。3トレンチ東西30m、南北40mの掘削完了。東北隅に褐色土を検出。その上面に弥生土器片がはりついている。この土層を追及するため、トレンチの東に東西30m、南北20mの拡張を決定。(この褐色土はSF05の南端にあたることが判明)。

12/21 1トレンチ遺構検出および清掃。3トレンチ掘削。

12/22 1トレンチSB06・09・11の一部を検出。3トレンチ掘削。午後雨のため作業中断。

12/23 排水作業。

12/24 排水作業。3トレンチ掘削完了。2トレンチ掘削開始。遺跡の座標を求めするための基準点を設定。

12/25 雨のため作業中止。

12/26 排水作業。1トレンチ拡張のため、掘削部分の断面実測。

12/27 トレンチの凍結のため遺構検出不可能。3トレンチの近代溝を掘る。

12/28 3トレンチの近代溝を掘る。この溝の肩にSD25を確認。

12/29 3トレンチ西北隅の床土の残りを削除。暗渠を掘る。京都市教委のボー

リング調査完了。

12/30 年末につき道具の整理・点検。

12/31 年末休み。

昭和52年(1977)

1/1～1/4 正月休み。

1/5 3トレンチ遺構検出。暗渠を掘る。

1/6 3トレンチ暗渠を掘る。

1/7 雨のため作業中止。

1/8 3トレンチを約20cmほど下げ、一層下の遺構検出を行う。SD25を検出。2トレンチ機械掘削。

1/9 3トレンチ掘り下げ続行。1トレンチ機械による拡張開始。2トレンチ掘削。

1/10 雨のため作業中止。

1/11 3トレンチSD25第1層を掘る。2トレンチ掘削。

1/12 3トレンチSD25第2層を掘る。黒色土器碗、土師器皿など平安中期の遺物が出土。2トレンチ掘削終了。

1/13 3トレンチSD25第2層・第3層を掘る。北半ではSD25の輪郭が不明瞭。

1/14 3トレンチSD25を掘る。SD25に切られるSD27・28を検出。

1/15 3トレンチSD25を掘る。南半では第2・3層を掘り下げ、北半では輪郭の追求。1トレンチ掘削。

1/16 3トレンチSD25、南半では第4層を、北半は第2層を掘る。北半では川の

蛇行による肩の崩落状態が良好に残る。

1 トレンチ掘削。

1/17 3 トレンチ SD25 全景写真撮影。1  
トレンチ拡張部分の清掃。SB06・11 の  
東限確認。

1/18 1 トレンチ近代溝を掘る。

1/19 1 トレンチ拡張部分の遺構検出。  
SD01～03 を検出。

1/20 1 トレンチ遺構検出。SB07 を検出。

1/21 1 トレンチ SB07 以南は第3層が  
残っているのでこれを除去。SB12 を検  
出。

1/22 1 トレンチ第3層を除去。SB15・  
SA17 を検出。

1/23 休日

1/24 1 トレンチ SD21 を検出。南西か  
ら堆積土を掘り始める。これを除去した  
段階で SA19 を検出。

1/25 1 トレンチ SD21、南西部および

SB12 の東部を掘る。SB12 の東部では炭  
化物を多く含む層があり、肩口から斜め  
に堆積している。この層から緑釉羽釜、  
須恵器、土師器、瓦などが出土。一括し  
て投棄された状態を示す。

1/26 1 トレンチ SD21 北西部分の肩の  
検出作業。SD01～03 と SD21 の切り合  
いは不明。結局、同時期と判定せざるを  
得ない。念のため SD01～03 の延長部分  
にセクションを残し、SD21 を掘る。セ  
クションをみると、S21 は東へ落ち込み、  
肩口から2～3mで水平堆積となる。ベー  
スは黒色土。堆積土は炭化物を含む薄い  
層を境にして、その上に明度の高い淡灰  
色粘性土、その下に暗い青灰色粘性土が  
堆積する。SD03 の延長部分には、青灰  
色粘性土の下に扇状の広がりを示す暗灰  
色粘性土がみられる。なお1 トレンチ北  
壁ぎりぎりに SD01～03 と同様な溝と思



Fig.3 1 トレンチ調査風景

われる SD04 のラインを一部確認した。  
午後雨のため作業中断。

1/27 1 トレンチ排水作業。SD21 を掘る。

1/28 1 トレンチ SD21 を掘る。本日までの調査で SD01 ～ SD04 と SD21 の関係がある程度判明した。まず SD01 ～ 03 中の堆積土は SD21 の上部堆積土である淡灰色粘性土とほとんど区別がつかず、SD01 ～ 04 は SD21 に流れ込んでいると考えられる。しかし SD02 ・ 03 と SD21 の関係を詳細に観察すると、SD03 の SD21 への落ち方は、SD21 のベースである黒色土まで下げないと確認できないが、SD02 の方は淡灰色粘性土を除去した青灰色粘性土の上で溝の延長を確認できる。これから、SD03 は SD21 の青灰色粘性土が堆積する前に掘溝されたものであり、SD02 は青灰色粘性土の堆積後に掘溝されたものである。SD01 ～ 04 を道路

の側溝とするならば、SD03 が対になり、SD02 と SD04 が対になると考えられる。またこれらに対応するように建物群もあり、SD02 と SD03 の観察から、SD01 ・ 03 → SD02 ・ 04 という新旧関係が想定できる。(後記、若干の考え違いのあることがその後わかった。後章でふれる。)

1/29 1 トレンチ SD21 を掘る。

1/30 1 トレンチ SD21 を掘る。

1/31 1 トレンチ SD21 を掘る。

2/1 1 トレンチ SD21 を掘る。中央部の遺構検出開始。柱穴の輪郭が不明瞭で、第5層上部面まで約10cmほど掘り下げる。SB13・14を検出。

2/2 1 トレンチ中央部遺構検出。SB14の堀形は1m四方もあり、大規模な建物であることが判明。SD21を掘る。

2/3 1 トレンチ中央部遺構検出。SB15に柱の抜き取り痕を確認。SB14と



Fig. 4 1 トレンチ調査風景

SB15 は柱穴が切り合い、SB14 が新しい。  
SB15 の南に柵 SA20 を検出。  
2/4 1 トレンチ SB14 の西柱筋の検出  
作業。  
2/5 1 トレンチ西部を第5層上面ま  
で下げる。  
2/6 休日  
2/7 1 トレンチ中央部の清掃  
2/8 1 トレンチ西北部分第3層の残  
りを除去。SD1 の延長部を検出。  
2/9 1 トレンチ西北部分掘り下げ、  
SD02 延長部分を検出。  
2/10 雪のため外作業中止。  
2/11 1 トレンチ西北部分掘り下げ。  
SD3 の延長部分は検出されず。  
2/12 1 トレンチ西部掘り下げ。清掃。  
2/13 1 トレンチ SB13 を掘る。  
2/14 1 トレンチ SB13 を掘る。柱跡  
は不明確。丸材ではなく角材の柱跡にみ  
えるものもある。SA20 は最西端だけに  
丸材を使用。そのほかは角材を使用。  
2/15 1 トレンチ写真撮影のための清  
掃。  
2/16 1 トレンチ写真撮影のための清  
掃。本日全景写真撮影の予定であったが、  
凍結のため、地表面に班が生じて撮影不  
可能。  
2/17 1 トレンチ昨日の失敗にこりて、  
地面を凍結させたまま全景写真撮影。午  
後 SB14 および SD01・02 を撮る。SB14

の柱抜き取り痕が不明瞭のため苦心。  
2/18 1 トレンチ SB14 および SD01・02  
を撮る。  
2/19 1 トレンチ SB14 および SD01・02  
を撮る。  
2/20 1 トレンチ SB14 および SD01・02  
を撮る。SD02・03 は SD21 近くで土擴状  
に深くなる。  
2/21 雨のため外作業中止。  
2/22 1 トレンチ排水。SB14 依然として  
抜き取り痕が不明瞭。  
2/23 1 トレンチ SB11 を掘る。柱跡が  
不明瞭で瓦などの放り込みがみられる。  
2/24 休日  
2/25 1 トレンチ写真撮影のため清掃。  
SB14 の抜き取り痕のプランによる確認  
を放棄。午後、雨のため作業中止。  
2/26 1 トレンチ写真撮影のための清  
掃。  
2/27 1 トレンチ写真撮影のための清  
掃。  
2/28 1 トレンチ写真撮影。  
3/1 1 トレンチ写真撮影。2 トレンチ  
清掃。近代溝を掘る。  
3/2 2 トレンチ近代溝を掘る。午後  
雨のため作業中断。  
3/3 2 トレンチ近代溝を掘る。中央  
部第3層を除去。  
3/4 2 トレンチ中央部第3層を除去。  
南寄りで柱穴を検出。ただし規模は不明。

3/5 2トレンチ西南部第3・4層を掘る。遣方設定開始。

3/6 2トレンチ西南部第4層を掘り  
終え清掃。遺構なし。

3/7 2トレンチ西部第3・4層を掘る。

3/8 2トレンチ西部清掃。SA23を検  
出。

3/9 2トレンチ西部第3・4層を掘る。

3/10 2トレンチ西北部第4層を掘る。

3/11 2トレンチ西北部第4層を掘り  
終える。SD22を検出し掘る。SD22は第  
5層から切り込み、今までの建物・溝よ  
りも古い。

3/12 2トレンチSD22をほぼ掘り終え  
清掃。中央部清掃。SA23の続きを確認。

3/13 休日

3/14 2トレンチSD21を北部から掘り  
始める。1トレンチ実測開始。



Fig. 5 2トレンチ調査風景

3/15 2トレンチSD21を掘る。1トレン  
チ実測。

3/16 2トレンチSD21を掘る。中央部  
やや南寄りで遺物がまとまって出土。そ  
の状態は1トレンチSB12の東方におけ  
る遺物出土状態に類似。炭化物を多く含  
む。1トレンチ実測。

3/17 雨のため外作業中止。

3/18 排水ののち、2トレンチSD21を  
掘る。

3/19 2トレンチSD21の南部分を掘る。  
1トレンチと異なり青灰色粘性土の下に  
砂層がある。

3/20 2トレンチSD21の南部分を掘る。

3/21 2トレンチSD21の南部分を掘る。  
青灰色粘性土の下の砂層はSD22の堆積  
層らしい。従ってSD21の形成時期がさ  
かのぼるもよう。SD21の西側で柱穴を  
発見。この肩口付近を精査したところ、  
以前検出した柱穴を含めて、建物になる  
ことが判明(SB24)。調査区外周にトラ  
バースを組む。

3/22 2トレンチ昨日検出したSB24を  
追求するため約5cmほど下げる。その結  
果、3×5間で、南一面に廂を持つこと  
が判明。午後雨のため作業中止。

3/23 雨のため作業中止。

3/24 午前雨。午後排水および2トレン  
チSD21を掘る。

3/25 2トレンチSD21を掘る。



- 3/26 2 トレンチ SD21 を掘る。東南部分ではベースである黒色土が東にゆるやかに上がる。1 トレンチ SD21 を実測。
- 3/27 2 トレンチ SD21 を掘る。1 トレンチ実測。
- 3/28 2 トレンチ SD21 を掘る。1 トレンチ実測。
- 3/29 2 トレンチ SD21 を掘る。1 トレンチ実測。
- 3/30 雨のため外作業中止。
- 3/31 排水作業。
- 4/1 排水作業
- 4/2 2 トレンチ SD21 を掘る。1 トレンチ実測。
- 4/3 1 トレンチ柱穴断ち割り。2 トレンチ実測。
- 4/4 1 トレンチ柱穴断ち割りおよび実測。2 トレンチ実測。
- 4/5 1 トレンチ柱穴断ち割りおよび実測。2 トレンチ SD21 を掘る。
- 4/6 2 トレンチ SD21 を掘る。1 トレンチ断面実測。
- 4/7 雨のため外作業中止。
- 4/8 2 トレンチ SD24 を掘る。1 トレンチ断面実測。
- 4/9 雨のため外作業中止。
- 4/10 2 トレンチ清掃および実測。SB24 を掘る。
- 4/11 2 トレンチ写真撮影。
- 4/12 1 トレンチ柱穴断ち割りおよび実測。2 トレンチ実測。
- 4/13 1 トレンチ柱穴断ち割り。2 トレンチ実測。
- 4/14 1・2 トレンチ断面実測。3 トレンチ、1・2 トレンチの遺構検出を終えた結果、以前に3 トレンチで検出したまま放置していた溝が、重要となったのでその確認。
- 4/15 1 トレンチ柱穴断面実測。2 トレンチ断面実測。3 トレンチ第3層を完全に掘り下げ、溝以外遺構のないことを確認。溝は計3条 (SD26～28)。溝の実測。写真は溝が断片的なため不可。午後雨のため作業中止。
- 4/16 排水作業。現場にて記者発表。
- 4/17 1・2 トレンチ断面実測。3 トレンチ実測。本日現場説明会(交通ストの影響あり、見学者寡少)。
- 4/18 1 トレンチ断面実測。3 トレンチ SF05 の遺物採集。本日にて、おおかたの外作業が終了し、発掘資材搬出。
- 4/19 1 トレンチ断面実測。
- 4/20 調査地周辺の平板測量。機械による埋め戻し開始。
- 4/21 平板測量。
- 4/22 平板測量。
- 4/23 仮原点を敷地外へ移動。本日にて現場作業完了。
- 4/24 埋め戻し完了。  
※以後、研究所にて整理。

### 3 測量方法

#### グリットの呼称と地区割り

調査開始前に机上で発掘区を設定し、北から順に1・2・3・4トレンチと呼称する。1トレンチは当初30×30mであったが拡張により50×60mとなる。4トレンチは放棄したため、未発掘である。地区割りは、現場での発掘区設定の際、仮軸として現在の畦畔線を使用したため、実測基準とは関係なく行った。すべてのトレンチが第1象限に収まるよう、敷地西辺中央部やや南寄りに架空の原点(A、00)を設け、それより東へ10mごとにB、C、D、北へは、10mごとに10、20、30と軸線を取り、西南隅の座標を持って10m区画のグリットと呼称した。1トレンチの西南隅はB140、2トレンチの西南隅はB100、3トレンチの西南隅はB40である。なお、10m区画を4等分し、東北部分より時計回りにⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと細分したところもある。

#### 遣方の基準

調査区外周にBM<sub>0</sub>～BM<sub>2</sub>の測量基準点を設ける。このうちBM<sub>2</sub>は地区割りのA40ポイントにあたるが、ほかは任意の点である。相互の関係はトラバース測量によると以下のようである。

角度	距離
∠ BM <sub>2</sub> BM <sub>0</sub> BM <sub>1</sub> = 57° 20' 38"	BM <sub>0</sub> ～ BM <sub>1</sub> = 114.352m
∠ BM <sub>0</sub> BM <sub>1</sub> BM <sub>2</sub> = 84° 37' 52"	BM <sub>1</sub> ～ BM <sub>2</sub> = 157.260m
∠ BM <sub>1</sub> BM <sub>2</sub> BM <sub>0</sub> = 38° 01' 30"	BM <sub>2</sub> ～ BM <sub>0</sub> = 185.585m

遣方はBM<sub>2</sub>から真北を求め、これを遣方の軸として、各トレンチ4～8m間隔で設ける。遺構の集中する1トレンチでは、4m間隔のみで割り付ける。BM<sub>2</sub>における天測の結果は次のようである。

天 測 時 刻 昭和52年2月6日1時36分36秒  
経 度 東経135度44分46秒  
緯 度 北緯34度55分46秒  
北極星方位角 +0度47分05秒

また、国土地理院四等三角点021(水門)とBM<sub>0</sub>との距離を光波距離計で測り、方位角はBM<sub>2</sub>における天測の結果を使用して、各基準点の座標を求めた。

三角点 012 (水門) と BM<sub>0</sub> の距離 =747.625m

その方位角 139° 37' 23"

三角点 012 の座標 
$$\begin{pmatrix} X=-118^{\text{K}}041^{\text{m}}06^{\text{cm}} \\ Y=-25^{\text{K}}563^{\text{m}}79^{\text{cm}} \end{pmatrix}$$

これより、各基準点の座標は以下の通りである。

BM<sub>0</sub> 
$$\begin{pmatrix} X=-118^{\text{K}}593^{\text{m}}85^{\text{cm}} \\ Y=-25^{\text{K}}060^{\text{m}}43^{\text{cm}} \end{pmatrix}$$

BM<sub>1</sub> 
$$\begin{pmatrix} X=-118^{\text{K}}589^{\text{m}}58^{\text{cm}} \\ Y=-25^{\text{K}}174^{\text{m}}70^{\text{cm}} \end{pmatrix}$$

BM<sub>2</sub> 
$$\begin{pmatrix} X=-118^{\text{K}}746^{\text{m}}25^{\text{cm}} \\ Y=-25^{\text{K}}166^{\text{m}}33^{\text{cm}} \end{pmatrix}$$

### 水準高

レベルは京都市水準点 No. 42 (伏見区羽東師菱川町 1) を使用した。No. 42 の水準は昭和 50 年測量で、海拔 12.2155m である。

これより

BM<sub>0</sub>=11.135m

BM<sub>1</sub>=11.431m

BM<sub>2</sub>=11.179m

を得た。

各トレンチの水系レベルは次ぎのようである。

1 トレンチ BM<sub>2</sub>-0.600m=10.565m

2 トレンチ BM<sub>2</sub>-0.516m=10.649m

3 トレンチ BM<sub>2</sub>-0.391m=10.774m

ただしこの報告書はすべて海拔高に正している。

なお、調査後の位置表示のため、小学校敷地西側畦畔上に逃しのポイントを設定している。これは、BM<sub>2</sub> より、58.50m 北、47.23m 西である。

なお SD03・04 の中心線と建物 SB11 の南北中心線の交点は、BM<sub>2</sub> より東へ 43.95m、北へ 144.45m にあり、この座標は 
$$\begin{pmatrix} X=-118^{\text{K}}601^{\text{m}}80^{\text{cm}} \\ Y=-25^{\text{K}}122^{\text{m}}38^{\text{cm}} \end{pmatrix}$$
 である。

## 第3章 遺跡の調査

### 1 調査概要

調査の結果、検出された遺構の大半は1トレンチに集中し、2トレンチ・3トレンチではわずかである。従って記述の中心は1トレンチにあるが、遺構の性格・空間的広がりを考える上では、2トレンチ・3トレンチに遺構がまばらであることを確認し得たのもまた重要な成果である。

遺構の時期は長岡京を中心とするものが最も多く、古墳時代後期の遺構・平安時代中期の遺構もある。遺構の種類は建物、柵、溝、道路、低湿地、川と豊富である。

古墳時代後期の遺構として、1トレンチから3トレンチにまたがる古道 SF05、2トレンチの溝 SD22 がある。

長岡京期を中心とする遺構は各トレンチで検出している。1トレンチでは、建物・柵・溝・低湿地を検出した。中央に建物群があり、その北に溝群、東に低湿地、南に柵と三方を画するような遺構配置である。建物群はすべてが同時期に存在したものでなく、SB06・SB08・SB09・SB11のように建物が重なっていることから、最低4時期は考えられる。建物の規模はSB06のように3×7間廂付きのものから、SB08のように1×3間のものまであり、様々である。2トレンチでは、1トレンチより続く低湿地 SD21 がトレンチの東半を占めるが、その西に柵 SA23 と建物 SB24 を検出している。1トレンチの柵 SA20 と2トレンチの柵 SA23 の間に遺構はまったくなく、空地となっている。3トレンチでは、遺構の残存状態が極めて悪く、溝を3条検出しただけで建物は確認できなかった。

平安時代中期の遺構は3トレンチで川 SD25 を検出している。

このほか、各トレンチで数条の近代溝、多数の暗渠を検出したが、これらは現在の水田に関するもので、記述は省略する。

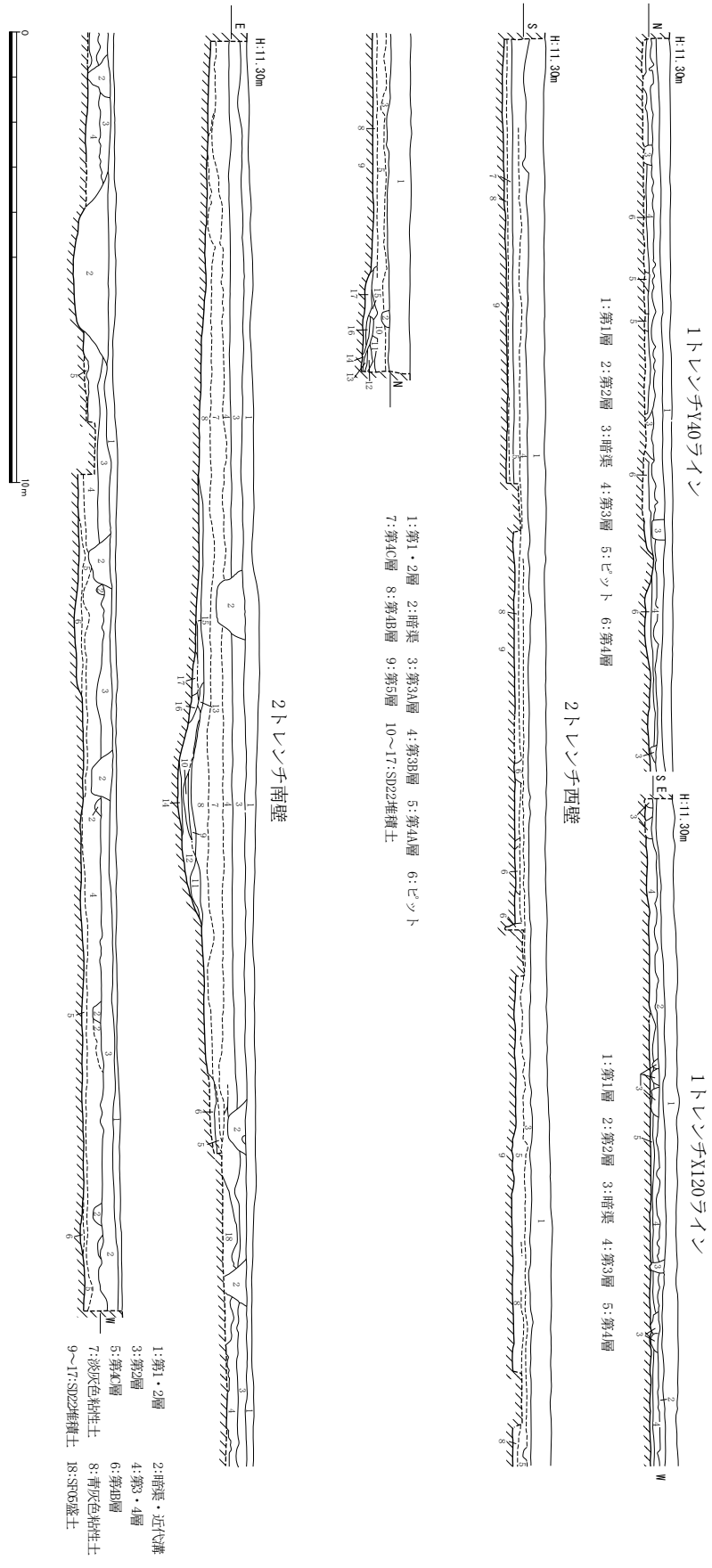


Fig. 6 1トレンチ・2トレンチ断面図(1:150)

## 2 層序

### 1 トレンチ

調査前まで水田として利用されていたが、地表面は西部では海拔高 11.50m であり、東へ行くにつれて水田一反ごとに約 5cm ずつ下がる。第 1 層（耕土）は厚さ 25～30cm でほぼ水平に堆積している。その下に第 2 層（床土）があり、厚さは 10～20cm で、その下の第 3 層との境は凸凹が激しく不連続である。第 3 層は水平堆積し、海拔高 10.55m に下面を揃える。厚さは、10～20cm である。褐色の鉄分を多く含み、幾分緑がかった灰色粘性土である。第 4 層は、古道 SF05 のところでは途切れているが、そのほかでは全面にみられる。厚さは 6cm 前後で、やや微砂を含む灰色粘性土である。第 5 層も 5～7cm と薄い。上面のレベルは 10.36m でほぼ水平堆積である。東部では、SD21 のベースとなり落ち込んでいる。この部分の厚さは、ボーリングの結果で 1m 以上の厚さがある。黒色から黒灰色の粘性土である。第 6 層はすべての遺構の完全なベースとなっている緑灰色粘性土となっている。

各層と遺構の関係は、近代溝および暗渠の大半は第 1 層の中位から切り込んでいる。一部の暗渠は第 2 層上面から切り込んでいる。SB06・SB11 などの建物は堀形内の埋土が第 3 層とほぼ同一で区別がつかないか、第 4 層以下を確実に切っている。しかし第 4 層上面から切り込んでいるのか、第 3 層中位もしくは第 3 層上面から切り込んでいるのか不明である。SD02・03 は第 4 層をベースとし、その上面から切り込む。SF05 は盛土などの層が入り込み複雑であるが、SF05 の土層内へ第 5 層が一部入り込んでいるので、第 5 層の形成時期前後のものである。SD21 は、その上に第 3 層が堆積しているので、それよりも古く、各層と SD02・03 の関係、SD02・03 と SD21 の関係を考慮に入れるならば、第 4 層と SD21 の青灰色粘性土が一部同時期に堆積したであろう。

### 2 トレンチ

耕土面のレベルは 11.05m 前後と、1 トレンチよりも幾分低くなっている。西がやや高く東へ行くにつれて低くなっていることは同じである。第 1 層と第 2 層を合わせた厚さは、40～45cm である。1 トレンチでは明瞭に区別できた第 3 層以下は、2 トレンチでは区別があいまいとなり、間層が多くなる。

トレンチ西壁では、1 トレンチに近い北部で、第 3 層が厚さ 7cm 前後、第 4 層が厚さ 15～18cm と、両層を加えた厚さは 1 トレンチとほぼ同一である。しかし、SD22 を境にして

第4層と第5層の間に間層が厚さ8～15cmでは入る。これを第4B層として第4層を第4A層とする。第4B層はやや青みが強く第5層のブロックを混入する。第4B層の下面つまり第5層の上面は、海拔高10.25mで1トレンチのそれよりも10cm低く、その分第4B層が堆積していることになる。西壁中央部では、第3層と第4層の間に間層が入り、これを第3B層とする。青みの強い灰色粘性土である。これに鉄分含んだものが1トレンチの第3層と思われ、2トレンチではこれを第3A層とする。西壁南部では第3A層が消失し、第1・2層の下はただちに第3B層となる。また、いかなる原因によってかは不明であるが、第4A層に鉄分の混入が多くなり、その土質は第3A層に近い。さらに第4A層と第4B層の間に砂質の強い第4C層が入る。

西壁の堆積状態を概観すると、第5層と第4B層はほぼ水平堆積で一定した厚さである。ただし南部では、第4B層の上に第4C層が入る。第3A層～第4A層はわずかながら南へ行くにつれ高くなる傾向を示し、それが南部における第3A層の消失という結果になっている。

西壁にかかる遺構と各層の関係をみると、SD22は2時期の流れがあり、古い方は第5層を肩とし、新しい方は第4B層を肩とする。従って第4B層はSD22が流路を変えない程度、もしくは機能を失わない程度の短期間の堆積であることがわかる。またSD22は古墳時代後期であるから、第4B層も同時期の堆積であり、第5層はそれ以前の堆積である。SA23は第4A層上面から切り込んでいる。

南壁では第3A層から第4A層の識別がほとんどできなかった。ただ第4B層や第4C層がSF05以西では西壁と同様の堆積をしていることから判断すると、第3A層から第4A層も同様な堆積をしていたと推定してよからう。SF05以东では大半がSD21の堆積土となり、淡灰色粘性土、青灰色粘性土が厚く堆積している。一部には第5層の水平面がみられ、そのレベルは海拔高9.88mとSF05以西より35cm低いが、これはSD21により削平されている可能性が強い。なお、東端では第5層上面が海拔10.15mにまで上がり、SF05最以西に近づくと、またSD21とSD22の上下関係が明確に認められる。

### 3 トレンチ

第1層上面は西端では海拔高11.10m、東端では同11.00mと東へしだいに下がる。2トレンチよりも幾分高い。第1層・第2層あわせて約40cmである。第3層は西端では厚さ30cm、東端では厚さ20cmであり、下面は東へ行くにつれて高くなる。南壁ではこの下にSD25がある。西壁では第3層の下に1トレンチの第6層がただちに現れ、第4・5層は消

失している。第6層の上面は海拔高 10.37m で、2 トレンチの第 4A 層、1 トレンチの第 5 層とレベルを同じくし、3 トレンチでは各土層が高くなっていることがわかる。SD26 ～ 28 はいずれも第 6 層上面で検出している。

各トレンチの層序を検討してみたが、基本層序は第 1・2・3・4・5・6 層であり、このうち不整な堆積面をなすのは第 2 層と第 3 層の境である。各層と検出した遺構の関係を表にまとめておく。

層	1 トレンチ	2 トレンチ	3 トレンチ
1 2	近代溝・暗渠	近代溝・暗渠	近代溝・暗渠
3		(3A) ----- (3B)	
4	SD01 ～ 04・SB06 ～ 15・ SA16 ～ 20・(SD21)	(4A) : (SD21)・SD23・SB24 ----- (4B) : SD22B ----- (4C) : SD22A	(消失)
5			(消失)
6	(SF05)	(SF05)	(SF05) SD25 ～ 28

Tab. 2 層序と遺構の関係（遺構は検出面）

### 3 古墳時代後期の遺構

#### 古道 F05

古道 SF05 は第 3 層を除去した面で赤褐色土層の帯として検出される。1 トレンチ北辺から東南へ約 23m 走り、そこから南方へ直線的に延びる。この延長部分は 2 トレンチを横切り、3 トレンチの北部まで続く。レベルは 1 トレンチから 2 トレンチにかけてはほぼ水平で、3 トレンチでは幾分下降する傾向がある。幅は最大幅約 3.5m で平たいかまぼこ状を呈する。中央部の 1.5m は地山が凹み、そこに赤褐色の砂質粘性土が堆積する。この層はプランでは一様にみえるが、断面の良好な 1 トレンチ北壁で断ち割り、できる限りの詳細な分層を行うと、必ずしも一様な堆積ではなく、幾度かの盛土を認める。

第 1 回の盛土は赤褐色砂質粘性土で、ベースである緑灰色粘性土の凹みはその時の堀り込みであるのか、第 2 回の盛土の際のものであるのかは不明である。盛土の東側にはそれが流れた形跡がある。盛土は堅くしまっている。

第 2 回の盛土は黒褐色砂質粘性土と灰色砂質粘性土で、いずれも赤みを帯びている。第 1 回の盛土よりも東へ 20cm ほど移動したところを中心に幅 2.8m で、第 1 回の盛土を包むように厚さ 15cm ほど盛っている。盛土の東側に幅 35cm、西側に幅 120cm の掘り込みを行っ



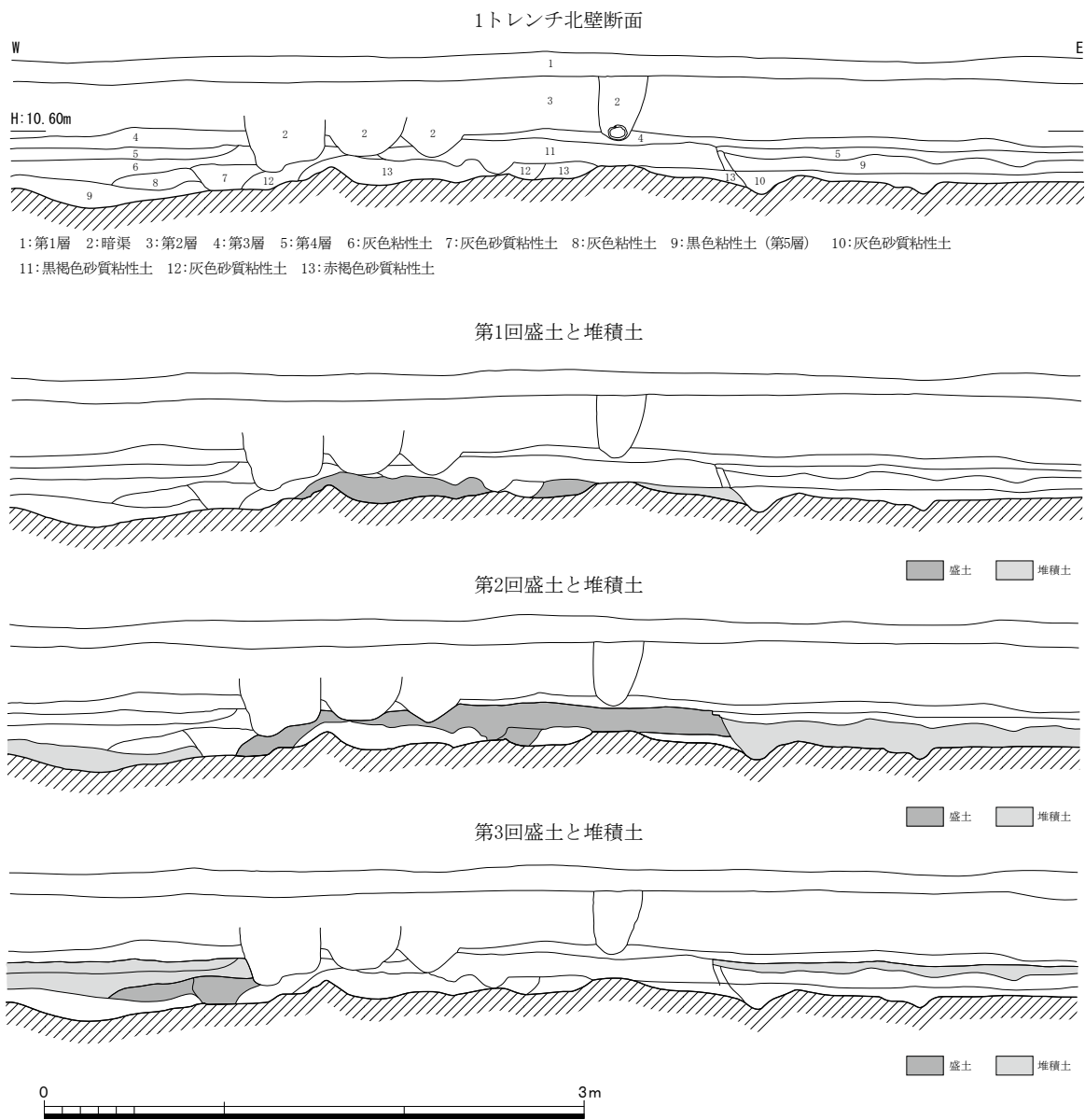


Fig.7 SF05 1トレンチ北壁断面と盛土模式図(1:40)

た可能性がある。この回の盛土ののち、古道の両側に砂質がかった灰色粘性土、黒色粘性土が堆積する。第2回の盛土も堅くしまり、発掘の際に第1回の盛土と第2回の盛土の境で明瞭に剥離した。

第3回の盛土は西側に一部確認するだけである。赤みを帯びた灰色砂質粘性土とそれよりも幾分黒味の強い灰色粘性土がそれである。あるいは第2回の盛土の流れ込みと考えた方が良いかもしれない。こののちに第4層である微砂を含む灰色粘性土が堆積している。その後、盛土が行われたかもしれないが、古道の上面と第4層の上面が同一レベルになっていることから判断すると、古道は第4層の堆積が終わった時期、もしくは第3層の堆積が開始される時期には古道としての機能を失っていたのであろう。

SD01～03、SB06・11・15、SA20、SD21・22などの遺構に切られ、検出された遺構のうちでは最も古い遺構である。1トレンチ・2トレンチではその盛土部分からの遺物は皆無であるが、3トレンチでは盛土部分からの弥生土器片と共に古墳時代後期の土器が出土している。同時期の溝SD22に切られていることから、古道SF05は古墳時代後期に限定できる。

なお、このSF05を古道とすることに疑問を持つ向きもあるが、盛土の確認により、自然堤防の高まりのような自然地形ではない。仮に盛土土層を人為的なものと認めず、自然的土層としても、それが直線的に一定の幅を持って走る現象の説明がつかない。

盛土土層を人為的なものとした場合でも、土塁などが一案としてあるが、その両側に堆積している第5層は、水田などのように、ある程度水のあるところに堆積したものであることを考慮に入れると、その機能があいまいである。SF05と並行するような柵、もしくは関連する建物はまったく検出されていない。

盛土部分だけが赤褐色もしくは黒褐色に色変する現象は、土質の酸化作用によるものと考えられ、その原因はかまぼこ状に高まった盛土部分にだけ草本類が生息したためと推測される。

第1回の盛土においても、第2回の盛土においても、その下部が溝状に凹む現象は、その上が踏み分け道であったことを明確に示しており、現在農道などに使用されている畦畔を断ち割った場合も、表土下に同様の現象をみることができる。

従って、これらの様々な現象は、これを古道と理解しない限り不可能である。

古道に側溝を伴っていたかは、断面では凹みと確認できる明確な掘り込みはなく、不明とせざるをえない。

## 溝 SD22

溝 SD22 は 2 トレンチを西北から東南に流れる。幅は西北部分では 4m、東南部分では 6.5m と南へ広がっているが、断面図でもわかるように肩口へ氾濫しており、正確な溝幅は求めにくい。二時期の流れがあり、古い方を SD22A、新しい方を SD22B とする。

SD22A は西北から 30m まで確認できるが、それ以南では SD22B に重なり、消失している。溝の東肩は SD22B により流失し、西肩だけ確認できる。深さは 25cm で浅い。西肩は第 5 層黒灰色粘性土を肩とし、堆積土は基本的には砂層と地山崩壊土の 2 層であるが複雑な層序をなしている。溝底面は海拔高 10m 前後で一定している。各断面で明らかのように、西肩に氾濫し、第 4 層に連なる。肩部にも幾つかの砂層があることより、幾回かの第 5 層への氾濫があったようである。この氾濫は東側においても広くみられる。1 トレンチ西北部、SD01・02 付近でもこの氾濫層に似た薄い砂層が第 5 層上面にみられ、SD22 が蛇行して 1 トレンチ西北部分近くに回り込んでいることが想定できる。

SD22B は SD22A の東側を幾分深く流れ、南部では SD22A を流失している。溝底面は西北部で海拔高 9.90m、中央部同 9.75m、東南部で同 9.35m とゆるい傾斜を持ち、西北から東南へ流れる。両肩とも SD22A の氾濫層を肩とする。堆積層は下部では黄灰色砂と（青）灰色粘性土の互層で、上部では灰色ないし青灰色の粘性土である。上部の粘性土は第 4 層との識別が困難で、それと同時堆積の可能性は充分にある。

溝の西層に沿って 2 列に杭を打っている。溝の肩際に打ち込んでいる杭は数本ずつ集中する傾向があり、溝肩から 1.2m 前後はなれて打ち込んでいる杭はほぼ 0.8m 間隔で並んでいる。杭は太さが 3～5cm 前後で丸杭と角杭があり、外側の列は角杭だけのようである。SD22B に関係すると思われる。

遺物は希少で、SD22B より弥生土器底部（第Ⅲ様式か）、古墳時代後期土師器甕、同須恵器甕など数点が出土しただけである。

ほかの遺構との切り合いは、SF05 を切り、SD21・SB24 に切られる。また溝内においては柱穴を確認し得なかったものの、SA23 の柱穴は溝の西側に堆積する氾濫層（第 4B 層）や第 4A 層を切り込んでいるので、SD22 が古い。

溝 SD22 は SF05 を切るなど、自然的な流れにしては不自然な流れ方で、当初は深さ 25cm 前後の浅い溝を人工的に掘り込んだものである。とすれば、浅い水位のところらに形成される第 5 層を肩として掘溝している意図を考えるならば、第 5 層を水田跡とする可能性は強くなるだろう。

SF05 と基本層序、SD22 と基本層序の関係の比較から、SF05 の第 3 回目の盛土と同時期か、

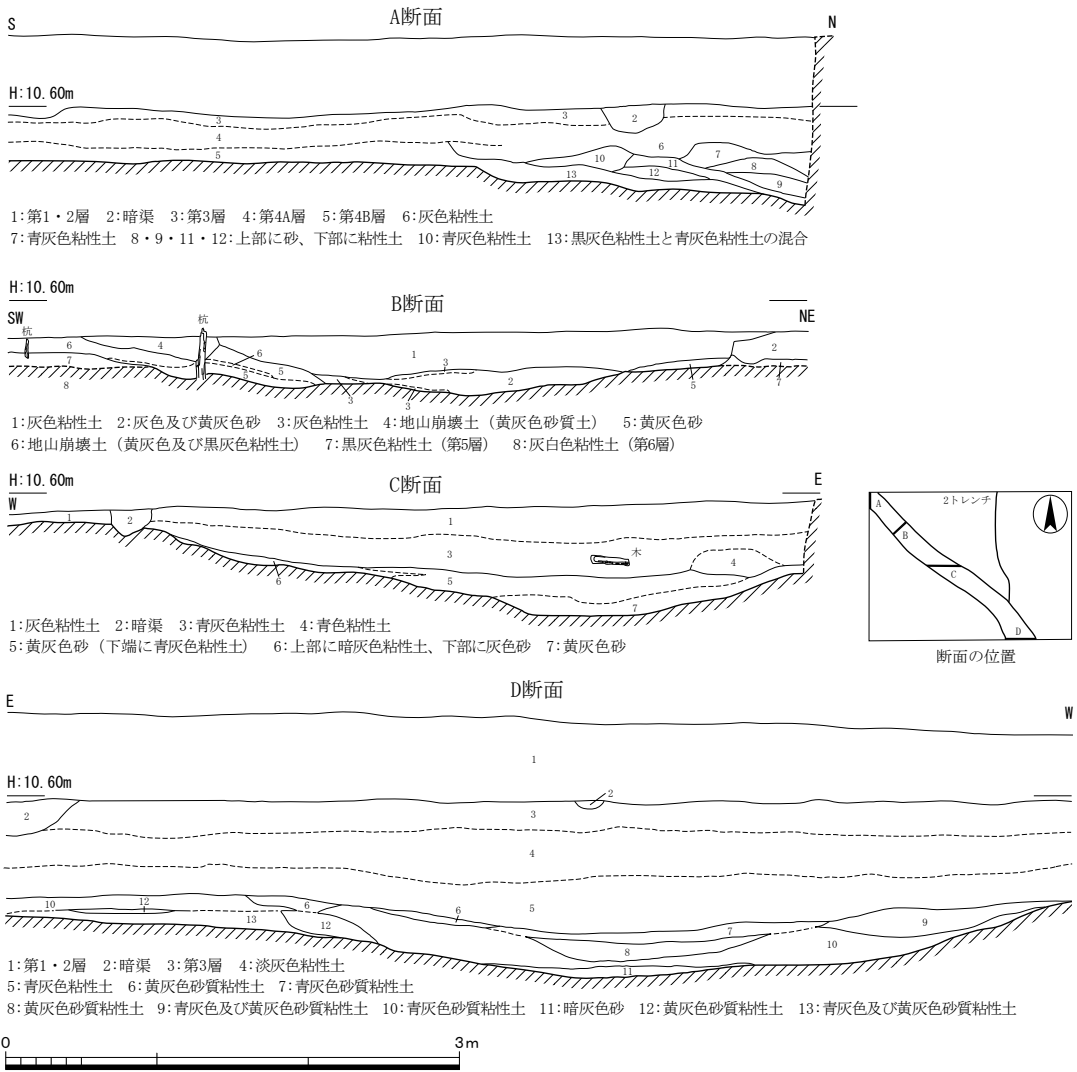


Fig. 9 SD22断面図(1:500)

その直前に SD22A が掘溝され、SF05 の第 3 回目の盛土後に SD22B が流れていたことになり、SF5 および SD22B の機能停止がほぼ同時期であることがわかる。そうすると、SF05 の通行を SD22 が妨げることとなるが、橋などの遺構は検出されなかった。



Fig. 8 SD22 杭列出土状態

#### 4 奈良時代後期から平安時代初期の遺構

この時期の遺構は建物、柵、溝、低湿地がある。この順に従って遺構番号の若いものから記述する。

遺構名	検出区	規模	方位	遺構名	検出区	規模	方位
SD01	1 トレンチ		N0° 50' W	SB15	1 トレンチ	2 × 3 間	N1° 18' W
SD02	〃		N0° 37' W	SA16	〃	3 間	N1° 01' W
SD03	〃		N0° 59' W	SA17	〃	2 間	N1° 57' W
SD04	〃			SA18	〃	3 間	N0° 13' E
SB06	〃	3 × 7 間	N0° 01' W	SA19	〃	2 間	
SB07	〃	2 × (4) 間	N0° 10' W	SA20	〃	7 間	
SB08	〃	1 × 3 間	N0° 48' W	SD21	1・2 トレンチ		
SB09	〃	1 × 6 間	N0° 30' W	SA23	2 トレンチ	(12 間)	
SB10	〃	2 × 3 間	N0° 18' W	SB24	〃	3 × 5 間	
SB11	〃	2 × 4 間	N0° 38' W	SD26	3 トレンチ		
SB12	〃	2 × 3 間	N0° 00' W	SD27	〃		
SB13	〃	3 × 5 間	N0° 56' W	SD28	〃		
SB14	〃	3 × 5 間	N0° 24' W				

Tab. 3 奈良時代後期から平安時代初期の遺構一覧表

##### 建物 SB06

1 トレンチ中央に位置する 3 × 7 間の建物で、南廂を持つ東西方向の建物である。堀形は母屋部分では 75cm 角で、四隅をわずかに切った形態である。南部分は一辺が 60 ～ 75cm の隅丸方形である。柱跡はプランで検出したものと断面で確認したものでは幾分異なる。プランでは柱跡が不明であっても、断面では堀形底部にわずかではあるが柱跡部分の凹みが現れる場合がある。断面の方がより確実性が強いため、以下の建物についても断面の観察結果をもとに記述する。柱跡は母屋 35cm、廂 35cm 前後の円形プランである。柱跡の底面は各柱筋ともに東または南に高くなる傾向がある。堀形底面のレベルは母屋北側柱筋で海拔高 9.85 ～ 9.95m、母屋南側柱筋で同 9.94 ～ 10.08m、廂部分で 9.96 ～ 10.06m とこれも南へ向かって高い、柱間寸法は 251cm で廂部分が 260cm とわずかに長い。

なお柱跡の底面を詳しく観察すると、平らではなく傾斜している例が幾つかある。この現象と西側柱穴を切る柱穴状のものから、この建物は柱が抜き取られている可能性がある。

##### 建物 SB07

1 トレンチ SB06 からわずか 1 間分離れて、母屋の並びを揃え東接する建物である。梁間 2 間、桁行は 4 間分確認している。東側の棟持ち柱は未確認で、もう 1 間ないしは数間

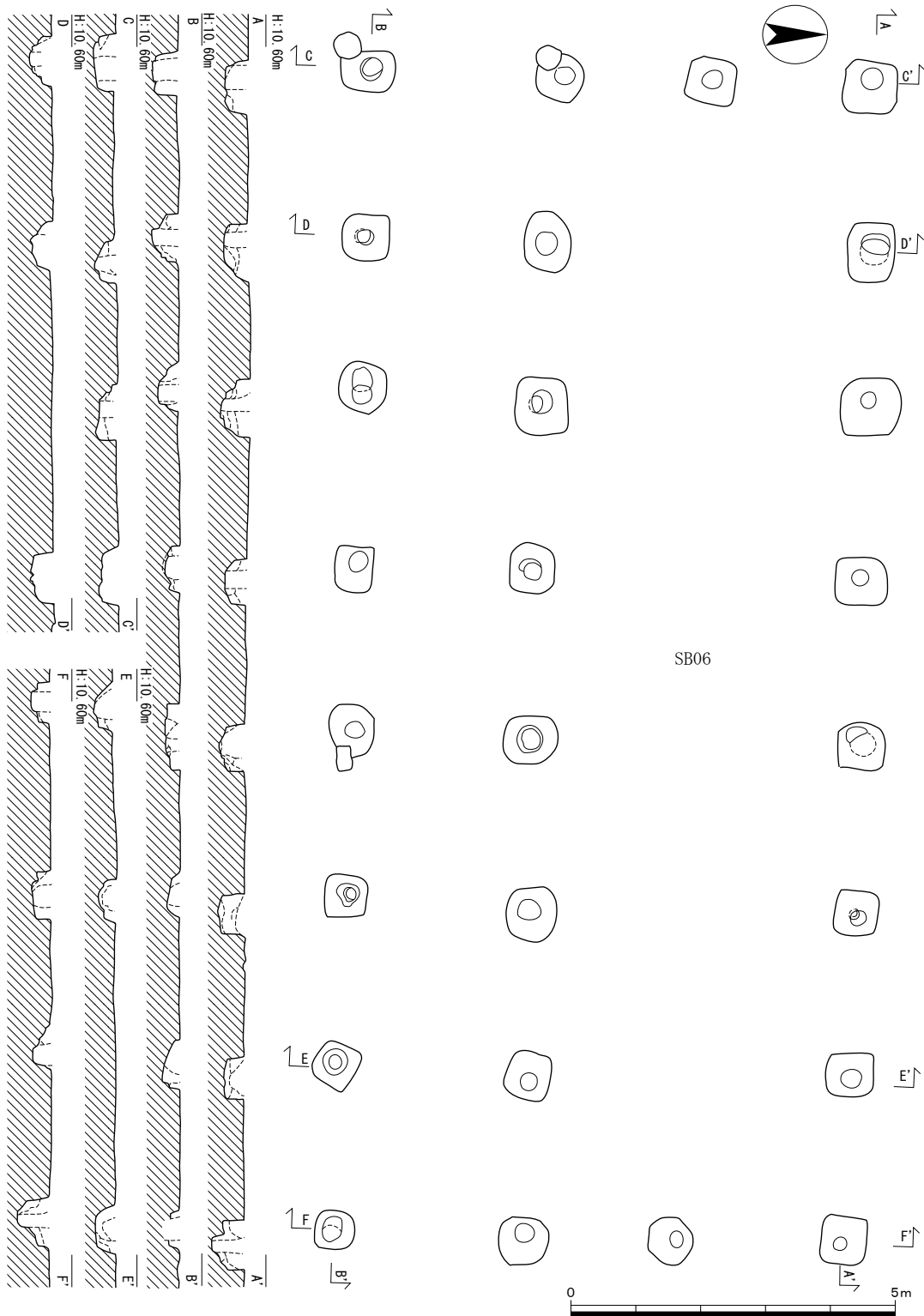


Fig. 10 SB06実測図(1:100)

東に延びるものと思われる。ただし東はSD21にさえぎられ、3間以上は延びないであろう。堀形は45～50cm四方とSB06のそれよりも小さく、形の歪んでいるものもある。柱跡は径23cm前後の円形プランである。柱跡および堀形のレベルは海拔高10.31～10.33mで一定している。西北隅の堀形には20cm角の礎板を置いている。柱間寸法は240cmである。

#### 建物 SB08

SB06の廂部分と重複する1×3間の東西方向の建物である。柱の軸線はほかの建物に対して西への振れが大きい。堀形を確認できたのはわずかで、大半は柱跡だけの検出である。

柱間寸法は不揃いで、桁行では東2間が203cm、西1間が235cm、梁行は272cmである。柱跡底面のレベルは海拔高10.05～10.20cmである。

#### 建物 SB09

SB06・SB08と重複する1×6間の南北棟である。大半は柱跡だけの確認である。柱跡は25～30cmの円形プランで、底面のレベルは海拔高10.07m前後である。柱間寸法は桁

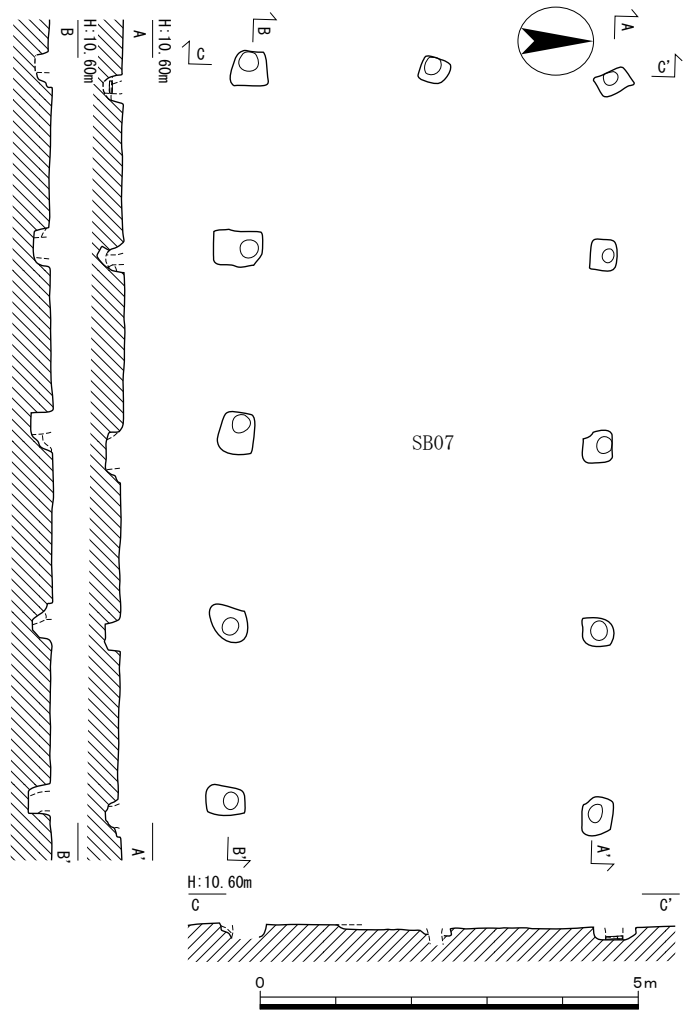


Fig. 11 SB07実測図(1:100)



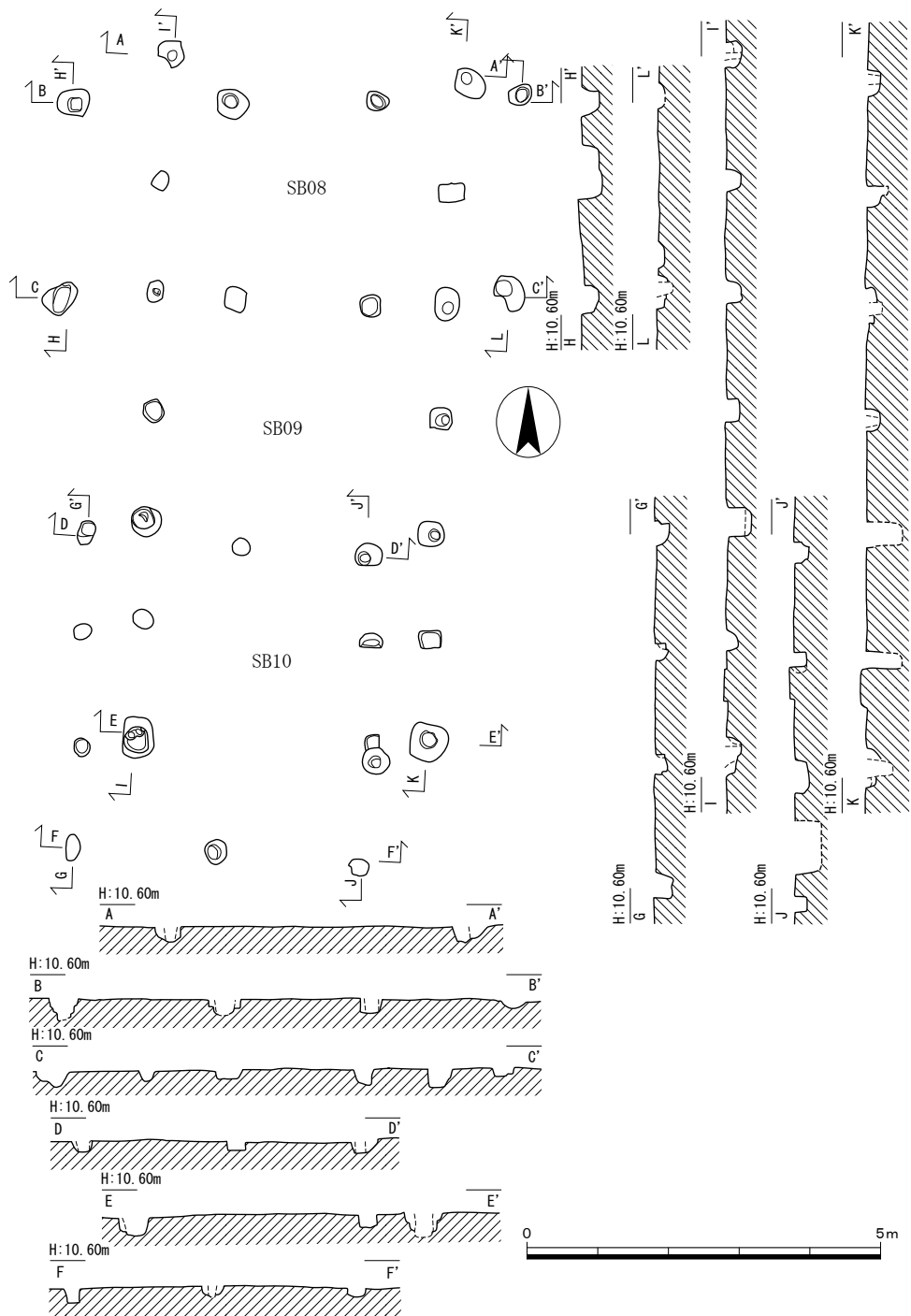


Fig. 12 SB08~10実測図(1:100)

行が 160cm、梁行が 415cm である。SB06 と柱穴の切り合いがあるが、プランでは前後関係は不明であった。出土遺物の比較から SB09 が古い。

### 建物 SB10

SB09 および SB14 と重複する 2 × 3 間の南北棟である。柱跡だけの検出で、柱跡は 23 ~ 27cm の円形プランである。柱跡底面のレベルは海拔高 10.02 ~ 10.12m である。柱間寸法は桁行 165cm、梁行 202cm である。

### 建物 SB11

SB06 の廂の重複する 2 × 4 間の東西棟である。堀形は方 75cm のプランで、長方形の例もある。この建物の柱は抜き取られているため柱跡は不明である。ただし、抜き取り穴は堀形外に及んでいないので、プランではほ

とんど確認できない。半数の柱穴では抜き取り穴と思われる部分に投棄された瓦が出土した。堀形底面のレベルは海拔高 9.97 ~ 10.07m である。柱穴寸法はまちまちで、桁行は西から 205cm、273cm、273cm、205cm、梁行は 195cm である。

### 建物 SB12

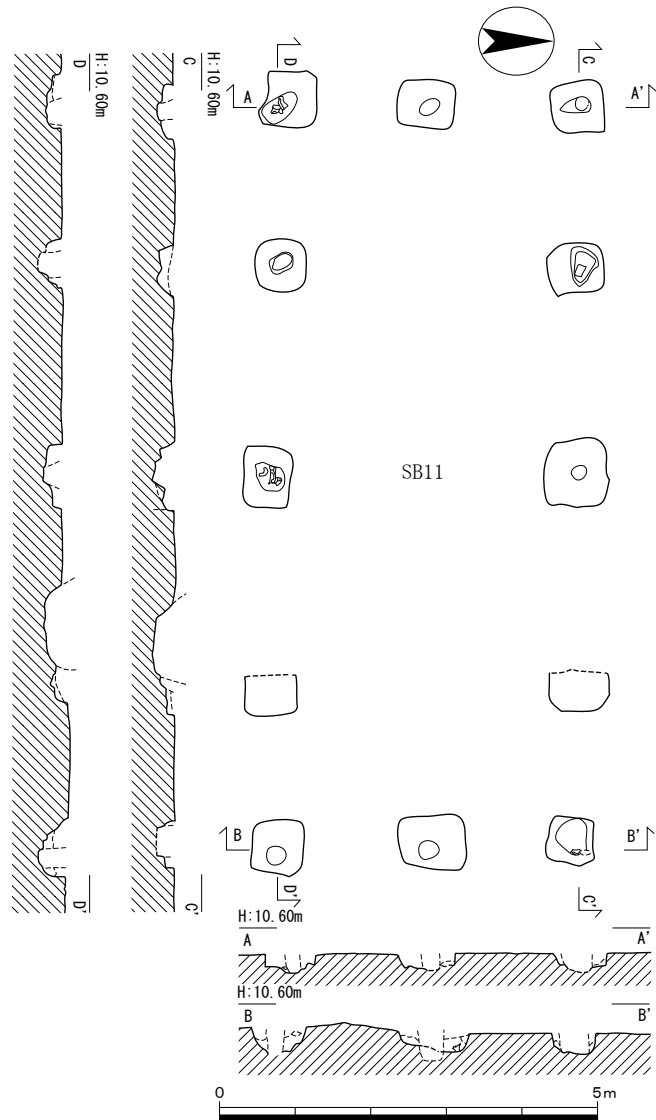


Fig. 13 SB11実測図(1:100)



Fig. 14 SB11 瓦出土状況

SB07の南部にあり、SB11の北側柱筋と、この建物の北側柱筋が2間分の間隔をあけて揃う。2×3間の南北棟である。堀形は40～50cm四方で、歪んでいるものもある。柱跡はSA18に切られて不明のところもあるが、およそ径20cmの円形プランである。柱跡のレベルは海拔高10.07～10.15mである。柱間は180cm等間隔である。なお南北両端の棟持ち柱より西へ10cm、内側へ80cm離れた位置にある二つの柱穴もこの建物に属するかもしれない。

### 建物 SB13

1トレンチ西部に位置する。近代溝により柱穴の一部を欠くが、

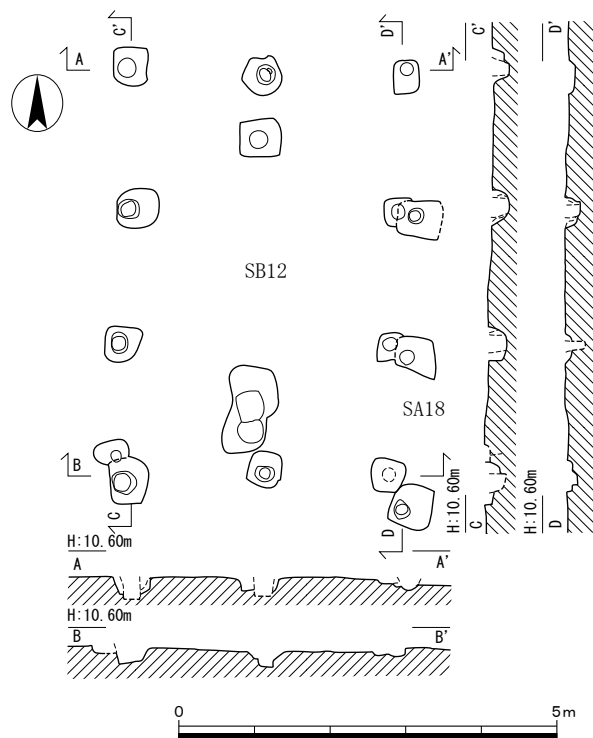


Fig. 15 SB12・SA18実測図(1:100)

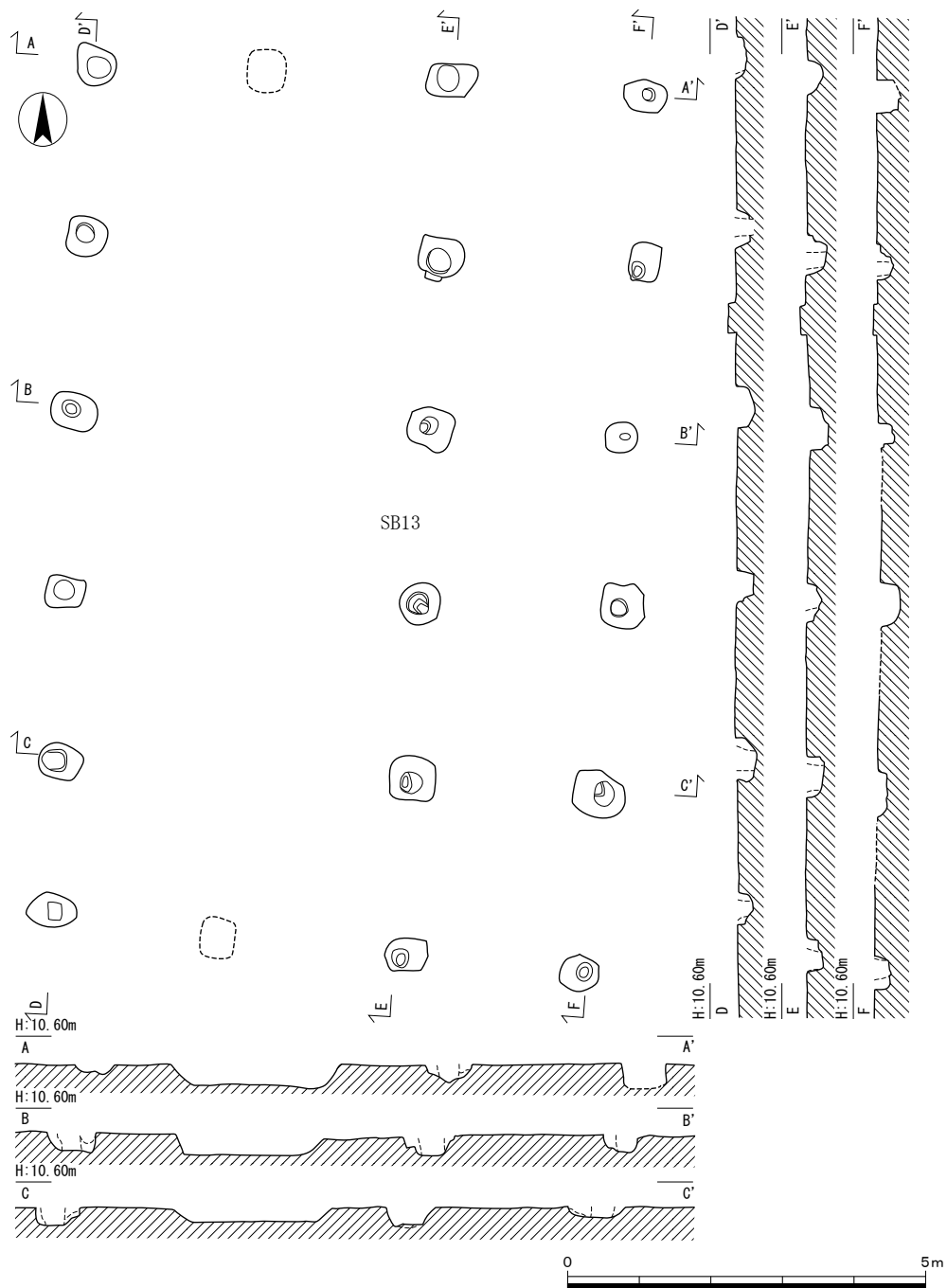


Fig. 16 SB13実測図(1:100)

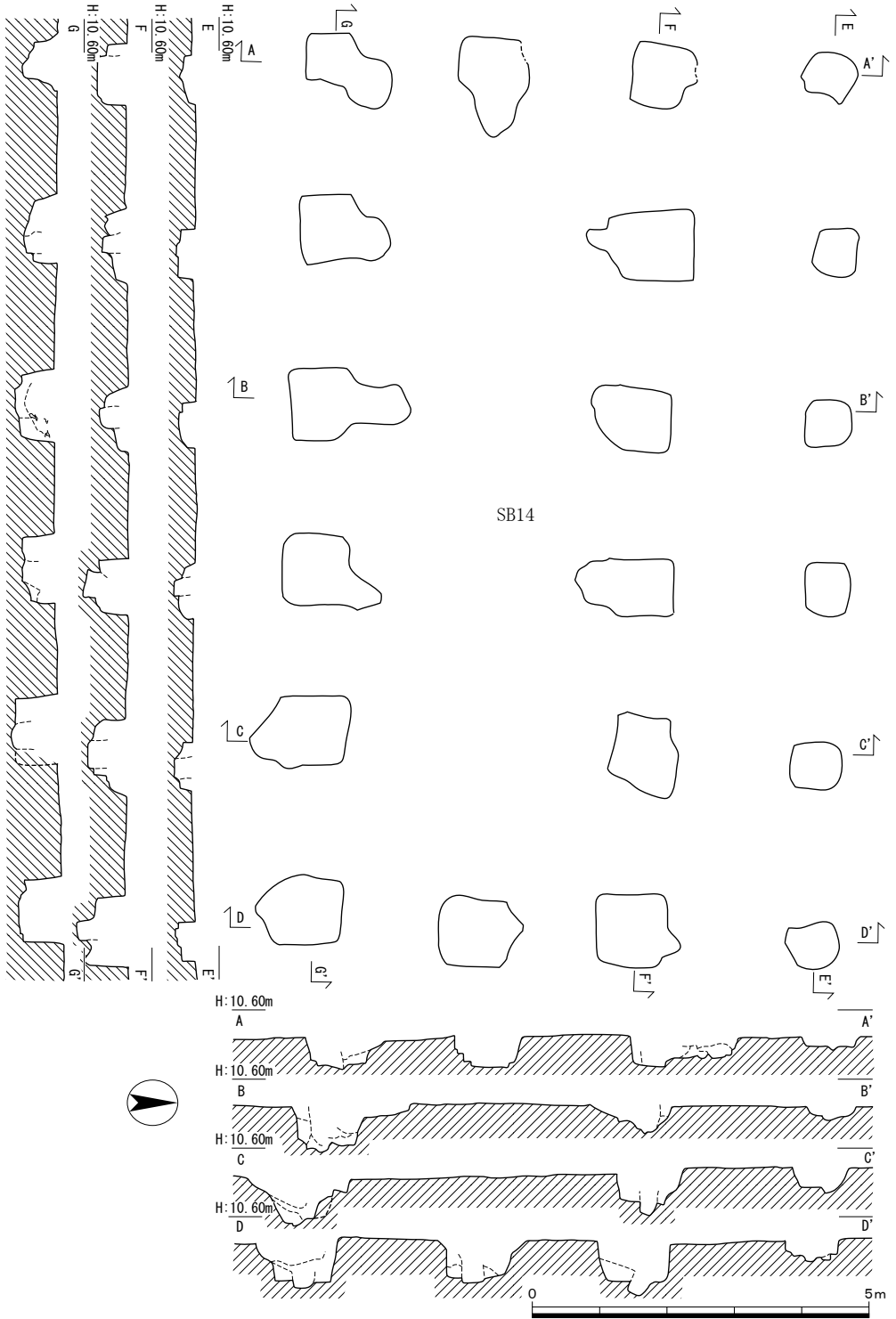


Fig. 17 SB14実測図(1:100)

3×5間、東廂の建物であろう。柱の軸線は他とは時計回りに2度ほど振れている。堀形は50～60cmの隅丸方形プランである。柱跡は径28cm前後の円形プランが多いが、西南端の柱跡のように方形もあり、あるいは角柱であったかもしれぬ。同様な痕跡は廂の南から2番目の柱穴で確認している。柱跡のレベルは、母屋部分で海拔高10.02～10.07m、廂部分で同10.07～10.12mである。柱間寸法は244cm等間隔で、廂部分が273cmと長い。

#### 建物 SB14

1 トレンチ南部にあり、SB06 と対面する位置にある。3×5間の東西棟で北廂を持つ。母屋部分の堀形は1m四方と、検出した建物のうちでは最大である。廂の堀形も70cm四方と大きい。堀形の輪郭は柱の抜き取りを明確に示しているものの、堀形内では抜き取り穴をプランで識別することはできず、断ち割りから辛うじてそれを確認した。柱穴は母屋部分では、径38cm前後、廂部分はそのよりも幾分小さい。柱跡底面レベルは柱跡ごとに差があり、母屋北側柱筋を例にとると、西から海拔高9.82m、9.77m、9.84m、9.60m、9.67m、9.44mと東へ低くなる。廂部分は海拔高9.95～10.06mと母屋に比べて浅い。柱間寸法は250cm等間隔である。柱の抜き取り作業は4グループに分かれる。なお柱跡底面は柱の抜き取り方向に対して深くなる傾向が顕著にある。プランでは明確な抜き取りを認められない場合でも、この現象がみられるならば、抜き取りの可能性はあるといえる。

SB13の廂部分とこの建物の西側柱筋が切り合い、それによってこの建物が古い。

#### 建物 SB15・柵 SA16

SB11の南、SB14の東北に位置する。SB15は南面を開く「コ」の字形の柱穴からなる建物で、あるいはSA16と共に一つの建物となるかもしれない。南北2間、東西3間である。堀形を検出したのは東西の柱筋で、北側の2柱穴は柱跡だけである。堀形は40～45cm四方と小さい。柱跡は径15～20cmである。柱間寸法は172～182cmと不揃いである。

SA16はSB15の南端各柱穴より、南へ105cm、東

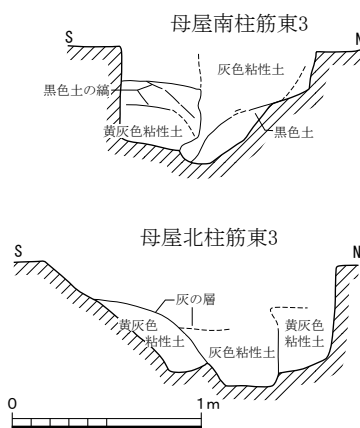


Fig. 18 SB14柱穴断面図(1:40)

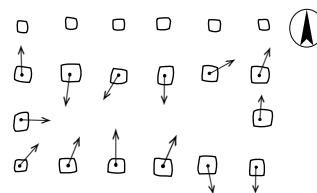


Fig. 19 SB14柱の抜き取り方向

西へ20～40cm離れたところを両端とする3間分の柵である。堀形は40cm四方、柱跡は径20cmである。

### 建物 SB24

2 トレンチ南部に位置する。SD21 を掘り下げる際に検出したので廂の一部を失っているが、3×5間以南廂を持つ東西棟である。堀形は母屋では65～70cm四方、廂では50cm四方である。プランでは確認されなかったが、断面で柱の抜き取りが観察された。建物の一部がSD21の傾斜面に位置するので、堀形のレベルに興味を持たれるが、母屋北側柱筋では西から海

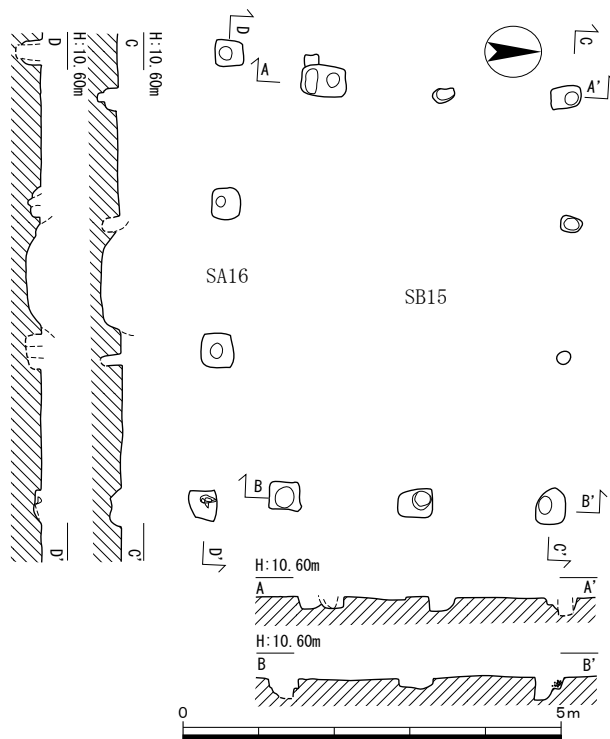


Fig. 20 SB15・SA16実測図(1:100)

抜高 10.13m、10.07m、10.11m、10.08m、10.03m、9.93m、同じく母屋南側柱筋では、西から 10.06m、10.15m、10.05m、9.99m、9.97m と東寄りがわずかに低い程度である。廂部分の堀形底面のレベルは母屋よりも10～15cm高い。抜き取り部分の埋土には、ほかの建物に比べて遺物が多く、土師器甕・壺、瓦などが出土している。

SB24 に接する部分の SD21 の堆積層からは、一括して投棄されたような状態で遺物が出土している。この付近では SB24 以外に建物は存在しないので、SB24 と直接結びつく遺物と考えてよからう。

### 柵 SA17

SA17 は SB15・SA16 と重複する南方向2間分の柵である。柱跡は約17cm四方で角材である。柱間寸法は270cmである。南端の柱跡は柵例の軸に対して約30度振れている。

### 柵 SA18

SB12 と切り合う柵である。ただし柵とするには柱穴がしっかりしているので、これを西側柱筋とする建物を想定することも可能である。この東側は SD21 のため、柱穴は確認

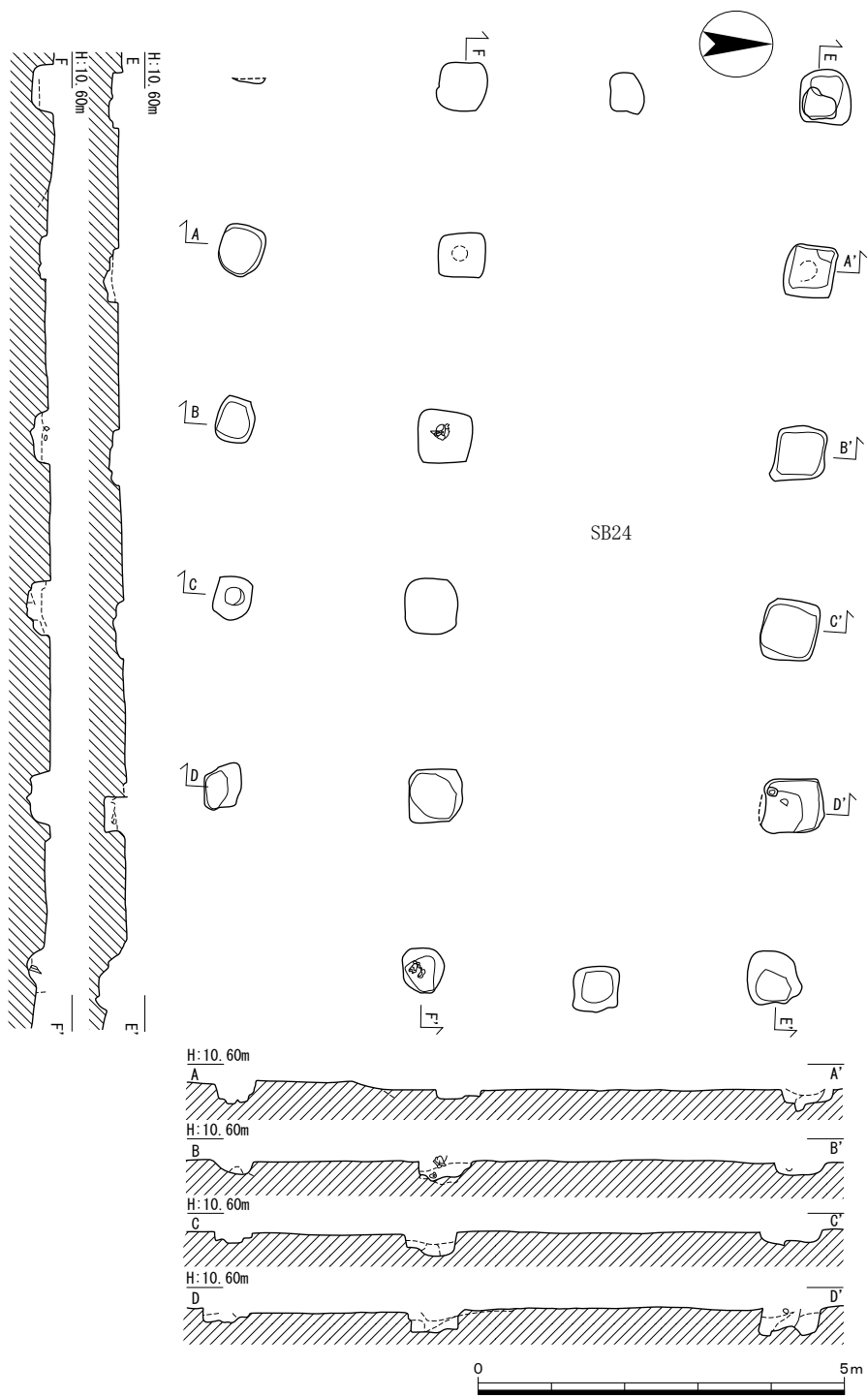


Fig. 21 SB24実測図(1:100)



できなかつた。SB06の廂の柱筋の東延長上、12.3m(4間)を起点として南へ3間分確認している。柱間寸法は194cmで、柱跡径は20cmである。SB12より新しい。

#### 柵 SA19

SD21のベース面で検出した2間分の柵である。柱間寸法は210cmである。

#### 柵 SA20

SB14の南1間に位置する柵である。東西方向6間分と、東端で北に折れる1間分を確認した。ただし柱間寸法はまちまちで、西から201cm、222cm、392cm、272cm、336cm、275cmおよび200cmである。また西から1間目と3間目の柱穴は2個一対となっている。柱跡は西端だけが面取りをした円形で、ほかは方形である。方形柱跡は方30～35cmである。

#### 柵 SA23

2トレンチ中央を東西に走る柵である。SD22と切り合う柱穴は、土質が似通っているため検出し得なかつたが、計12間分ある。西へは延びると思われるが、東端の柱穴はSA17同様東限を示すように柵列の軸に対して振れているので、ここで止まる。これ以东はSD21となることから、ここを東端としてよからう。柱穴は35cm四方で、柱間寸法は310cm等間隔である。

#### 溝 SD01

1トレンチ最北部で検出した東西方向の溝である。残存状態は悪く、北肩は直線的であるものの、南肩は出入りが激しい。これは、北側が肩に沿って幅約75cmの段状をなして凹んでいるためである。この部分の深さは12cmほどあり、南側の溝底面はかすかに残っている程度である。溝幅は南肩の出入りの最大部分が当初の溝幅とみられよう。これによる溝幅は2.13mである。溝の堆積土は淡灰色粘性土一層である。遺物は少ない。

#### 溝 SD02

SD01の南を並行して走る東西方向の溝である。SD01とは逆に南肩が直線的で、この側の溝底部が一段低くなっている。この幅は70～80cm、深さは15cmである。SD01と同様にして溝幅を求めると1.46mである。ただしこれは西部の大きく北へ張り出している部分を除いた値であり、これを含めると3.06mとなる。溝の堆積土は下から暗灰色粘性土、淡灰色粘性土である。遺物は主としてSD21に近い東半部から出土している。

#### 溝 SD03

SD02の南を東西に走る溝である。SD01・02とは異なり、両者とも出入りがあり、底面も起状を持っている。最大幅は2.42mである。ただし西部では削平を受けたためか消失し

ている。東部の深さは40cmあり、下から青灰色粘性土、炭化物を含む青灰色粘性土が堆積する。このうち炭化物を含む青灰色粘性土は一部分だけにみられるブロック的な層で、SA18 東側において、一括投棄された遺物が出土した SD21 の炭化物混じり層と共通する点が多い。遺物の大半はこの層から出土している。

#### 溝 SD14

SD01 の北にあり、東西方向に走る。南肩の一部を検出しただけで溝幅など詳細は不明である。

#### 溝 SD26

3 トレンチ中央部で検出した東西方向の溝である。残存状態は極めて悪く、溝の底部がわずかに残っていただけで、しかも SD25 以西は消失している。溝幅 1.16m、深さ 14cm であるが、いずれも当初の正值を示すものではない。溝内堆積土は粘性を帯びた黄灰色砂質

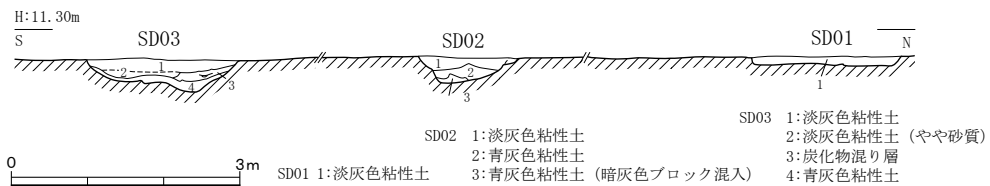


Fig. 22 SD01~03断面図(1:100)

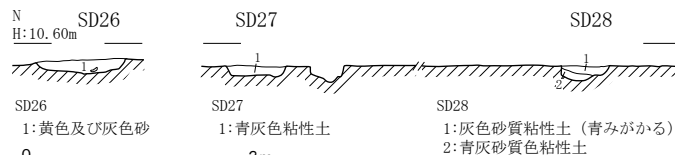


Fig. 23 SD26~28断面図(1:100)

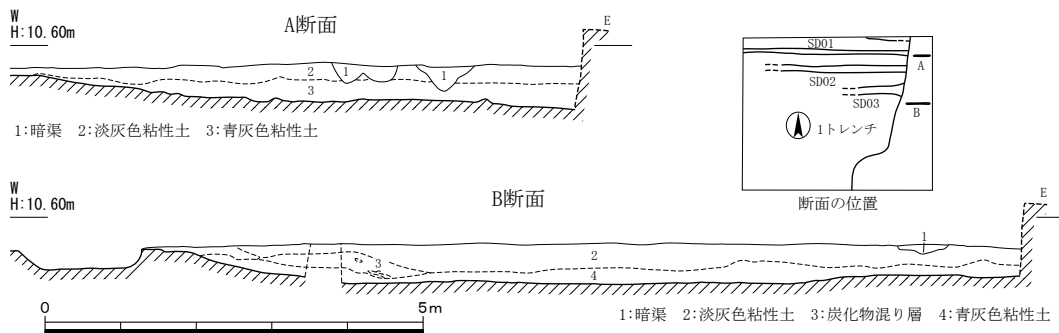


Fig. 24 SD21断面図(1:100)

土である。遺物は出土していない。

#### 溝 SD27

3 トレンチ西南部分で検出した東西方向の溝で、SD25 以東では消失している。溝幅 80cm、深さ 14cm である。遺物は出土していない。青灰色粘性土が堆積している。

#### 溝 SD28

SD27 の南においてわずか 2m ほど確認しただけである。SD01 に似て、溝の北肩より幅 50cm ほど一段低くなる。深さは 20cm である。下に青灰色粘性土が、上には灰色粘性土が堆積している。

#### 低湿地 SD21

1 トレンチ・2 トレンチの東半分を占める幅 23m、深さ 64cm の浅い湿地である。水の流れを示す砂層はなく、下部に青灰色粘性土、上部に淡灰色粘性土が堆積するだけである。ただこれらの層の堆積時期は、ほかの遺構との関係上重要な意味を持つので、明確にしておく必要がある。SD21 は黒色粘性土をベースとするが、この層は基本層序の第 5 層と同一層で、古墳時代後期の堆積層である。また黒色粘性土そのものが湿地の堆積を示すように、肩口から落ち込んでいるので、古墳時代後期にはすでに形成されていたことは明らかである。ところが SD01 から SD03 と SD21 の調査の所見（調査日誌抄を参照）からは、黒色粘性土の上に堆積する青灰色粘性土は、さかのぼりえても奈良時代後期であり、その間に 200 年近い堆積の空白を生じる。また奈良時代後期から平安時代初期という短期間に青灰色粘性土が厚さ 20cm 以上も堆積するという矛盾も生じる。これは所見の一部に誤認があったためと思われる。SD01 から SD03 と SD21 の関係の観察において、「SD03 の SD21 への落ち方は、SD21 のベースである黒色土まで下げないと確認できなかった」が、土層の識別が困難なために観察できなかったとする方が矛盾は少ない。この立場から SD03 と SD21 の関係を再考すると、SD03 にブロック的に存在する炭化物を含む青灰色粘性土と、SA18 の東にある SD21 の炭化物混じり層を同一時期とみることができ、それをもとにした SD03 と SD21 の各層の比較から、SD21 の青灰色粘性土の堆積末期に SD03 が溝築され、同時に SD03 の青灰色粘性土が堆積し始めたと考えられる。従って、SD21 の堆積開始時期を古墳時代後期に求めても矛盾はない。SD21 の淡灰色粘性土は、遺物によって長岡京期と限定される炭化物混り層の上に堆積しているので、上限をそこに置くことができ、淡灰色粘性土が青灰色粘性土とほぼ同じ厚みを持っていることから、堆積期間約 200 年を加えれば、淡灰色粘性土の堆積終了時期は平安時代中期と推測される。

## 5 平安時代中期の遺構

### 川 SD25

3 トレンチ中央を南北に流れる幅 8m の川である。2 トレンチでは検出されず、西へ反転して延びると推測される。トレンチ北部の東肩は蛇行による攻撃斜面にあたり、この部分の肩の崩落している状態が検出された。ここほど顕著ではないが、肩に亀裂が入りずり落ちている状況は、南部の攻撃斜面でも検出された。

深さは約 1m で 6 層の堆積がみられる。上から第 1 層は基本層序の第 3 層によく似た土層であるが、それよりも鉄分を多く含み、茶色の強い粘性土である。第 2 層は淡灰色砂質粘性土である。第 3 層は青灰色細砂で、部分的に粘性の強弱がある。第 4 層はPEAT に近い茶灰色粘質砂、第 5 層は灰色細砂である。第 6 層は攻撃斜面寄りの基底部にみられる地山崩壊土（緑灰色粘性土）である。

遺物は各層から出土しているが、時期差は認められない。なお、SD25 に切られて、西北から東南方向に礫と砂の堆積がみられる。これを掘るには至らなかったが、川の堆積を示



Fig. 25 SD25 東肩崩落状態

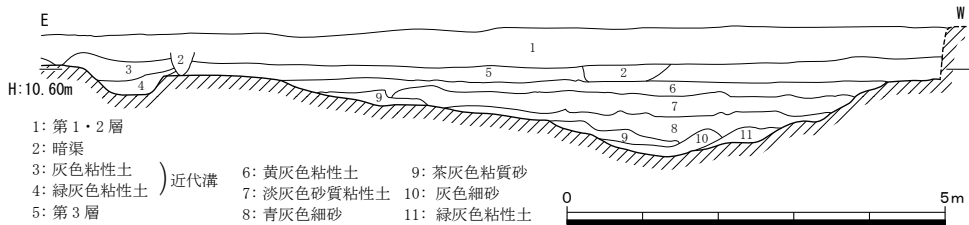


Fig. 26 SD25南壁断面図(1:100)

し、平安時代中期以前の川があったようである。

## 6 遺構の時期区分

奈良時代後期から平安時代初期の遺構は合わせて 25 あり、その種類も建物、柵、溝、低湿地と様々で、古代の生活空間を復元する上で貴重な成果である。ただし、これらはすべてが同時に存在したものではなく、建物の重複から、数時期の変遷が認められる。まずこれらを時期区分することが、遺構の性格を知る上で先決であろう。

この時期区分の要素は、層位、柱穴の切り合い、相互の配置、出土遺物である。

層位から前後の関係がわかるのは、SD02 と SD03 であり、後者が古い。これは SD02・SD03 と SD21 の関係の所見による。

柱穴の切り合いは 3 例あり、そのうち 2 例で新旧関係を確認できた。SB12 と SA18 の切り合いは SB12 が古く、SB13 と SB14 の切り合いは SB14 が古い。

相互の位置関係から同時期の建物を摘出することは、多分に危険を伴うが、柱筋の通る例をあげると、SB06、SB07、SB14 が一つのグループを形成し、SB11、SB12 が別のグループを形成する。

これから、建物では SB11 → SB06 → SB13 の前後関係が、溝では SD03 → SD02 の関係が成立する。溝と建物の関係をみると、SD03 は SB06 とは近接しすぎ、SB11 とはほど良い関係である。SD02 も SB06 とは適当な間隔である。従って SB11・SD03 → SB06・SD02 の関係が得られる。

SD01 ～ 04 の相互の関係をみると、これを道路の側溝とするならば、北と南の違いはあるものの、一方の肩側の溝底部が段状に凹むという点で、SD01 と SD02 は同時の作業とみることができる<sup>註1</sup>。一方、3 トレンチの溝をみると、SD28 は SD01 と同様な溝断面である。ただ SD01 と SD02 の場合、相対する溝の外肩を深く掘り込むので、それを SD28 にあては

	1 トレンチ	2 トレンチ	3 トレンチ
I 期	SB09		
II 期	SB11・SB12	SD03・(SD04)	SA23・SB24
	SB06・SB07・SB14	(SA23)	SD28
III 期	SA17・SA18・SA19	SD01・SD02	
	SA20		
IV 期	SB13・(SB15・SA16)		
不明	SB08・SB10		

Tab. 4 奈良時代後期から平安時代初期の遺構の時期区分

めるとその対になる溝は南方に考えねばならず、3 トレンチ外になる。SD26 と SD27 は掘溝方法が似ていて、また SD03 とも似ているので、SD03 と同時期の一对の溝と考える。

そのほか、SB11 の南北中心軸を延長すると SB24 の南北中心軸に近く、これも同一時期と考えられる。SA23 は付近の建物が SB24 の 1 棟であり、それと同時期である。

これらより、4 期の新旧グループを想定でき、各期の時期は出土遺物によって推定できる。

I 期の SB09 からは平城京後期の土器が出土している。

II 期の SB11 からは重圏文軒丸瓦、SD03 からは平城京後期～長岡京期の土器が出土している。また SB24 から平城宮使用の瓦、SB24 と直接結びつく SD21 の一括投棄遺物では平城京後期～長岡京期のものが出土している。平城宮使用の瓦の搬入は長岡京遷都以前には考えられず、II 期の上限は長岡京遷都となる。下限は、平城京後期の特徴を残す遺物を多分に出土しているから、長岡京遷都後あまり下らぬ時期と考えられよう。

III 期の建物からの出土遺物は少なく、時期判定は困難である。一方 SD01・02 から出土した遺物は II 期の SD03 と時期差は感じられない。しかも、II 期の SD03・04・26・27 を長岡京の条坊遺構と推定すると、III 期の SD01・02・28 も、条里遺構と推測するには無理があり、長岡京の条坊遺構とみなさざるをえない。従って III 期の上限は長岡京遷都から平安京遷都の間にある。

IV 期は時期推定の根拠はなく、III 期に後続する時期とわかるだけである。

註 1 段状に凹む部分を、土層の観察では確認し得なかったが、まったく別の遺構とみた場合には、SD01 と SD02 の関係は不明となる。SD28 についても同様である。

## 第4章 出土遺物

今回の調査で遺構・堆積層から出土した遺物はコンテナにして約60箱である。その大半は土器で占められ、瓦・製塩土器なども多い。ほかには土馬・石器なども若干出土している。

時期別にみると平城京後期から長岡京期のものが圧倒的に多く、古墳時代後期、平安時代中期のものもある。そのほか弥生時代中期のもの、鎌倉時代前半のものも若干あるが、詳細を知るには至らない。

### 1 古墳時代後期の土器 (Fig. 27)

古墳時代後期の遺構 SF05・SD22 から出土したものも含め記述する。須恵器が大半で、土師器はわずか1例である。

須恵器には壺・埴瓶・甕・蓋・杯がある。

壺 (291) はゆるやかに開く頸部と、心持ち内湾する口縁部を持つ。口縁部の下位に沈線を2条施す。胎土は緻密で紫灰色を呈し、表面は青灰色である。

埴瓶 (294) は胴部の一面が偏平となる形態で、この面を正面とすると球形にみえ、胴部の相対する位置に小さな突起を有する。口頸部はゆるやかに開き、口縁部は心持ち内湾する。成形は偏平となる側面を底部とし、まず胴部を造り、粘土板で開口部を閉塞し、これを立てて口頸部をつけている。胴部には偏平部分と、その反対側に同心円状のカキメが残る。

甕 A (293) は口頸部が大きく開き、口縁外面が段を持って厚みを増す形態である。口縁端は丸い。白色に近い胎土で、表面に袖が出る。

〈須恵器〉	壺	……1	(SD21A 群)
	埴瓶	……1	(近代溝)
	甕	A……1	(1トレ3層)
		B……1	(SD22)
	蓋	A……5	(SF05・SD21A 群・3トレ3層)
		B……10	(SF05・SD02・2トレ2層・3トレ2層)
杯	A……1	(3トレ3層)	
	B……16	(SF05・SD03・SD21A 群・2トレ3層)	
	C……1	(SF05)	
〈土師器〉	甕	……1	(SD22)

Tab. 5 古墳時代後期の土器の器種別数量

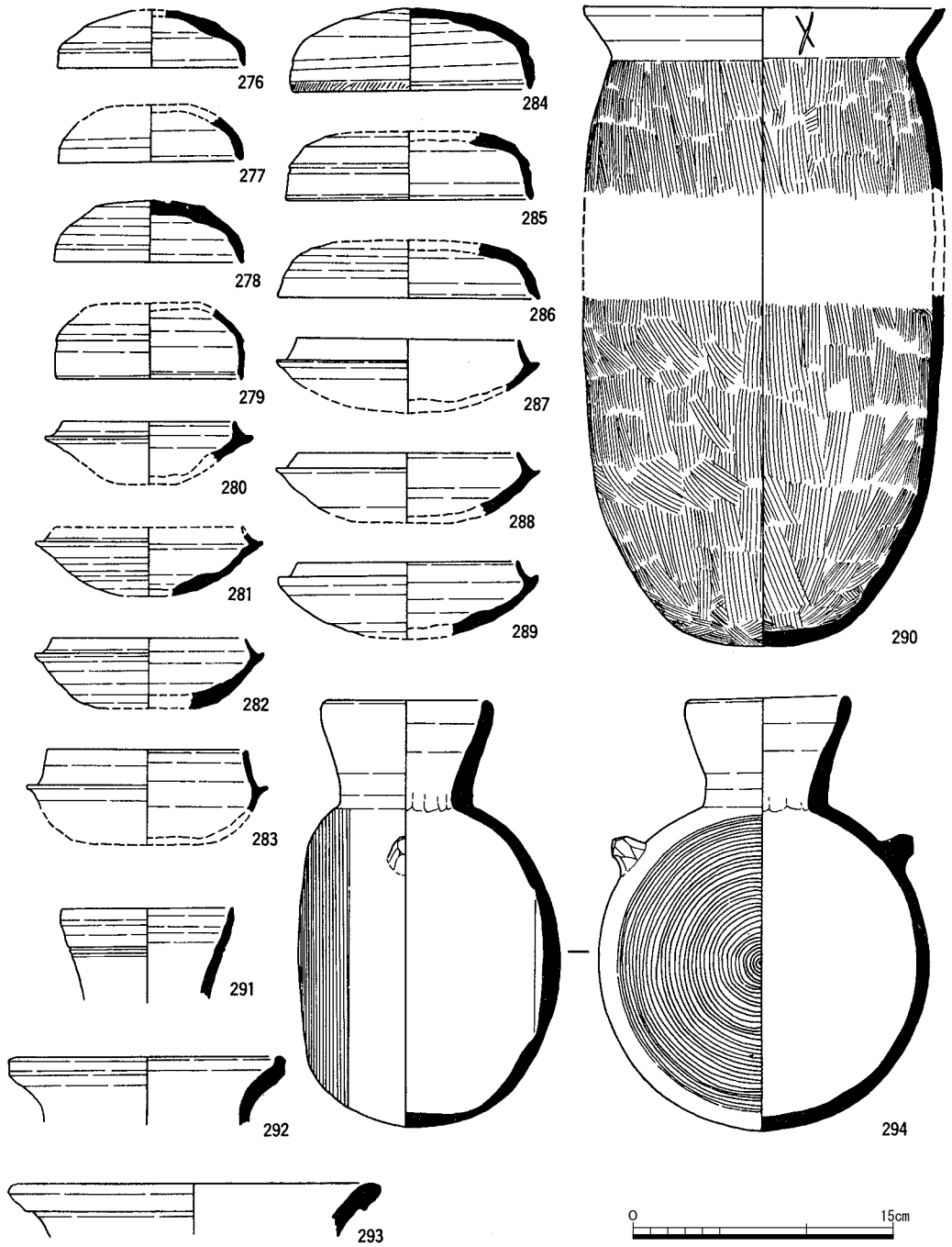


Fig. 27 古墳時代後期土器実測図 (1:4)



甕 B(292) は口頸部が開き、口縁部が軽く立ち上がる形態である。灰白色を呈し、焼成はあまい。

蓋 A(279) はかまぼこ状の天井部とほぼ垂直もしくは開きながら垂下する受け部を持つ。天井部と受け部の境は不明瞭な例 (A2) もあるが、大半は稜線が認められる (A1)。天井部上半を削る。蓋 A2 の 1 例は受け部に斜線の文様を持つ。

蓋 B(284 ~ 286) は受け部と天井部の境がなく、偏球形をなす。天井部は未調整である。

杯 A(283) は立ち上がりが高く内傾する。体部のケズリの位置は高い。

杯 B(287 ~ 289) は立ち上がりが低く、体部は底面を持たず丸底に近い。体部のケズリは下位に下がる。

杯 C(280 ~ 282) は立ち上がりが委縮し、断面三角形に近い。体部は未調整である。

土師器でこの時期と認めるのは甕 (290) 1 例だけである。斜め上方に直線的に開く口縁部と、内傾する口縁端部、長い胴部が特徴である。内外面とも整った縦ハケ調整で、口縁内側が横方向のハケ調整で、後者の部分にヘラ記号を有する。

須恵器甕 A・蓋 A・杯 A は陶邑の TK47 から TK10 型式、壺・埴瓶・甕 B・蓋 B・杯 B は同じく TK43 型式に、杯 C は TK209 型式に比定される。土師器甕は各地の出土例から TK43 型式<sup>註1</sup>に共伴する。なお土師器甕は近江タイプの甕である。

## 2 平城京後期から長岡京期の土器 (PL. 10 ~ 14・19 ~ 24)

この時期の土器はそれを出土する遺構数に比例して数量が多い。とりわけ低湿地 SD21 からは、多量の出土をみて、しかも一括遺物として扱えるものである。従って、これを中心に観察し、この時期の特徴をとらえる。ただし、これを長岡京期の土器と限定せずに幅を持たせたのは、投棄された状況を遺構・出土状態から判断すると、長岡京期のある時点で、それまで使用されていた土器が何らかの事情によって一括投棄されたと考えるに至ったからである。従って平城京後期の土器が含まれている可能性があるし、実際、その時期の特徴を持つものも出土している。ここでは、出土したものの器種・器形・手法の分類にとどめ、長岡京期の土器の抽出は後章にゆずる。なお低湿地出土の土器、建物出土の土器、溝出土の土器に分けて記述する。

### 低湿地 SD21 出土の土器 (PL. 10 ~ 13・PL. 19 ~ 22)

低湿地 SD21 から出土した土器は、出土総数の約半分を占め、その出土状態から一括遺物として扱える資料である。SD21 でも遺物の出土地点は、SA18 の東側 (A 群) と SB24 の

須恵器		土師器		緑釉陶器	
壺	{ A …… 11 B …… 9	壺	…… 1	羽釜	…… 1
甕	…… 4	甕	…… 100	火舎	…… 1
蓋	{ A …… 24 B …… 3	蓋	…… 17	椀	…… 1
杯	{ A …… 8 B …… 46	杯	{ A …… 65 B …… 17	計	601
皿	{ A …… 0 B …… 1	皿	{ A …… 133 B …… 8		
鉢	{ A …… 3 B …… 2 C …… 2	椀	…… 135		
(小計)	113	鉢	…… 2		
		高杯	…… 3		
		(小計)	481		
		黒色土器			
		椀	…… 4		

Tab. 6 SD21A 群器種別個体数

東側 (B 群) に集中し、とりわけ前者から出土したものは、遺存状態もほかより良好で観察しやすい。従って、それをまず検討し、そのほかを補足する。

A 群の出土層位は炭化物混り層で、この下の青灰色粘性土層上部からも出土数が多い。ここではこの両層から出土したものを A 群とし、淡灰色粘性土から出土したものは除外する。

A 群の総数は須恵器 113 個体、土師器 481 個体、黒色土器 4 個体、緑釉陶器 3 個体である。この数量を B 群を含む 2 トレンチ SD21 出土総数と比較すると、須恵器では各器種の割合を含めて数量も一致し、土師器では 2 倍となっている。これは 2 トレンチ出土の土師器は磨滅が著しく、器形の判定の困難なものがあるため、実際は A 群に近い数量となることが予想される。そうすると、A 群は一時期における一戸あたりの標準的な投棄数を示しているものいえよう。<sup>註2</sup>

A 群における器種は、須恵器では壺・甕・蓋・杯・皿・鉢があり、土師器では壺・甕・鍋・蓋・杯・皿・椀・鉢・高杯があり、そのほか黒色土器椀、緑釉陶器羽釜・火舎・椀がある。以下個々の特徴を述べるが、小破片のため細部の特徴が不明なものもあり、手法の割合などでは実測分をもって代用する。また土師器における手法の分類は甕・鍋を除き奈良国立文化財研究所のそれに従い、共通する表示方法を用いる。

#### 須恵器 (PL. 10・11・19)

壺 A は球形の胴部と筒状の口頸部を特徴とする。口縁は軽く外に開き、端部は面取りされる例が多い。外に軽く開く高台を有する。底部外面に糸切り痕を認める例もあり、大きさから、器高 20cm 前後の A<sub>1</sub>、14cm 前後の A<sub>2</sub> に、胎土・色調の相違<sup>註3</sup>から A<sub>a</sub>、A<sub>e</sub>、A<sub>g</sub>、A<sub>k</sub> に

分類される。

壺 B は細長い胴と同じく細長い口頸部がつく。いわゆる瓶子である。平底で、底部に糸切り痕を認める。器高はほぼ一定している。胴部は直線的なもの、わずかに張るものがある。胎土・色調から B<sub>a</sub>、B<sub>g</sub>、B<sub>j</sub>、B<sub>m</sub>、B<sub>n</sub>に分かれる。

甕 B は短い口頸部が軽く開き、胴は大きく張る。外面にタタキ痕が残る。胎土は j である。

蓋 A は低く、頂部がわずかに高まるつまみと、一度そり返り端部が軽く垂れ下がる受け部を特徴とする。天井部が高く丸みを持つものと低く平らなものがあり、受け部のおさめ方にもわずかずつ差異がある。径 19～20cm の A<sub>1</sub>、17cm 前後の A<sub>2</sub>、14cm 前後の A<sub>3</sub>、10cm 前後の A<sub>4</sub> がある。胎土・色調から A<sub>a</sub>、A<sub>b</sub>、A<sub>g</sub>、A<sub>h</sub>、A<sub>i</sub>、A<sub>o</sub> に分類される。

壺 B はいわゆる薬壺の蓋である。径 6.6cm の型の例が 1 例出土している。胎土は b である。

杯 A は高台を持たず、体部が斜め上方に開く形態で器高は底半径の 3/4 程度である。胎土は a、b がある。

杯 B は低い台形の高台を持ち、体部は斜め上方に開く、高台は、体部と底部の境よりわずかに内にあるか接する位置にあり、高台底面は、水平か心持ち外上がりである。体部は直線的なもの、体部下半がわずかに張るものがある。大きさは口径 19.5cm 前後、16cm 前後、12cm 前後がある。器高は底半径との比が 0.90～1.10 とばらつきがある。体部の傾きは<sup>註4</sup>0.36～0.76 であるが特異形を除くと 0.48～0.49 に集中する。胎土は a、b、e、i、o がある。皿 B は低く斜め上方に開く体部と、体部と底部の境より幾分内側に低い台形の高台を持つ。外底面は未調整である。口径は 23.3cm と大きい。胎土は a である。

鉢 A は丸みを持って張る胴部に、わずかにくびれる頸部がとりつき、低く立ち上がる口縁を持つ。高台を有する。胴部下半をケズる。口径 20～25cm の大型のほかミニチュアとも思える口径 9.5cm の例もある。胎土は a と b がある。

鉢 B は直線的に開く胴と、一度くびれて胴径以上に開く口頸部、軽く上に突き出る口縁端部を特徴とする。平底で、糸切り痕を有しない。口径は 15cm 前後である。胎土は a である。

鉢 C は体部が直線的に斜め上方に開き、そのまま口縁となる平底の形態である。糸切りは認められない。口径 38cm の大型と 25cm の中型がある。胎土は b と e がある。

#### 土師器 (PL. 12・13・20～22)

壺 A は短頸壺で、把手・高台の有無は不明である。外面をミガク。

甕は形態から A・B に、前者はさらに調整の相違から a・b・c に細分される。

甕 A は球形の胴を持ち、口縁が外反する。口縁端が軽く内側に肥厚するものが多い。外

面の調整の相違から胴部上半が縦方向のハケの a、その部位が斜めもしくは横方向のハケの b、未調整もしくはナデやミガキによりハケメのない c に細分される。各手法の比率は  $a:b:c=4:2:1$  である。b・c は頸部のくびれが目立ち、小型の器形では a よりも幾分胴が長い。各手法を通じて口縁内側のハケ調整は半数のものに認められ、小型のものを除いては内面胴上部に板ナデが認められる。口径 24 cm 前後、18cm 前後、14cm 前後、10cm 前後の 4 法量がある。

甕 B は頸部のくびれがなく、胴上部からしだいに開き口縁となるものである。外面は縦方向のハケ調整である。

鍋は甕 A に近い形態であるが、器高が口径の 8 割程度のものである。口頸部は甕 A と区別がつかず、全形を知りえるものだけが鍋とわかる。胴中位に把手を持つ a と、把手の不明な b に分かれる。口径 24 ~ 28cm の大型である。外面は縦方向のハケ調整で、内面の上部は板ナデ調整、下部は未調整である。

蓋 A は受け部から弧状を描き天井部に移行し、その間に明確な境は有しない。頂部はケズリのちミガキを行う。径 26cm のものと 19cm のものがある。

杯 A は底部と体部の境が不明瞭なものが多く、底部は必ずしも平らではなく丸みを持つものが多い。口縁内側の沈線もしくは口縁端の肥厚は大型のものに普遍的に認められ、小型のものでは消失しているものが多い。外面の調整は d・c・e 手法が認められ、その比率は前者から順に 1:2:3 である。大きさから、口径 18cm 前後と 14cm 前後の二つに分かれる。なお e 手法の割合が大きいのは小型器形の 3/4 が e 手法であるためである。

杯 B は斜め方向に体部が開く、高台は軽く外に返るものと断面三角形のものがある。外面の調整方法は、口径 21 ~ 24cm の大型ではケズリの後荒くミガキを行い、口径 17cm 前後の小型ではケズリの後、それがみえなくなるまで丁寧にミガキを行う。

皿 A は体部の立ち上がりは浅く、斜め上方に開き、底部との境は不明瞭である。口縁内側の沈線もしくは口縁端の肥厚は大型では認めるものの、小型では痕跡程度や消失例が多い。口縁部のナデは強く、そのため c 手法であってもケズリ残しの生じる場合あり、b 手法との区別が判然としない。b・c・e 手法があり、口径 9cm 前後の e 手法だけの小型を除く比率は前から順におよそ 3:7:1 である。大きさは、口径 20cm 前後、16cm 前後、13cm 前後、9cm 前後の 4 段階があり、先の二種が圧倒的に多い。

皿 B は大きさの割に低い体部を持ち、断面三角形の小さな高台がつく。d 手法が 1 例あり、そのほかは e 手法である。後者は高台部の調整に付随して体部下半を削る例もある。

口径は 26 ~ 27.5cm である。

椀は小さな底部と弧状に張る体部を特徴とする。口縁内側の沈線はまったく認められない。大半が口径 12cm 前後で、9cm のものもわずかにある。c・d・e 手法があり、その比率は 4:1:2 である。d 手法はオサエの上に直接ミガキを行う。そのため、表面が磨滅している場合にはミガキの観察が困難で e 手法と判断している可能性もある。

鉢 A の後頸部は甕 A と形態を同じくし、胴部以下はオサエのままに粗雑な形である。器高は口径の 1/2 程度で丸底に近い平底である。体部の相対する位置に小さな円板を張り付ける例もある。通例では、体部と底部に人面墨書を有するが、本例には認められない。口径 15 ~ 16cm である。

高杯はいずれも破片ばかりで全形を知りえる例はない。杯部は浅く、口縁部は水平方向に開き、端部が軽く肥厚する。脚部は八角形である。口径は 1 例だけ測り、25cm である。

#### 黒色土器 (PL. 13 ~ 15・21・22、Fig. 28)

黒色土器はすべて内面と外面口縁部が黒変する A である。深い体部と広い底面を持ち、土師器では杯の形態であるが、通例に従って椀としておく。外面の調整方法は底部を含めて全面をミガク例と口縁部だけをミガク例がある。前者は炭化物混り層から、後者は青灰色粘性土層から出土し、時期差を持つかもしれない。内面には暗文が描かれ、底部には花文を表わす螺旋線を、体部には蔓草を表す蕨手文と、底部と同じ花文を交互に配する。口径 23cm、19cm 前後、10cm 前後の大きさがある。いずれも石英・雲母を含む赤褐色の胎土で

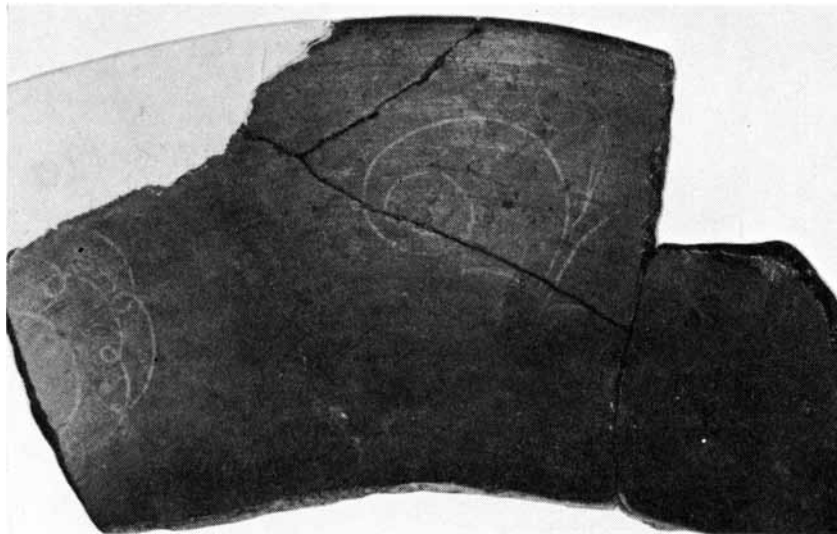


Fig. 28 黒色土器の暗文

ある。

**緑釉陶器** (PL. 10・15、Fig. 29・30)

羽釜は短頸壺のように胴上部が内折し、わずかに立ち上がる口縁部を持つ、胴部は弧状に張り、やや上位水平方向に延びる鰐がつく。底部は幾分丸みを持つ平底のようである。調整は丁寧で、胴下半部は一度ケズリ、その上をナデる。胎土は柔らかく、乳白色を呈し、釉は濃緑色のものを口縁端から鰐外端まで施す。胴下半部から底部までは無釉である。これは火舎にセットした場合、その部分が隠れて施釉の必要がなかったためと思われる。

火舎の口縁部から胴上部の特徴は羽釜のそれに酷似する。胴部はずんぐりして、心持ち膨らみを持つ。外に開く高い高台を持つ。胴部には三個一對の縦長の透かしと隅丸方形の火入れ口を持つ。火入れ口を正面とすると、奥三方に透かしがある。胎土は羽釜よりも幾分黄色味が強いが、同一産地のものとみてよい。釉は外面全面に濃緑色のものを施す。なお口縁の内法は羽釜の鰐基部の外径に一致する<sup>註5</sup>。

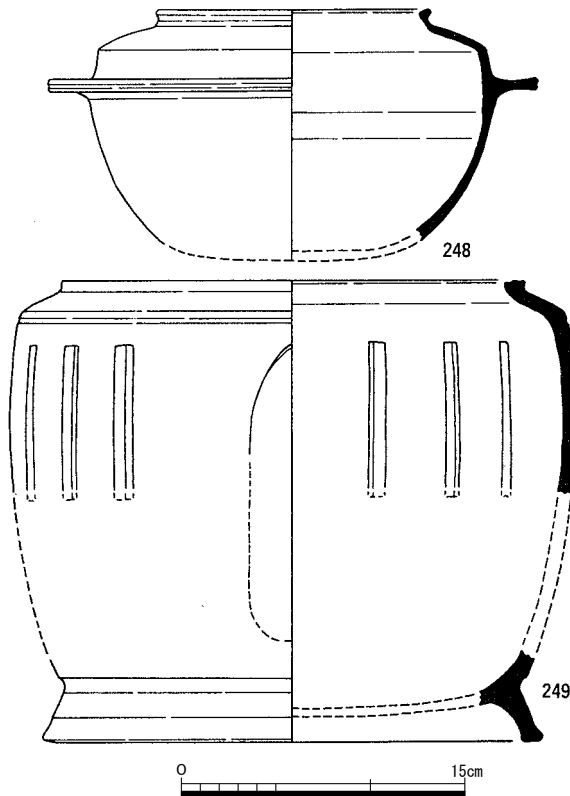


Fig. 29 緑釉陶器羽釜・火舎実測図 (1:4)

腕は弧状に張る体部と蛇の目高台を持つ。高台はその部分を貼り付けたのちケズって調整しているようである。内面は丁寧なミガキである。全面に濃緑色の釉を施す。胎土は淡い黄色で軟陶質である。

B群を含む2トレンチ出土の土器は、須恵器壺A・壺B・甕A・甕B・蓋B・杯A・杯B・皿A・皿B・鉢A・鉢Cがあり、土師器甕A・蓋・杯A・杯B・皿A・皿B・

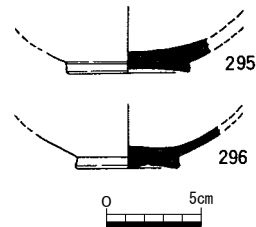


Fig. 30 緑釉陶器腕実測図 (1:4)

椀・高杯がある。また黒色土器椀A、緑釉陶器火舎・椀、灰釉陶器椀も出土している。大半の器形はA群と同一特徴を示し、それのない器形を記述する。

甕Aは大きく張る胴部と斜め上方に開く口頸部を特徴とし、外面にはタタキが残る。甕Cはゆるやかに開く口縁を持ち、上端部面が内傾する。胎土から、あるいは灰釉陶器かもしれない。須恵器皿Aは杯Aと体部の特徴が同じで、径を大きくした形態である。緑釉陶器火舎は胴部の透かし部分の破片で、あるいは平瓶の取手かもしれない。同椀は平たい高台を持ち、内側が軽く凹む。灰釉陶器椀は四角い高台を持ち、この部分は張り付けたのちケズって調整している。内面はミガク。胎土は緻密で灰白色を呈する。

そのほかA群と異なる特徴をあげると、須恵器杯Bでは体部の傾きが0.42～0.44と小さく、これはA群よりも幾分立ち上がりが高いことを示す。土師器杯A・皿A・椀における各手法の度合いは、観察し得た個体数で表わすと杯Aは51個体中b手法が3、c手法は48、皿Aは49個体中b手法は3、c手法は46、椀は27個体中c手法は23、d手法は3、e手法は1である。そのほか須恵器AではA群よりもつまみの頂部の高まりが目立つ。

須恵器	土師器	椀 …… 4
壺 { A …… 10	壺 …… 2	緑釉陶器
{ B …… 4	甕 …… 58	火舎 …… 1
甕 …… 4	蓋 …… 4	椀 …… 2
蓋 { A …… 38	杯 { A …… 64	灰釉陶器
{ B …… 2	{ B …… 9	椀 …… 1
杯 { A …… 8	皿 { A …… 62	計 382
{ B …… 59	{ B …… 0	
皿 { A …… 1	椀 …… 34	
{ B …… 4	高杯 …… 10	
鉢 A …… 1	(小計) 243	
(小計) 113	黒色土器	

Tab. 7 SD21 2 トレンチ出土土器個体数

#### 建物出土の土器 (PL. 14・PL. 23)

SB06 からは須恵器蓋 B<sub>j</sub>、土師器皿 A<sub>c</sub> が出土している。

SB07 では須恵器 A<sub>b</sub>、土師器杯 A<sub>b</sub>、椀 c が出土している。須恵器蓋は天井部が低く平らである。土師器杯は b 手法ではあるが、ケズリは底部だけに留まらず体部下半にまで及ぶ。

SB09 では土師器皿 A<sub>b</sub> が出土している。底部は深く、丸みを持ち、ケズリは体部下半にまで及ぶ。

#### 溝出土の土器 (PL. 14・PL. 24)

SD01 から須恵器蓋 A<sub>b</sub>、土師器甕 A<sub>a</sub>、皿 A<sub>c</sub>・A<sub>e</sub>、椀 d、高杯が出土している。須恵器蓋は

受け部のそり返りが大きい。土師器皿 A<sub>c</sub> は口縁部にナデがケズリ残され、b 手法に近い。皿 A<sub>g</sub> は口径 9.5cm の小型である。高杯は杯部の破片で、口径 29.5cm、杯部は深く、外面の調整は縦方向ケズリののち横方向のミガキである。

SD02 から須恵器では壺 A<sub>g</sub> が 2 例、杯 B<sub>g</sub>、B<sub>o</sub> が各 1 例出土している。壺 A<sub>g</sub> は頸部が筒状をなさず、斜め上方に開く。その部分に沈線を 8 条施す。杯 B<sub>g</sub> は器高と口半径が等しく、体部が深い。土師器では、杯 A<sub>c</sub>、皿 A<sub>a</sub>・A<sub>b</sub>・A<sub>c</sub>、椀 c があり、皿 A<sub>c</sub> は 2 例ある。皿 A<sub>a</sub> は全資料のうちで唯一のものである。体部は斜め上方にかなり開き、器高は低い。このほか黒色土器椀がある。口径 21.5cm 器高 8.5cm の大型で、内面底部に花文を、内面体部は磨滅のため判然としないが花文や蔓草文を表す。

SD03 は出土数が多い。大半は SD21 近くの土壌状に凹んだところから出土している。須恵器では杯 A<sub>a</sub> が 2 例、杯 B<sub>a</sub> 2 例、杯 B<sub>b</sub>・B<sub>j</sub> 各 1 例、蓋 A<sub>a</sub>・A<sub>b</sub> 各 1 例がある。胎土が a のものは器壁が薄い。土師器では、甕 A<sub>b</sub>、B、蓋、杯 A<sub>b</sub>・A<sub>c</sub>・A<sub>e</sub>、皿 A<sub>b</sub>・A<sub>c</sub>・A<sub>e</sub>、椀 A<sub>c</sub>・A<sub>d</sub>・A<sub>e</sub>、鉢がある。皿では小型のものに e 手法が現れる傾向がある。

SB11 からは須恵器蓋 A<sub>n</sub>、土師器椀 c・e が出土している。

SB15 からは土師器杯 B<sub>d</sub> が出土している。口径 22.5cm の大型で、ケズリののちミガキを行う。

SA18 では土師器壺が出土しているが、胴部下半から底部の破片で全形は知りえない。高台が欠落している。

SB24 では、柱の抜き取り部分から比較的多くの遺物が出土している。須恵器では、蓋 A<sub>d</sub>、杯 B<sub>d</sub> が出土している。蓋は天井部がごく低く、受け部のそり返りが目立つ。杯は体部が幾分丸みを持ち、傾きは 0.41 である。土師器は壺 B、甕 A<sub>a</sub>・A<sub>c</sub>、鍋 b、蓋、杯 A<sub>c</sub>、皿 A<sub>b</sub>・A<sub>c</sub> があり、杯 A<sub>c</sub> は 3 個体、皿 A<sub>c</sub> は 2 個体である。壺 B は丸みを持って開く体部と内折し軽く立ち上がる口縁部を特徴とし、高台を持つ。器高 7cm と小型で、外面は丁寧にミガク。甕 A<sub>c</sub> は、口径 28.5cm の大型で、口径よりもわずかに胴径が大きく、頸部のくびれが目立つ。外面はハケ調整ののち、ミガキに近い板ナデを行う。鍋 b は球形の胴部と、それよりも大きく開く口縁を持ち、器高は口径の 8 割程度である。胴部の厚みに比べて口縁が数倍の厚みを持つ。皿 A<sub>b</sub> は体部下半まで及ぶ。



### 3 平安時代中期の土器 (PL. 15・25)

この時期の遺物は川 SD25 から出土している。ほかの遺構からはまったく出土していない。川 SD25 では各層から出土し、そのうちでも 1 層から 3 層までが特に多い。一部の器種では層位によって、わずかながら時期差の認められるものもあるが、総体的には一時期の遺物として扱える。

須恵器、土師器、黒色土器、陶器があり、その比率はおよそ 1:8.5:3:1 となり、圧倒的に土師器が多く、黒色土器がそれに次ぐ。器種別にみると、皿、椀、羽釜が主要なものでこの比率はおよそ 4:3:2 となる。しかも皿・羽釜はすべて土師器、椀の大半が黒色土器であり、質（種類）による器種の片寄りが著しい。そのほか壺・甕・高杯・鉢もわずかにある。以下、各種類・器種ごとにその特徴を記述する。なお、器形の記号はこの時期だけのものであって、ほかの時期とは関係ない。

	1層	2層	3層	4層	あげ土	計		1層	2層	3層	4層	あげ土	計	
須恵器							黒色土器							
壺	A	1				1	椀	A <sub>1</sub>	3				4	7
	B	1	1		1	3		A <sub>2</sub>	1	6	2		3	12
	C			1		1		A <sub>3</sub>	2	6	3	2	6	19
甕	A				1	1	椀	B <sub>1</sub>	4	2			1	7
	B			1		1		B <sub>2</sub>		1	3		1	5
	C		1			1		B <sub>3</sub>	1					1
	D			1		1								
椀	A				2	2								
	B				1	1								
	C	1				1								
鉢		1				1								
土師器							緑釉陶器							
甕	A		2			2	椀				1		1	
	B		1			1	皿				1		1	
	C			1		1	無釉陶器							
皿	A	5	11	25	1	15	57	椀	A		1		1	2
	B	4	14	1	1	2	22			B	1			
	C	1					1	灰釉陶器						
	D					1	1	壺	2	1	3	1	1	8
椀				1		1	椀				2	1	2	5
高杯	1					1								
羽釜	14	4	7	9	2	36								

Tab. 8 SD25 出土土器層位別個体数

### 須恵器 (241 ~ 247)

須恵器には、壺・甕・椀・鉢があり、先の3種は器形によって幾つかに分類される。壺にはA・B・Cがある。壺Aはゆるやかに広がる口頸部と、玉縁状の口縁が特徴である。胴部以下を欠く。灰白色を呈し、あまい焼成である。壺Bは筒状の口頸部と、わずかに膨らむ胴部を持つ、いわゆる瓶子の形態である。胎土が緻密で灰色～暗灰色を呈するものと、壺Aに似て灰白色のあまいものがある。底部は糸切りである。壺Cは口縁部と底部を欠くが、鼓腹状に張る胴部に特徴がある。雑なタタキで成形を行い、軽くナデている。胎土は粗く中世陶器に似る。

甕は4例あるが各々形態を異にする。甕Aは短めの頸部に折れて開く口縁がつく。胎土は緻密で、芯が茶灰色、表面は青灰色を呈する。甕Bは、甕Aに似た形態であるが、口縁がわずかに立ち上がる。胎土は堅微で、表面に袖が出ていることから、あるいは灰袖陶器かもしれない。甕Cは、外面にタタキの残る粗雑なもので、口縁だけナデて面をとっている。壺Aと同様な胎土、焼成である。甕Dは短めの口頸部が折れて開き、直口である。外面はタタキのまま、口縁部だけナデる。胎土・焼成は壺A・甕Cと同様である。

椀は例数も少なく、また全形を知り得る個体も少ない。椀Aは湾曲する体部にわずかに返りのある口縁がつく。恐らく高台を有するものと思われる。椀Bは高台を持たず、平底・糸切りのものである。椀Cは深い体部と角ばった低い高台を持つのが特徴である。重ね焼き痕が明瞭に認められ、内外面とも瓦器の断面のような灰白色を呈し、口縁端だけ黒変している。

鉢は底部・体部とも薄手で、口縁部だけを厚手に造る特徴的なものである。底部は糸切りで、高台を持たない。胎土は精選され、焼成も灰色で良好である。

### 土師器 (221・229・239・212 ~ 220・230・231)

土師器には、甕・皿・椀・高杯・羽釜があり、甕・皿は数器形に分類される。数の上では圧倒的に皿が多く、ほかは希少である。

甕Aは、口縁端が軽く内側に肥厚する通例の器形である。甕Bは短い口頸部が折れて開く器形である。甕Cは小型で、口頸部がわずかに外反する。これは内面が黒変し、黒色土器とも考えられるが、内外面ともミガキは認められない。いずれも胴部以下を欠き、詳細は不明である。

皿は器形からA・B・C・Dに分類され、大きさは口径16cm、13cm、10.5cm、8cm前後の4段階がある。皿Aは薄手で、口縁部にナデを一段持ち、端部が軽く内側に巻き返る形態

である。皿 B は口縁部のナデが強く、外にそり返る形態である。端部は皿 A と同様である。皿 C は皿 B と同形であるが、それよりも厚手の造りである。皿 D は平らな円板の端部を内側に巻き返した形態である。これらの出土層位をみると、皿 A は 3 層に多く、2 層がそれに次ぐ。皿 B は 3 層以下は希有で、2 層に集中する。皿 C・D は 2 層以下からの出土例はない。このことから皿 A → 皿 B → 皿 C・D という変遷が想定できる。

椀は高台だけの破片で体部以上の形態は不明である。高杯も 9 角の面取りをした脚部が出土しているだけである。

羽釜は鏝の部分や口縁のおさめ方に若干の個体差を認めるが、形態分類をするには至らない。全形のわかる例はなく、各部分の破片から推定すると、口径と器高がほぼ一致する。底部は丸底である。砂粒を多く含み、粗製品である。

#### 黒色土器 (222 ~ 228・238)

黒色土器は椀だけである。内外面とも黒色を呈する B と内面および口縁外面だけに黒色を呈する A とがある。各々の外面調整の相違から 3 分類される。椀 A<sub>1</sub> は外面をケズるもので、器高はほかに比べ高く、体部と底部の接合例はないが、恐らく高台も断面三角形のしっかりしたものが付くと推定される。椀 A<sub>2</sub> は外面を指押えのまま未調整とするもので、椀 A<sub>1</sub> よりも器高は低い。椀 A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub> とも体部以上を厚手に造ることを通例とする。椀 A<sub>3</sub> は外面を指押えののちミガクもので、ミガキ方は口縁部と体下半部を中心に行うもの、全面行っても押圧が残るものなど、一般的に雑である。器高は椀 A<sub>2</sub> よりさらに低く、体部の厚みも薄く一定していることが特徴である。

椀 B<sub>1</sub> は内外面を丁寧にミガクもので、体部は深く、高台も高くしっかりしている。椀 B<sub>2</sub> は椀 B<sub>1</sub> に比べ外面のミガキは雑で、体部も浅めである。このほか、外面をケズる椀 B<sub>3</sub> もあるが、これは椀 A<sub>1</sub> の黒変が外面体部まで及んだものかも知れない。椀 B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub> とも底部外面をミガクことが椀 A にはない大きな特徴である。

椀 A・B を問わず胎土は茶褐色または褐色のザラついた感じのものが多いが、椀 A<sub>1</sub> では橙白色の例が多い。

各器形の出土層位みると、4 層以下は椀 A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>・B<sub>2</sub> があり、2 層ではこれに椀 B<sub>1</sub> が加わり、1 層では、椀 A<sub>1</sub>・B<sub>3</sub> が加わる。概して外面ミガキからケズリへの変遷はうかがえるが、層位順の変遷を想定するには一考の余地がある。

#### 緑釉陶器 (233・235)

椀と皿がある。椀は器高が低く、高台を持たず、底部は糸切りのままである。体部の中

位に稜を持ち、その上半は軽く開く。外面の稜と対応する体部の内面に軽い段を持つ、硬質で釉は底部以外に施されるが黒色に変質している。

皿は角ばった低い高台を持ち、体部下半は直線的で、上半は外に心持ち反り返るように開く、内面に軽い段を持つ。硬質で、釉は濃緑色を呈する。

#### **無釉陶器 (240)**

硬質と軟質があり、前者は灰釉陶器、後者は緑釉陶器と胎土・形態の共通性がある。

椀Aは軟質で、低い高台を持ち、この部分は貼り付けたのちケズっている。内面はミガいている。胎土は柔らかく乳白色を呈する。

椀Bは硬質で、高台を持たず底部は糸切りのままである。胎土は灰白色でザラついた感じである。

#### **灰釉陶器 (232・236・237・234)**

小破片が多く、器形の不明なものが多い。大型の壺・小型の壺・椀を確認している。

大型の壺は最胴部に耳を持つ例で、その部分に孔を穿つ。三耳壺か四耳壺かは不明である。小型の壺は筒状の頸部と球形に張る胴部を持ち、須恵器壺に近い形態のようである。

椀は体部が弧状に張り、断面三角形に近い高台を持つ。詳細は不明である。

## **4 瓦 (PL. 16・17・26・27、Fig. 31～33)**

瓦はコンテナにして約6箱と少量で、調査地で検出された建物が葺けるほどの量ではない。主として低湿地SD21から出土している。ほかにⅡ期の建物の柱穴からも出土しているが、ほかの時期の建物柱穴からはほとんど出土していない。

### **1 有郭重弧文軒丸瓦 (253)**

瓦当部分だけで、それも丸瓦部分に接続する上部を欠く。三重圏文でその部分はカマボコ状に高まる。中心の円は径4.2cmでそれより2cm、2.6cmの間隔で円がある。外縁の内法17cmで1.3cmほどの厚みを持つ。範の基底からの高さは1.2cmほどである。顎部は厚さ4.2cmでその部分と瓦当裏面をヘラケズリ調整する。胎土に石英・黒色粒をわずかに含み、灰白色を呈する。表面の炭素吸着は良好である。SB11出土で、難波宮6018型式に近い。

### **2 有郭重弧文軒平瓦 (256)**

瓦当面は向かって右3分の1ほどの残存であるが、平瓦部はほぼ全幅が知られる。内区は幅1.8cm、高さ2.5mmでカマボコ状断面の二重弧線が走り、両側面をとじる。外縁の幅は推定6.5cmである。顎は平瓦部からしだいに厚みを増し、明確な境を持たない。平瓦部

は厚さ 5.5cm、幅約 28cm で、凹面は瓦当より 5.5cm、両側面寄り 2.5cm～3.5cm を面取りする。そのほかは縦方向にナデる。凸面はタタキののち縦方向にナデる。胎土に大粒の石英・黒色粒を含み、幾分緑がかかった灰白色を呈し、須恵質である。SD21A 群出土。平城宮 6572C とと思われる。

### 3 有郭重弧文軒平瓦 (254)

2 の重弧文とはほぼ同文である。瓦当面の幅は 5.5cm で、向かって左側 1/4 の残存である。顎と平瓦部の境は不明瞭である。調整は磨滅のため不明である。胎土に石英・黒色粒などを含み、緑がかかった灰色を呈する。1 トレンチ 3 層からの出土である。

### 4 有郭重弧文軒平瓦 (257)

2、3 と同文と思われる。内区弧文間は 1.4cm、外縁内法 4cm、瓦当幅 6cm である。凹面は瓦当より 4cm までを横方向にナデ、そのほかは雑にナデる。凸面もナデているが、方向は不明である。胎土に石英・黒色粒などを若干含み、灰白色を呈する。表面に若干炭素が吸着する。SD21A 群出土である。

### 5 有郭重弧文軒平瓦 (255)

三重弧の文様である。各弧間は 2.3cm で、外縁は 2～4 よりも傾斜して高く、その内法 9.5cm、瓦当幅 12.5cm である。顎と平瓦部の境は不明瞭である。凹面は瓦当より 4.5cm ほどを面取りする。凸面は横方向にナデる。胎土に石英・赤色粒・黒色粒を含み、芯は灰白色を表面は橙灰色を呈する。SD21A 群出土である。

### 6 有郭重弧文軒平瓦 (259)

5 とほぼ同文である。外縁と内区の文様の高さがほぼ等しく、文様の線は平らに近い面となる。三重弧のうち、両端が連結するのは上と下の 2 本で、中の弧線は途切れる。瓦当幅は 6cm である。顎は凸面では平瓦部よりなだらかに移行し境を持たないが、凹面では幅 4cm ほど高まり、この部分を面取りする。平瓦部凹面は縦方向にナデ、側面により 1.8cm を面取りする。胎土に大粒の黒色粒を含み、緑がかかった灰色を呈する。須恵質である。SD21A 群出土、平城宮 6574 型式かと思われる。

### 7 有郭重弧文軒平瓦 (258)

5・6 と同文である。内区の文様と外縁の高さはほぼ等しい。瓦当幅は推定 6.5cm である。ほかよりも顎と平瓦部の境は明らかで、この幅は約 3.5cm である。凹面は瓦当から 3.5cm ほどと、側面より 2.5cm を面取りし、平瓦部は側辺と中央を縦方向にナデる。凸面も縦方向のナデである。胎土に黒色粒を多く含み、灰色を呈する。須恵質に近い。SD03 出土。

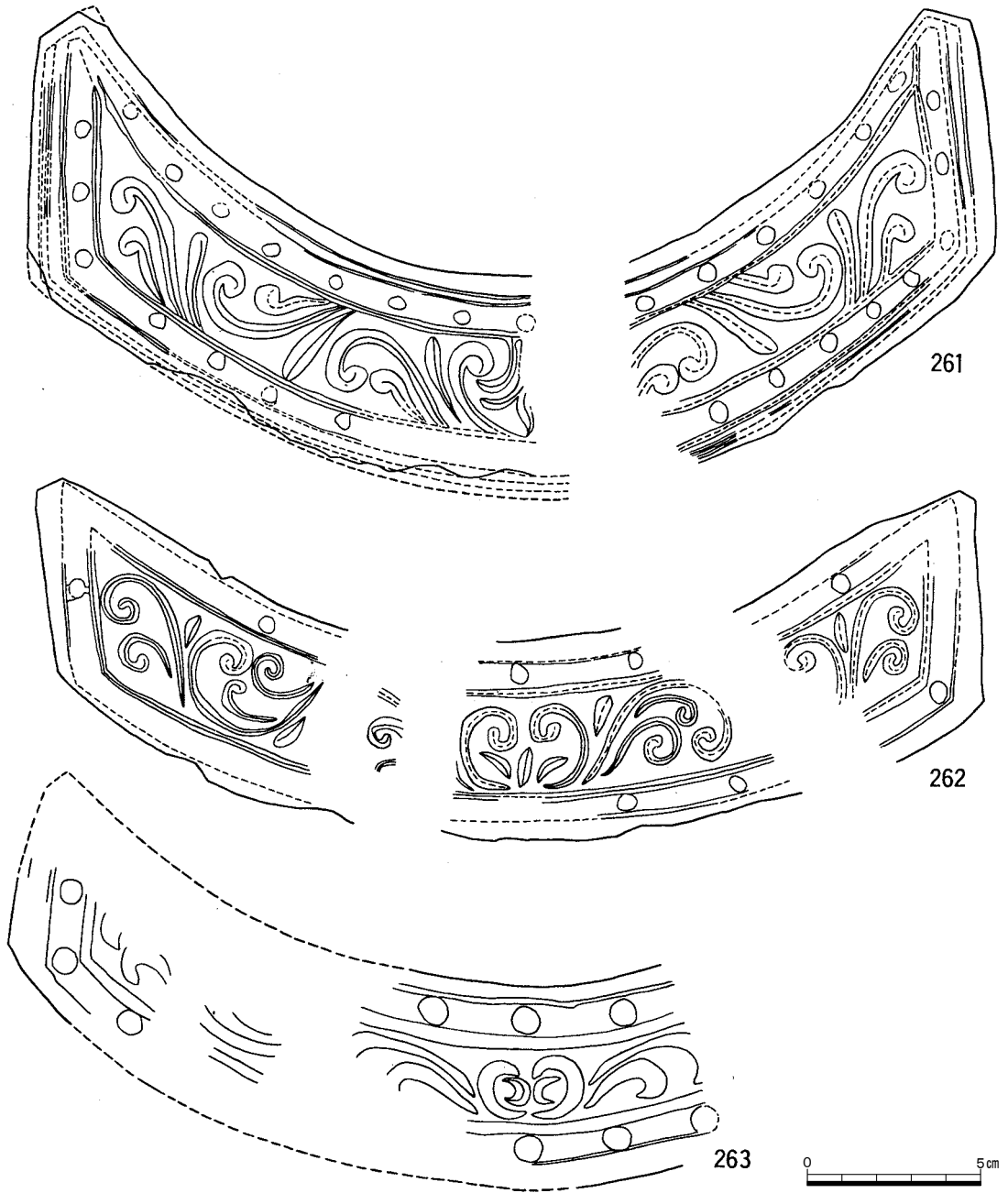


Fig. 31 軒平瓦瓦当文様実測図 (1:2)

## 8 唐草文軒平瓦 (261 左)

向かって左側半分の瓦当破片で、9はこの右側の破片である。内区幅3cmで、中心飾りに上から垂下する線と、蕨手文を2単位配し、中心から唐草文が3転する。唐草文の単位は主葉と、その両側各1本ずつの支葉からなる。文様の各線は中央が稜をなす。上外区に珠文を推定15個、脇外区に珠文を3個、下外区に珠文を推定16個配する。なお脇区と下外区では、その端の珠文を共有する。上外区と脇外区との間に界線を持つ。周縁を含んだ幅は5cm、周外縁を含んだ幅は6.3cmである。顎は幅6cmで、平瓦部との境をケズって段をつけている。平瓦部凹面は瓦当に近い部分を横方向にケズる。また側面より1.8cmほどを面取りする。平瓦凸面はタタキの痕が残る。精選された胎土で、白色を呈し、表面の炭素吸着は良好である。SD24出土。平城宮6694型式である。

## 9 唐草文軒平瓦 (261 右)

8と同範で、一見同一個体にみえるが、この瓦当は筈の打ち直しをしており、別個体である。そのほかの特徴は8と同じ。ただ上外区と脇外区を分ける界線は隅には向かわず、上方に向かっている。これは平城宮6694型式にはみられず垂式となるかもしれない。SD21B群出土である。

## 10 唐草文軒平瓦 (262 右)

3片の瓦当であるが、出土地点が同じで、同一特徴を持ち、1個体と考えられる。内区は幅2.9cmで、中心飾りに内に巻き返る一対の蕨手文と、下から上に向う線とその両側に外に開く線を配する。唐草文は中心より外に向かって3転する。2転目までは主葉と2本の第1支葉と1本の第2支葉が単位となるが、3転目は主葉と第1支葉・第2支葉とも各1本ずつである。各文様の彫りは8、9の感じに似ている。上外区には9個の珠文を、脇外区には各3個の珠文を、下外区には9個の珠文を配する。4隅の珠文は各外区で共有する。瓦当幅は5.8cm、瓦当横幅は推定27cmである。顎は幅2cmと狭く、弧を描く段をなして平瓦部に接続する。平瓦部凹面側面寄りを軽く面取りする。胎土に石英・赤色粒を多く含み、乳灰色を呈する。炭素吸着は弱い。SD21A群出土である。平城宮・長岡宮ともに例をみず新形式である。

## 11 唐草文軒平瓦 (262 中央、左)

瓦当中央部と左側の破片で、同一個体と思われ、ほぼ全様を知りえる。内区は幅2.4cmである。中心飾りは簡素で、外側に張る一対の弧線間に、外に開く一対の小弧文を配する。唐草文は外に3転し、その単位は主葉と第1支葉からなり、第2支葉が欠落している。文

様の彫りは鈍重で、唐草文も巻き返りが少なく、流れ気味である。外区の珠文は径が8mmと大きく、上外区・下外区共に10個で、脇外区に3個ずつを配し、4隅の珠文を共有する。瓦当幅5.8cmである。顎は2.7cmで、弧状の段をなし厚さ3.8cmの平瓦部に移行する。平瓦凹面は瓦当より5cmほどをケズリ、ほかは布目が残る。凸面はナデる。胎土に大粒の石英・チャートを含み、芯は黒灰色を呈し、表面は乳灰色を呈する。焼成は悪い。SD21B群出土である。ほかに例をみず新形式である。

## 12 唐草文軒平瓦 (262 右)

向かって右端の少破片である。内区幅1.8cmで、唐草文は主葉だけで支葉は消失している。瓦当幅は4.5cm、顎幅1.8cmである。2トレンチ第3層出土で、平安中期のものか。

## 13 平瓦・丸瓦 (265・264)

平瓦・丸瓦とも破片が多く、全形を知るものはわずかである。

丸瓦は瓦当付近幅16.4cm、高さ9.3cm、丸瓦部長さ31.3cm、

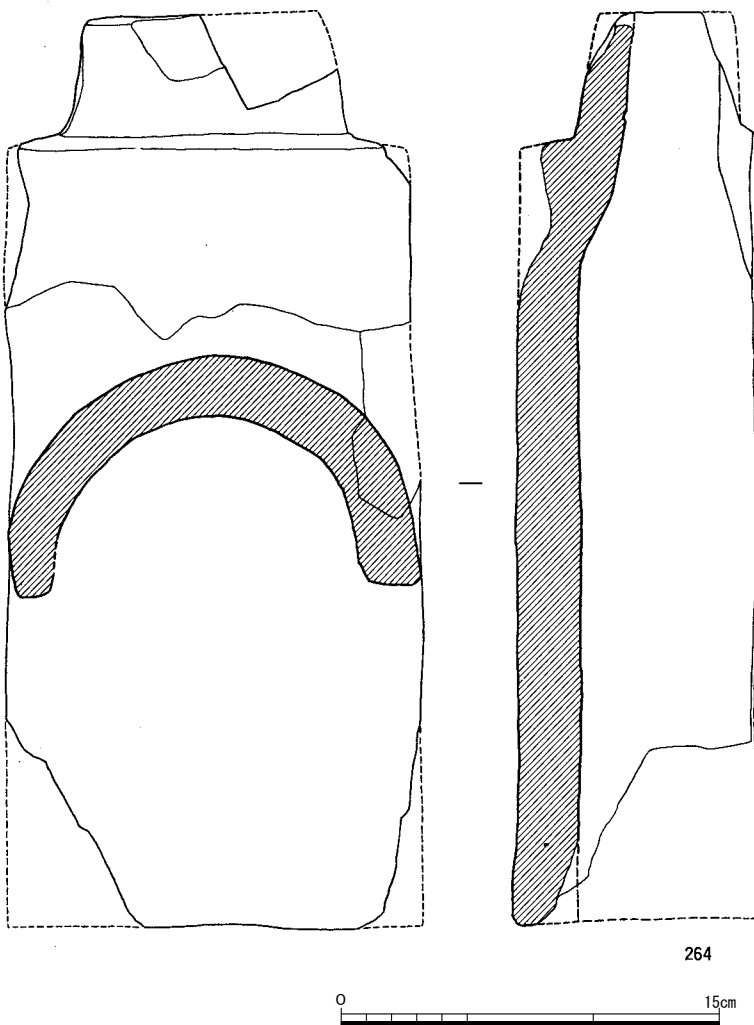


Fig. 32 丸瓦実測図 (1:3)



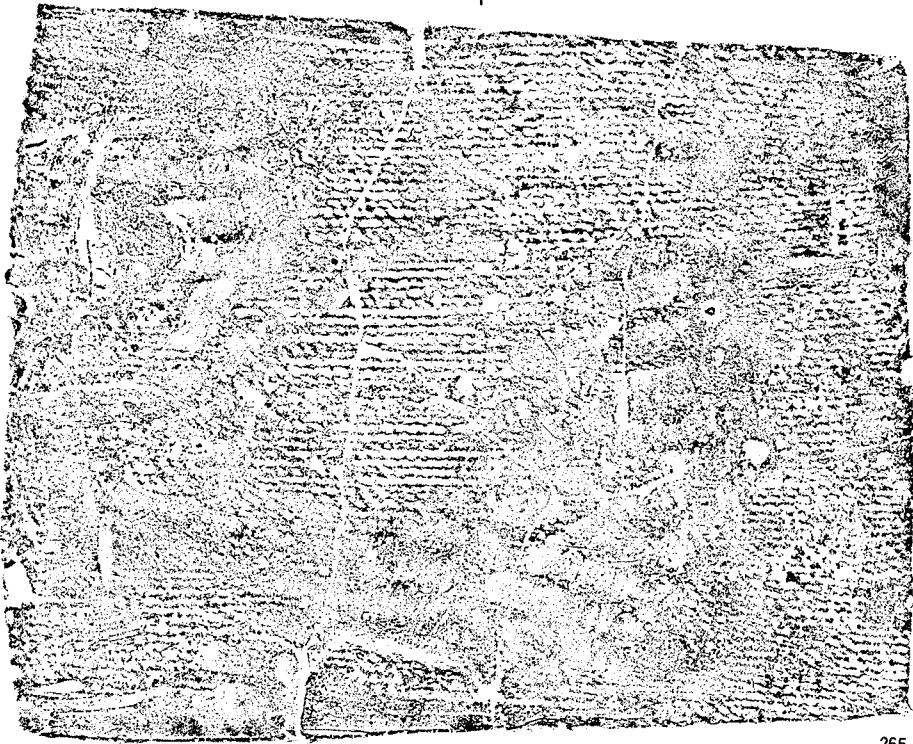
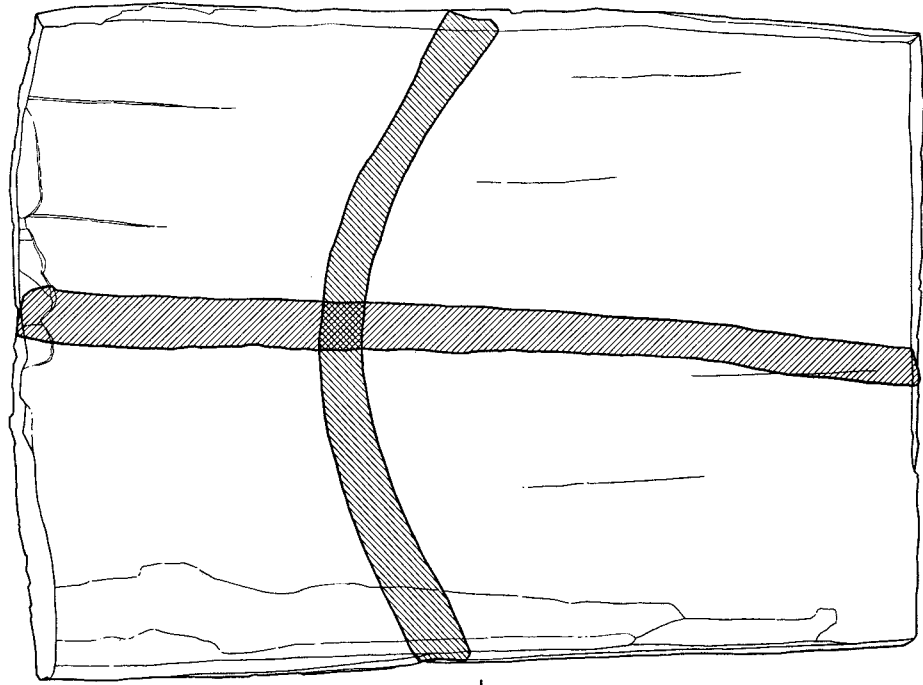


Fig. 33 平瓦実測図 (1:3)

玉縁部分長さ5cmである。各部分の特徴をみると、瓦当部や側辺部の内側を面取りするものとしがないものがある。また丸瓦部外面の調整では横方向にナデ調整をするのが一般的であるが、さらに頂部や側辺部を縦方向にナデる例もある。胎土や色調からは、須恵質、黒色、黄（灰）色、黄白色、橙白色、緑灰色、白色に分かれる。

須恵質は砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈する。黒色は石英や雲母などを含む。表面は黄灰色を呈する。黄色は大粒の石英を含み、チャートや赤色粒を含む例もある。黄色ないしは黄灰色を呈する。黄白色は石英や赤色粒を含み、チャートを含むものもあり、幾分緑がかった黄白色を呈する。橙白色は砂粒をほとんど含まない例と、赤色粒を含む例があり、緑がかった灰色を呈する。白色は大半が石英と赤色粒もしくは黒色粒を含む。乳白色を呈する。

数量は、白色が半数で、黄白色・黄色がそれに次ぎ、それ以外はごくわずかである。各部分と調整の関係をみると、瓦当部内側の面取りは、白色では半数にあり、それ以外ではまれである。側辺部の面取りは黄白色と橙白色にまれにみられる。従って、瓦当部の面取りと側辺部の面取りは、必ずしも同一個体に現れない。外面の縦方向のナデ調整は、3分の1の個体にみられ、胎土・色調による偏りは認められない。

平瓦は完形例では広端（弧）幅28.3cm、狭端（弧）幅25.5cm、長さ35cmを測る。各部分の特徴では、端面や側面を面取りするものとしがないものがあり、凹面は布目のままのものとなデるもの、凸面はタタキのままのものとなデるものがある。また、糸切り痕を認める例もある。胎土・色調は丸瓦のものほかに青白色があり、これは砂粒をほとんど含まず、炭素の吸着が良好である。

各胎土・色調の比率は、緑灰色が半数近くで、ほかはほぼ同数である。調整との関係をみると、端面を面取りする場合は側面も面取りするのが一般的であるが、須恵質だけは異なり、どちらか一方を面取りする例が多い。なお、全体の6割が面取りをしている。凹面のナデは青白色に多くみられ、ほかでは須恵質・白色にみられ、黄色・黄白色ではまったくみられない。凸面の中では緑灰色に比較的多く、ほかはほとんどない。

平瓦と軒平瓦の胎土・色調を比較すると、5～7の軒平瓦と須恵質平瓦は同一で、8・9の軒平瓦と青白色平瓦、10の軒平瓦と橙白色平瓦、11の軒平瓦と黒色平瓦も同一胎土・色調である。また2～4の軒平瓦は黄色・黄白色・緑灰色平瓦に近く、白色平瓦は2～7に近い。これら胎土・色調の同一のものは、同系の窯の製品とみるべきであろう。

## 5 そのほかの遺物 (PL. 18、Fig. 34 ~ 37)

### 製塩土器 (297 ~ 300)

低湿地 SD21A 群・B 群から集中して出土し、その量はコンテナ 3 箱にのぼる。そのほか建物の柱穴からも若干出土している。大多数は小破片で、しかも二次的焼成を受け磨耗が激しく、全形を知りえるのはわずかである。

破片の観察から二つの形態が知られ、その一つは口径 9cm 程度で、細い筒状の体部を持ち、丸底に近い平底を持つ。器高は推定 15cm 前後である。この器形のもは器壁が比較的薄く、また内面に指ナデの痕跡を明瞭に残す。もう一つは口径 14 ~ 15cm で、体部はゆるやかに開く。底部は前者と同じであろう。体部は厚手で、底部付近は薄手である。内外面とも雑な指オサエカナデで、まれに内面に布目の痕跡を持つものもある。胎土はいずれの形態も石英・チャート・赤色粒などを多量に含み、前者は概して黄白色を呈し、後者は赤褐色を呈する。底部の破片の少ないのが気になるが、塩壺として当地に搬入されたものであうか。

### 土馬 (266・267・301 ~ 304)

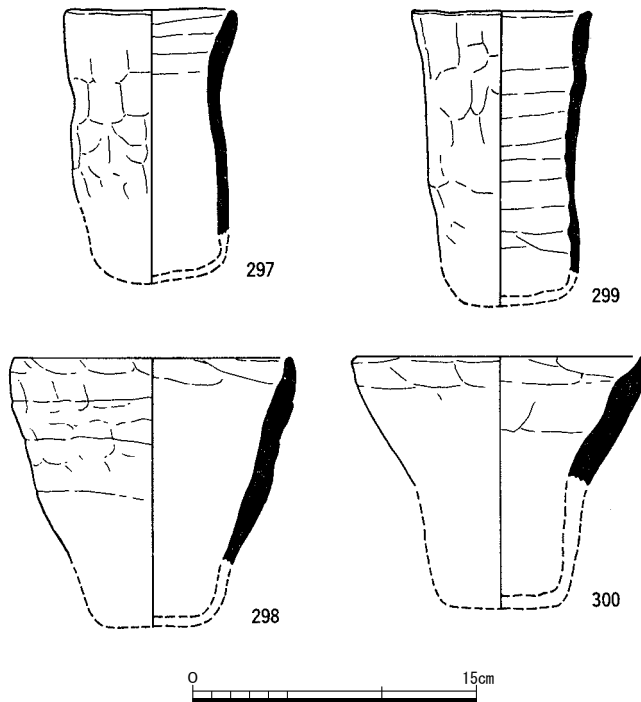


Fig. 34 製塩土器実測図 (1:4)

土馬はすべて破片で、6 点出土している。SD21A 群から 3 点、同 B 群から 2 点であり、長岡京期のものとみて誤りなく、すべて同趣である。

粘土を折り曲げて胴部を造り、それから四肢・尾をつまみ出す。首は幾分前にもたれるように高く、これを粘土を折り曲げた頭ではさみ込む。目は頭の中位にあり、竹管を持って眼を表わす。腰高 8cm、頭高 12.5cm、体長 12.5cm である。この時期の土馬にしては胴が短めである。

石帯 (268)

SD03 から 1 例出土している。基底部は  $3.25 \times 3.5\text{cm}$  と心持ち長方形を呈し、上面はそれよりも各辺が  $1\text{mm}$  ずつ内に入る。厚さは  $6.5\text{mm}$  である。裏面には四隅から  $1\text{cm}$  と  $1.4\text{cm}$  入ったところの対角線上に紐止めの孔を穿っている。上面および側面は丁寧に磨研されるが、裏面は粗雑である。石質は安山岩質である。この種の石帯は平安時代に入るものとみられていたが、<sup>註6</sup>本例は確実に長岡京期までさかのぼる。

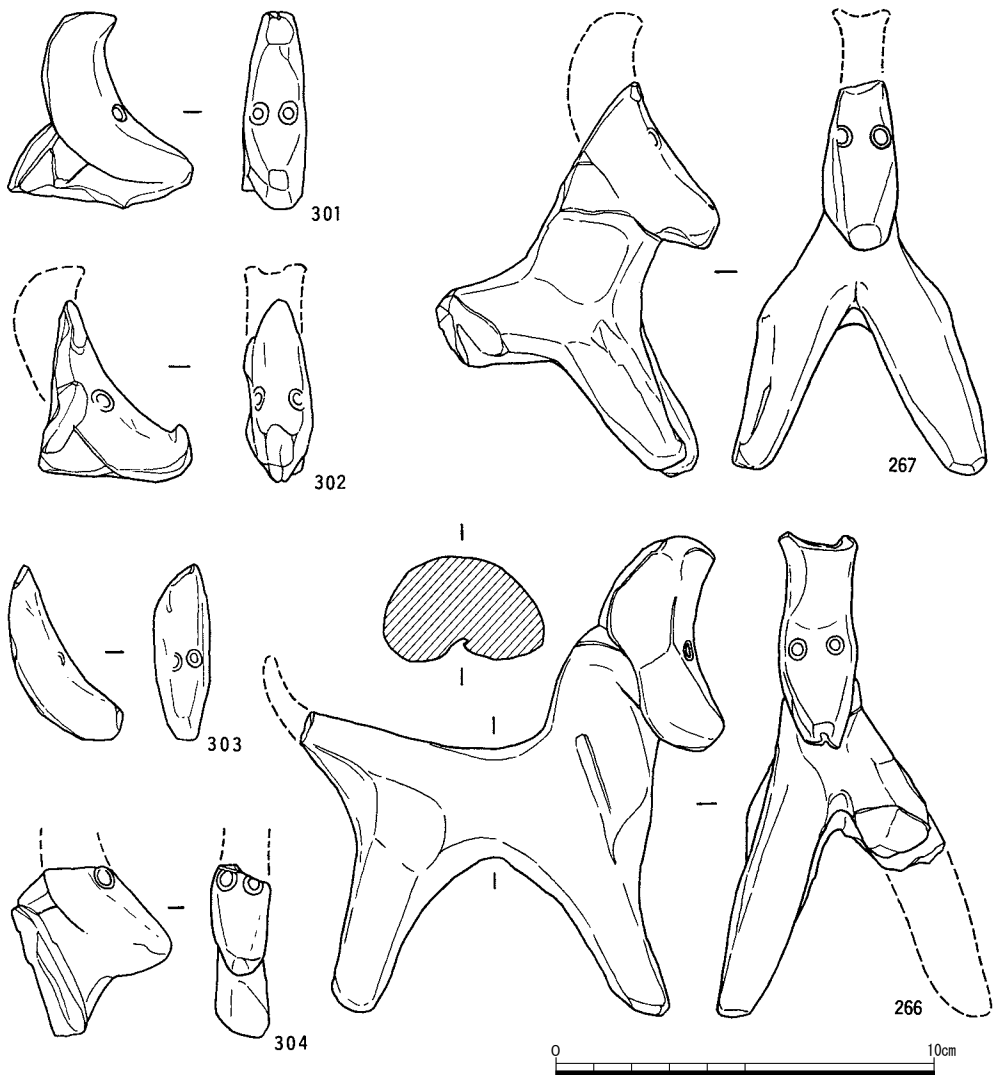


Fig. 35 土馬実測図 (1:2)

### 石斧 (272 ~ 274)

石斧は3例出土しているが、すべて二次堆積によるものである。

蛤刃石斧 (274) は凝灰岩質で、磨研は丁寧で敲打成形痕はほとんど消失している。刃部幅 6.2cm、体部厚さ 5cm である。2 トレンチ近代溝出土である。

もう1例の蛤刃石斧 (273) は刃部の破片である。刃部と側辺に打痕が残るが、これは二次堆積の際のものかも知れない。先の蛤刃よりも磨研は粗雑で、体部の断面も偏平である。凝灰岩質で、SD25 からの出土である。

方柱状片刃石斧 (272) が1例出土している。体部から刃部の調整は丁寧であるが、基部は原

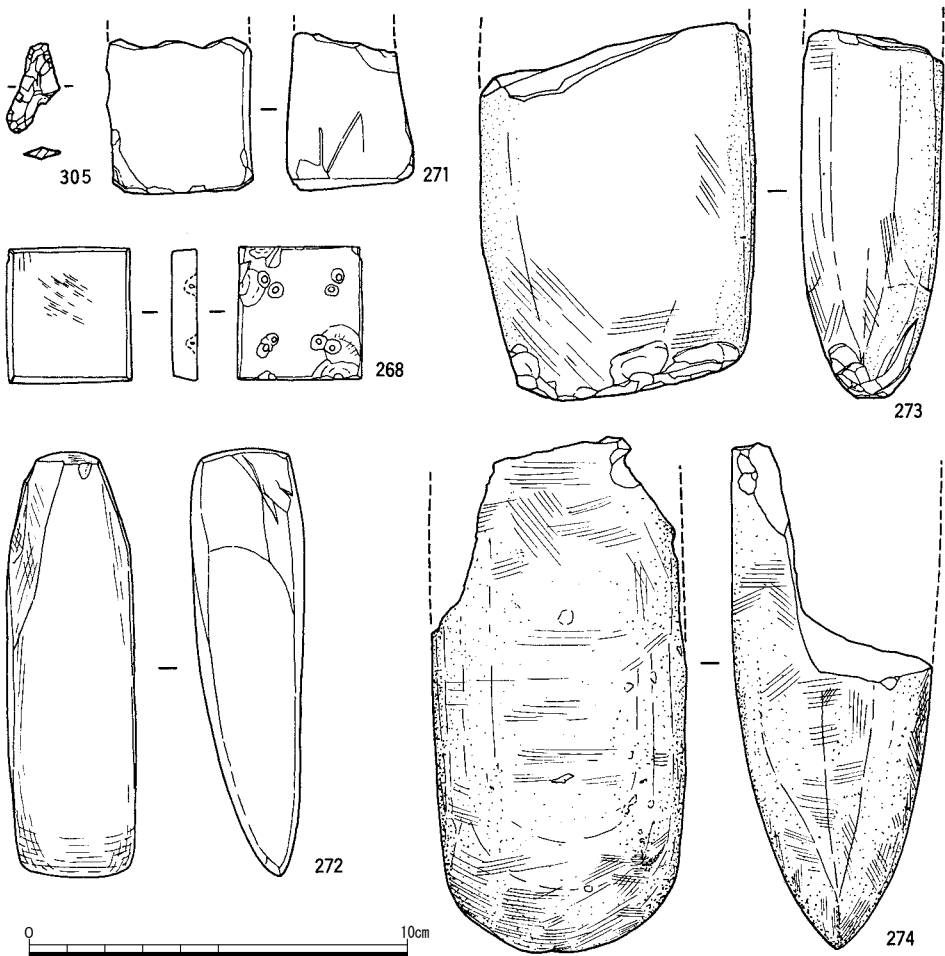


Fig. 36 石器・石製品実測図 (1:2)

面が残り形が歪む。全長 11cm、幅 3.3cm、基部厚さ 3cm である。砂岩質で、SD25 から出土している。

これらは形態の特徴から弥生中期前半代のものと推測される。

#### 石鏃 (305)

1 点出土している。凹基式三角鏃で、先端と基部の一端を欠損する。現存長 2.3cm で、青灰色を呈する安山岩製である。1 トレンチ SD21 青灰色粘性土出土である。

#### 砥石 (271)

SD25 第 2 層から 1 点出土している。方柱状で、4 面を砥面とし、そのうち 1 面は焼けている。石質は火成岩であるが詳細は不明。

#### 凝灰岩切石 (275)

SB12 に付属すると思われる柱穴から出土している。現在長 28cm ほどで、幅 10.5cm、厚さ 7.7cm ほどである。なお 1 側面の 1.7～2cm のところに厚さ 3.9cm の段状部分がある。その部分の幅は不明である。東石と思われる。一部に焼けた痕跡をとどめる。

#### 銭貨 (Fig. 37)

暗渠から 2 枚出土している。1 枚は「熙寧元寶」、もう 1 枚は「元豐通寶」である。いずれも北宋銭である。

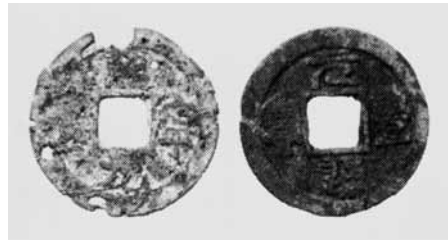


Fig. 37 銭貨

#### 註

- 1 滋賀県湖西線関係遺跡、大津宮関連遺跡など。滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』昭和48年(1973) 大津市教育委員会『大津宮関連遺跡』昭和51年(1976)
- 2 平城宮の統計例は奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』昭和37年(1962)を参照。
- 3 第5章2を参照。
- 4 体部の傾きの目安として、(口半径-高台部半径)÷器高より算出。
- 5 緑釉陶器羽釜・火舎の出土例は、興福寺一乗院、平城宮跡、長岡宮跡にある。  
京都府教育委員会「長岡宮跡昭和44年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報(1970)」昭和45年(1970) 八賀 晋「一乗院発掘調査概要-出土遺物-」「奈良国立文化財研究所年報(1964)」昭和39年(1964) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』昭和50年(1975)
- 6 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』昭和50年(1975)

# 第5章 考察

## 1 長岡京の条坊と地割・宅地

### 発見した溝と道路

今回発見した奈良時代後期から平安時代初期の遺構に関して、問題となるのは長岡京との関係であり、特に時期が長岡京期と推定されるⅡ期とⅢ期の遺構群については、その関係を抜いて遺構の性格を考えることはできない。

近年、長岡宮・京の発掘が進み、長岡京の条坊復元作業もある程度の成果を得ているが、それを長岡京全域に推し広めるには至っていない。条坊計画については、その基本を平安京にならうことはしかたがないが、第1章でふれた問題点を残している。このような状況の中で、検出遺構と長岡京の関係を正確に把握するのは困難であるが、今までの発掘成果をふまえて考えてみよう。

第3章で述べたように、Ⅱ期とⅢ期の建物群は、北を東西方向の溝群で画され、南も3トレンチの溝群で画される。東西の区界は調査地内では検出されなかったものの、南北と同じく一定基準で区画されることが予想される。このことと、建物がほぼ真東西・南北を軸として建てられていることから、長岡京内の1区画を占有する建物とみなせるであろう。共に建物を区画する溝群は、長岡京の条坊に規制された溝であり、以下のことによって、道路の側溝もしくはそれに関連する遺構とできる。

第一に、それらが一对の溝として調査地の南と北で検出されたこと、またそれらによって区画される宅地内の広さが適当とみられる。

第二に、左京2次調査（向陽高校建設予定地 - 以下左京2次と略する<sup>註1</sup>）で検出された東西方向の溝SD52とSD54が当遺跡のSD01～SD04と一直線をなし、これらの溝群の方向が長岡宮朝堂院南北中軸線に直交することが地図の上でうかがえる。

後者のことから、当遺跡と左京2次の両溝群が同一道路に関連するものであることが指摘でき、前者によって、南の溝群もまた道路に関連する遺構であると考えられる。

次に、南北両溝群について検討してみる。

まず、一对の溝となるのは、Ⅱ期ではSD26とSD27、Ⅲ期ではSD01とSD02であり、Ⅱ期のSD03とSD04も対になる可能性がある。一方、各期で南北両溝間の距離を測ると、Ⅱ

期のSD03とSD26間の距離は116.5mであり、Ⅲ期のSD02とSD28間の距離は134.5mである。平安京・平城京とも、大路に接するか否かで宅地部分の側溝間の距離は異なるが、平安京では、大路に接する場合、側溝間の距離は125.1m、接しない場合124.2m、平城京では大路に接する左京三条二坊十五坪の調査例<sup>註2</sup>では121.2m、大路に接しない左京三条二坊六坪の調査例<sup>註3</sup>では123.9mである。これらの数値と当遺跡の数値を比較すると、Ⅱ期ではいずれの値よりも幾分短く、Ⅲ期ではいずれの数値よりも幾分長い。

次に道路部分の側溝間距離は、Ⅱ期のSD03とSD04(SD04をSD03と同規模とする)の間は約17.6m、SD26とSD27の間は8.6m、Ⅲ期のSD01とSD02の間は7.8mである。これを平安京の大路側溝間距離18m、小路のそれ7.8m、および平城京の調査例<sup>註4</sup>の大路側溝間距離18m、小路のそれ6m(条間路・坊間路は11.8m)と比較すると、前二者は大路の数値を、後二者は小路の数値を示し、しかも平安京の数値に近い。しかし、これによって、Ⅱ期のSD03とSD04を大路の側溝と、SD26とSD27およびⅢ期のSD01とSD02を小路の側溝とするには速断すぎるので、調査された他地点の条坊遺構を合わせて考え、判断したい。

現在までに、ほぼ真南北・東西に走る溝を検出した例は幾つかあるが、一対の溝として検出した例は少なく、先にふれた左京2次におけるSD52とSD54およびSD65とSD66があげられる。このうち、SD52とSD54は当遺跡のSD01～4と同一の道路に関連する溝であり、SD65およびSD66はその一路北の道路に関連する溝である。従って、両遺跡を合わせると、3条の隣り合う東西方向の道路を検出したことになる。

ところで、左京2次におけるSD52とSD54間の距離は12.5m、SD65とSD66間の距離は6.1m、SD52とSD66間の距離は119.7mそれに両道路心々間は129mである。これらの数値を当遺跡と比較すると、SD52とSD54間の距離はⅡ期のSD03とSD04間の距離の三分二で、SD65とSD66間の距離は、Ⅱ期のSD26とSD27間の距離およびⅢ期のSD01とSD02間の距離より1.7m、2.5m短い。またSD52とSD66間の距離はⅡ期のSD03とSD26間の距離より3.2m長い。このように、かなり異なった数値を示すが、道路心々間距離だけは、Ⅱ期の129.6mとは、わずか0.6mの差である。従って当遺跡のⅡ期と同時期と考えることが可能であろう。なお左京2次の道路側溝間距離は、平城京の条間路および小路のそれに酷似することが注目される。

両遺跡で検出した隣の道路との距離が、酷似した値を持って位置することから、Ⅱ期では計画的にある基準を持って道路が造られたと理解できよう。しかも、両遺跡で検出した同一道路は、それに関連する溝間の距離から、大路(または平城京を例とすると条間路)



である可能性が強いといえよう。

### 大路と地割

左京 2 次では、この道路を三条大路と断定しているが、これについては今少しの記述を要する。今までの平安京に例を求めた長岡京条坊復元図と、偶然同じような位置にこの道路があったからという理由だけで、これを三条大路に比定している。しかしながら、報告者も指摘するように、各道路間の距離は平安京とは異なる数値を示し、これを解決しない限り、平安京を例とした長岡京の条坊復元・道路の比定は矛盾に満ちたものとなるであろう。

従って、今日までに検出した条坊復元に有効な遺構をもとにして、新たな条坊復元を考える必要がある。

平城宮第 1 次朝堂院・平安宮朝堂院の位置から、長岡京においても、朝堂院の南北中軸線すなわち大極殿と会昌門の中心を結ぶ線を、京の南北中軸線と考え得るが、都城計画については、宮の四肢が確定していない現在、その推定はかなり困難である。

しかし、次ぎのことによって、ある程度の推察は可能である。

左京 2 次と当遺跡で検出した大路と推定される道路の中心線と長岡宮朝堂院南北中軸線の交点は、地図上で測ると、大極殿中心より南へ 1070.0m にある。この距離は大極殿中心から推定応天門中心（朝堂院南回廊中心 - 宮・25 次発見 -）までの距離 272.8m のほぼ四倍にあたる。これから大極殿・応天門などの宮内の主要殿舎、京の道路の中心線などがある一定の距離 A で正しく割り付けされているのではないか、それは平城京の場合<sup>註5</sup>のような方眼割り付けであったろうと考えてみる。

そこで大路と推定される道路までの距離の 1/4 で、しかも大極殿中心から応天門中心までの距離に近似する値を A (=267.5m) とし、大極殿中心を基点に既記の方向を持って方眼を造るならば（この線を方眼基線と呼ぶ）、東へ A - 2.7m に内裏の南北中心線があり、東へ 2A + 3m に宮 61 次調査発見の SD6101<sup>註6</sup>、東へ 2.5A + 1.8m に左京 2 次調査発見の SD01、東へ 3A - 12m に左京 10 次調査発見の SD1007<sup>註7</sup>がある。一方南北方向では北へ 0.5A + 29m に左京 10 次調査発見の SD1005 があり、北へ 2A - 2m に宮 33 次調査（Y 地区）発見の長岡京時代東西方向の溝<sup>註8</sup>がある。

方眼の単位 A と条坊の関係は、A が平安京の 1 坊分の長さ 540m や平城京の 1 坊分の長さ 531m のほぼ 1/2 にあたることから、2A で 1 坊となるであろう。その値 535m は平安京と平城京の中間の値<sup>註9</sup>を示す。

なお、左京 2 次調査で検出された SD51 は、報告者はこれを東大宮大路の東側溝としているが、基線より東へ  $2A + 54m$  の位置にあり、方眼を道路の中心とするなら、平安京の同大路側溝間距離  $30m$  と比べて 3 倍以上の値となり疑問が残る。

これによって長岡京における方眼地割りが肯定され、その基点を大極殿中心に求めるならば、大路の位置は、坊方向の大路は基点より  $2A \cdot 4A \cdots$  の位置にあると推察されるが、東西方向の大路は次ぎの二つの場合が考えられる。

一つは基点より  $2A \cdot 4A \cdots$  に大路が位置すると想定する。従って南へ  $2A$  に二条大路を相定し、南へ  $4A$  の方眼にのる今回検出した大路と推定される道路を三条大路とする。もう一つは、基点より  $1A \cdot 3A \cdots$  の位置に大路を想定する。この場合、二条大路は南へ  $1A$  では朝堂院と重なり、不都合で、南へ  $3A$  にあるものとする。従って、南へ  $4A$  に位置する今回検出した大路と推定される道路は他京の大路に匹敵する道路幅を持つ 3 条条間路となる。

二条大路以南の条間路については、平安京の場合、ほかの小路と同規模であるが、平城京の場合にはほかの小路よりも幾分幅広いと推測される結果<sup>註11</sup>がでている。平安京に準ずる道路計画とみるならば前者の場合に限られるが、平城京に準ずるならば両者のいずれとも決しえない。

しかし、以下の理由によって後者の方が、より妥当であるとする。

1 一町の宅地の大きさや、道路側溝間の距離は若干異なるものの、左京 2 次・当遺跡とも道路心々間が  $129m$ 、 $129.6m$  と酷似した数値である。これは、単なる偶然ではなく、そこに、ある一定の基準を持つ条坊計画を認める。

2 一坊の大きさが  $535m$  である。

3  $1 \cdot 2$  をもとに、今回検出した大路と推定される道路を大路と仮定し、その幅  $17.6m$ 、それに小路幅  $7.6m$  で条間路の幅を求めると、 $535m - \{(17.6m \div 2) \times 2 + 7.6m \times 2 + 116.5m \times 4\} = 36.2m$  となり、大路より幅広い条間路となり矛盾が生じる。逆に、大路と推定される道路を条間路とすれば、この数式の解は大路の幅となり、矛盾が少ない<sup>註12</sup>。

4 当遺跡では大路と推定される道路を、その後(Ⅲ期)、小路と同規模の幅に縮小しているが、これを大路とすると不可思議である。

5 大極殿中心を基点とし、 $A$  を単位とする方眼を組み、現存する条坊遺制を拾うと、 $A$  の偶数倍の位置には小畑川に架かる橋を認め、 $A$  の奇数倍の位置に道路を認めるという結果<sup>註13</sup>が得られる。

しかしながら、両者のいずれかは二条大路の発見を待って判断するべきであり、ここでは留保しておこう。

### 宅地内の遺物

次に建物宅地内についてみる。

まず、一坊の大きさが判明し、方眼地割りによる条坊計画を推定し得たので、今回の調査地の長岡京における位置を求めると、先の考察により、三条大路とその一路南の小路の間、または三条条間路とその一路南の小路の間にあたる。また SB11 の中心は、朝堂院南北中軸線より東へ 1717.9m にあり、1 坊 535m から算出すると、東三坊大路とその一路東の小路の間にあると考えられる。従って、左京四条四坊一町または左京三条四坊三町に調査地は位置する。京の中心からは遠く離れ、周辺地帯というべき位置にあるが、東三坊大路や三条大路または三条条間路に接する一町であり、西南 500m に川原寺、東南 250m に羽東師神社という長岡京にとって重要な社寺が存在することを考え合わせるなら、相当の位置付けをあたえてよからう。

Ⅱ期では、この一町は分割されることなく、一町として班給された宅地とみる。それは次ぎのことによる。

まず、Ⅱ期の建物は柵 SA23 によって、南北に分断されるが、それ以上細かい宅地割りは認められない。しかるに北の建物群は、その部分における主屋とみなされる建物は SD11 以外には考えられないが、2×4 間とあまりにも規模が小さ過ぎる。

第二に、SB11 と SB24 はほぼ南北に位置し、各々の建物の中心は、SD03 と SA23 の間、SA23 と SD26 の間の北寄り五分の一に位置し、同一の配置計画によるものとみなされる。

第三に、南北両建物群に所属するような井戸は発見されず、共有する井戸を調査地外に考えねばならないこと。

第四に、調査地は一町のうちでも東半部分で、調査地外の西半部分に大規模な建物群を配置する余地がある。

従って、宅地は東西に区分され、東半部分ではさらに南北に区分されたとみることができ。これを、同じく一町宅地として班給され、宅地内建物配置の全貌がほぼわかる平城京左京三条二坊十五坪<sup>註14</sup>と比較すると、宅地を東西に二分することは同じであるが、建物配置は差があり、平城京例では主屋を中心とする 3 棟が两部分に整然と配列するのに対し、当遺跡では建物がまばらで、特に調査により明らかとなった東半部分は、規模から主屋とみるべき SB24 は、北の厨屋・板倉と推定される SB11・SB12 から遠く離れ、かつ、柵で画

される。宅地利用の差が顕著に現れているといえよう。

Ⅲ期においても、建物群の周囲を画する遺構は SA20 以外には認められないから、Ⅱ期同様に、一町を宅地とするものの一部とみなせる。しかし、Ⅱ期とは異なり、狭い地区に建物が集中し、家屋群としてのまとまりを示している。道路にごく近接した位置に、道路と棟を揃える SB06・07 が棟を接して並び、SB06 の南に SB14 が並列する。これから、Ⅱ期のように宅地を幅広く利用する建物配置から、道路との関連を重視した建物配置へという、道路に対する意識の変遷を認める。

SB06 と SB14 は共に片面廂の建物であるが、廂を両建物の内側に置くことは、廂部分の機能を考える上で、好資料となろう。

なお、SD21A 群からは、緑釉陶器や「川丸」の墨書を持つ土器が出土し、その住人の一人が知られると共に、一町の宅地を有するものの生活物資がどの程度であるかを暗示している。

## 2 長岡京期の土器

この時期の土器については、平城京の発掘成果があり、長岡京の前次までの調査からその内容が一部報告され、また梅川もこの時期の土師器について述べたことがある。今回出土した土器もおおむねそれらの特徴を持つものであるが、幾つかの新知見があり、一部で修正も必要である。特に須恵器については、胎土・焼成による分類を試み、その検討はほかの遺跡出土例をも合わせて行うべきであるが、当遺跡出土例だけを持ってしても、幾つかの知見を得た。再度、長岡京期の土器について考えてみる。

### 須恵器

この時期の須恵器については、胎土と焼成の相違による分類を試み、形態の特徴を知りうる個体について実施した。その特徴を以下に記す。

- a は胎土が柔らかく、灰～灰白色を呈しあまい焼成である。
- b は胎土がやや堅微で、ザラついてはいない。灰～灰白色を呈する。
- c は胎土が緻密で灰釉に近い陶土であり、青灰色を呈する。
- d は胎土が荒く、ザラついている。青灰色を呈する。
- e は b に近いが、堅緻さが幾分弱く、ややザラつく。焼成も幾分あまい。青灰色を呈する。
- f は b に近いが、胎土がやや荒く、ザラつく。色調は b よりも幾分白みが増す。
- g も b に近いが、胎土がやや荒く、ザラつく。堅緻なものもある。色調は緑色から紫色を呈する。
- h は g と胎土は近く、幾分あまい焼成で灰色が強い。
- i は b に近いが、胎土は白色みを増し、良選されている。ザラつきはない。
- j は g に近く、芯の色調が紫灰色を呈する。
- k は胎土に黒色粒を多く含み、青灰色を呈する。
- l は b と g の中間的様相を呈する。
- m は芯の色調が紫灰色を呈し、胎土は堅緻で、石英粒を多く含む。
- n は b と j の中間的様相を呈する。
- o は a と b の中間的様相を呈する。

各器種・器形におけるこれらの出現度を SD21 の A・B 群を例にとり表 9 にあげる。相互の関係で明らかに偏向性を認めるものは皿 B、鉢 A・B で、これらはいずれも胎土 a を持つ。そのほか杯 A でも幾分偏りをみせる。胎土別にみると、a は甕以外に普遍的に認

められ、b・cは蓋・杯に集中する。

各胎土の総計が4以上で、3器種・器形以上にわたる胎土a・b・e・g・j・oについて細部の特徴を比較検討してみる。

壺Aではa・b・c・g・i・jがある。このうちjは口縁形態がまったく異なる。全形の知られるbとgを比較すると、gの胴部の張りがより強く、器高が低い。

壺Bではa・g・jがあり、aとjは細めの胴部であるが、gは胴部の膨らみが強い。後者と同じ形態はmにもあり、壺Bは二つに大別される。

器種 胎土	壺		甕			蓋		杯		皿		鉢			計			
	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	A	B	C				
a	①	②				②	2	①	2	②	2	①	2	③	1	②		23
b		2				④	2	①	①	⑧	5						①	24
c							1											1
d									1	1								2
e	①						1		①	1							①	5
f		1																1
g	①	①	1			②	2			1								8
h						①	1											2
i									①									1
j	①	②		①														4
k	①																	1
l						①												1
m		①																1
n		①																1
o						②			④	3	1							10
計	8	7	1	1		21	1	5	29	1	3	4	2	2				85

Tab. 9 須恵器の胎土と器種の関係（丸数字はA群、ほかはB群）

壺Aはjを除く胎土がある。aは天井が高く、丸みを持ち、受け部への移行がなめらかである。bは天井部が平らな例が多く、受け部は外面が垂直に面取りされ、軽く下に突き出る。eはaとほぼ同じであるが受け部の突き出しが鈍い。gはbと同形であるが、天井部の陥落している例が目につく。oはaに近く天井部の丸い例とbに近い例がある。

杯Aは、a・bともほぼ同形である。わずかに、aの体部が直線的に開くのを認める。

杯Bのaは各個体に統一性がなく、ほかにない特徴をあげるなら、体部が深く、その下半が丸みを持つ例がある。bはA群とB群では若干ことなり、B群では体部の厚みが一定し、ほぼ直線的に開く例で統一されるのに対し、A群ではそのほかに体部下半が厚手で、体部の丸みを持つ例が加わる。eはbと同形であ

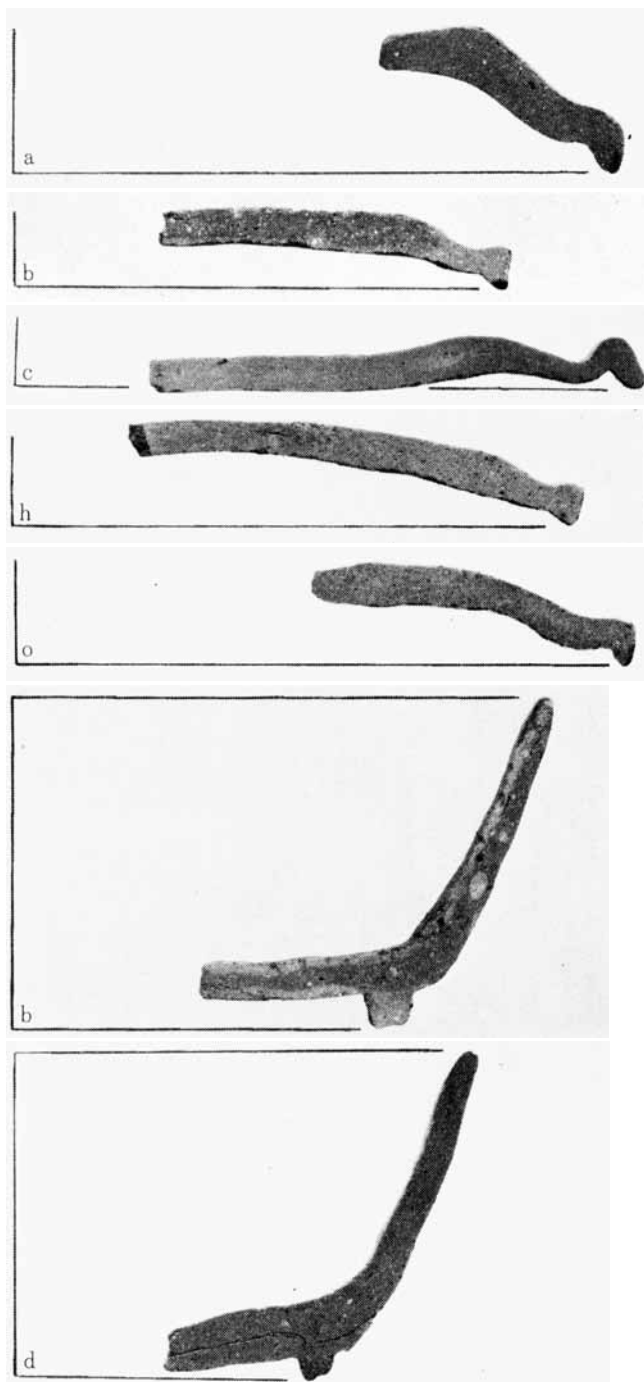


Fig. 38 須恵器蓋・杯の断面写真

る。gは体部が丸みを持ち、高台は委縮している。oはb同様A群とB群では差があり、B群はbに近い形態で、口縁端部はそれよりも丸みを持っておさめる。A群は体部の断面が剣状を呈する。

以上の比較から各胎土間の類別を表にすると明らかように、aとgは共通する特徴を有することはない。このことは生産地の相違を如実に示すものであり、A群より一括して出土することから、時期差とみるべきではない。従って主要器種においては少なくとも二つの異なる形態のものが存在し、これらとは別グループになるものが多いbを合わせると三

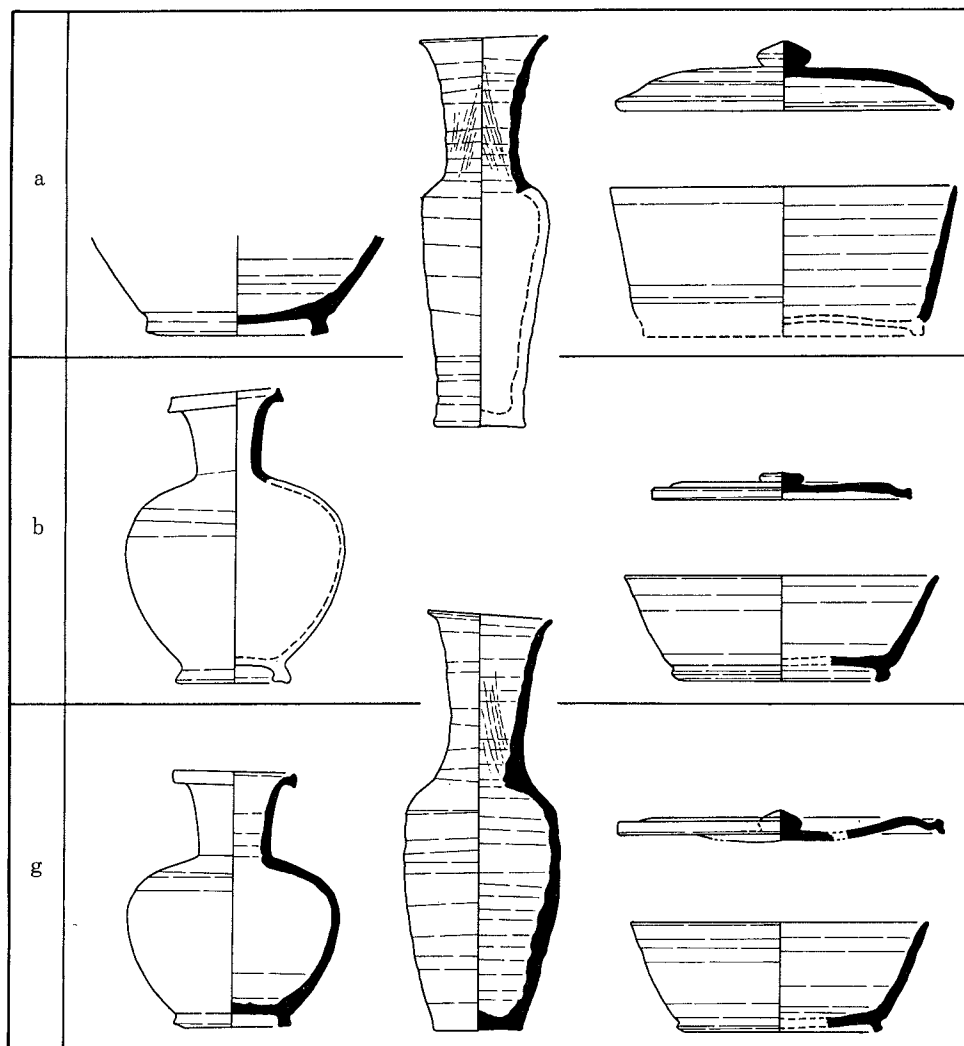


Fig. 39 長岡京期における須恵器の3形態



つの形態が存在する。

一方、A群とB群において同一胎土でありながら、顕著な相違をみせるbとoについては、それを時期差とみるべきである。杯Bにみることができる。

### 土師器

土師器において、長岡京の時期の判定となる大きな特徴は杯・皿・碗のc手法の流行である。それはほかの手法に対して100%ともいえる。ところが、今回の資料においては、c手法が優位を占めるものの、高率のb・e手法を確認した。特にSD21A群については、土器の残存状態が良好であり、資料としての信頼度は高い。

小型の器形に現れる傾向の強いe手法は別として、ここで問題にしたいのはb手法である。b手法について、その規定を平城宮の報告<sup>註15</sup>より抜き出すと、「bはaの底部外面をヘラでケズリで仕上げたもので、底部内面と口縁部外面はaと同様右廻り横にナデている（一部簡略）」とある。aとは木葉底で底面は未調整の土器である。従って、b手法に関しても木葉底である。しかし、SD21A・B群の観察の結果、木葉底を確認できたのは1例だけであり、この点に平城京後期の土器との大きな相違がある。

当時の土器の生産・消費を考えると、平城京後期までの土器の主たる消費地は当然平城京であり、生産機構もそれを考慮に入れていたであろう。ところが、長岡京遷都によりその消費地が移動し、かつ飛躍的な需要があったことは目にみえている。丹念に体部まで調整を兼ねて指で形作り木葉上で乾かすよりも、初め大まかな形を指で押えて造り、それを伏せて乾かし、その後削って外形を整える方法がはるかに能率的で、かつ熟練度を要せず、需要に対処し得たであろう。前者が平城京で出土するa・b手法の土器であり、後者が長岡京で出土するb・c手法の土器である。また前者は褐色を基調とし荒い胎土であるのに対して、後者は橙白色を基調として、胎土が柔らかく、明らかに生産地も相違する。

長岡京期のb手法とc手法を比較すると、b手法を古いとする根拠はなく、口縁部のナデ調整が強いために、その部分が削り残されb手法ともc手法とも区別のつかない例があり、むしろc手法の退行的現象としてb手法を考えるのが妥当かとも思える。近年平安京

胎土 器種	B群 B群 A群 A群							
	j	a	e	o	b	o	b	g
壺A	■	■	■	■	■	■	■	■
壺B	■	■	■	■	■	■	■	■
蓋A	■	■	■	■	■	■	■	■
杯A	■	■	■	■	■	■	■	■
杯B	■	■	■	■	■	■	■	■

Tab. 10 形態の相違からみた各胎土の親密度

内においてもb手法の土器が発見され始めたことは、これを裏付けるものであり、自然なあり方といえよう。

次に生産地の違いを推定できるものに甕がある。調整に使用されるハケ原体や胎土の相違から幾つかのグループに分かれる。一部その生産地もしくはその調整原体の盛行する地域の推定が可能なものもあるが、今後の課題としなければならない。甕Acのように外面をナデ調整する例は平城京後期以前にはない特徴であり、むしろ地域的特色とみなしても良からう。明らかにハケ調整の原体が異なり、胎土も違うものの写真をあげて今後の資料とする。

#### 黒色土器

今回の調査でも、黒色土器が出土し、明らかに長岡京期には成立していることがわかった。ただし、土器全体からすると1%に満たない少量である。器種は椀だけで、調整には回転台を使用せず、内面は例外なく、外面は全面もしくは体部上半をミガク。暗文は花文と蔓草文を表わす。これらの特徴は、平城京中期から後期の土師器杯・椀と内面の調整以外は共通性が多い。胎土も褐色や赤褐色を呈し、密接に関連することは明らかで、極論すると同一生産地の製品といえる。しかし、須恵器杯は別として、黒色土器椀と土師器杯・椀との間にどれほどの機能の分化・商品価値の差があったかは不明である。

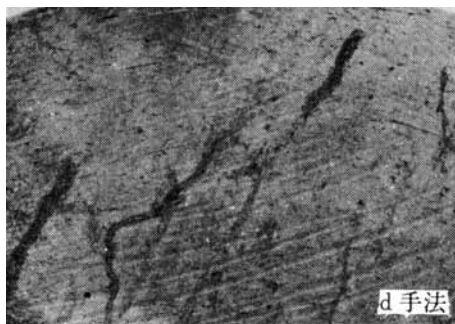
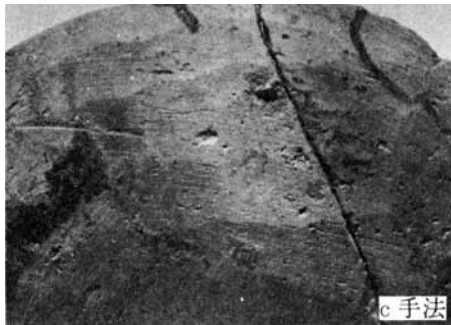
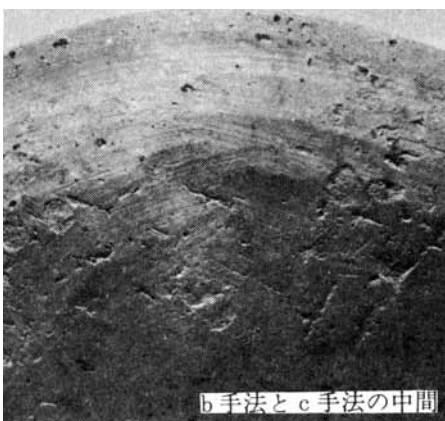


Fig. 40 土師器調整各手法

ただ、長岡京期以後、平安時代前期まで同一胎土のものだけが続くことから、特定集団だけが有する特殊技術であることが知られる。

### 3 平安時代中期の土器

SD25 から出土した平安時代中期の土器は、明らかにかけはなれた時期の土器を含まず、層位によって幾つかの器種では形態差が認められるが、単一時期としてさしつかえない。今まで、平安京内における出土例をみると、散発的には発見されているが、一括して出土した遺跡の報告は知見がなく、この意味では良好な資料といえる。しかし、内容は豊富とはいえず、平安京域内と平安京域外の格差を認めざるを得ない。極言すれば土師器皿・黒色土器椀・土師器羽釜の3点ですべてを賄っている。それがこの時期の土器構成に対する認識である。

平安時代中期の土器の編年は、灰釉・緑釉など一部の種類については、主として窯の発掘により成果が上がっているが、平安京という消費地・生活舞台の編年では心もとない。SD25 の全資料中、灰釉・緑釉の占める割合は微々たるものであり、それらにしても編年作業の進んでいる生産地のものばかりとは限らないからである。

従って、平安時代中期の土器編年は、その主要な消費地である平安京を中心とする地域において確立させることこそ最も有意義であると考え、現状ではその基礎となる

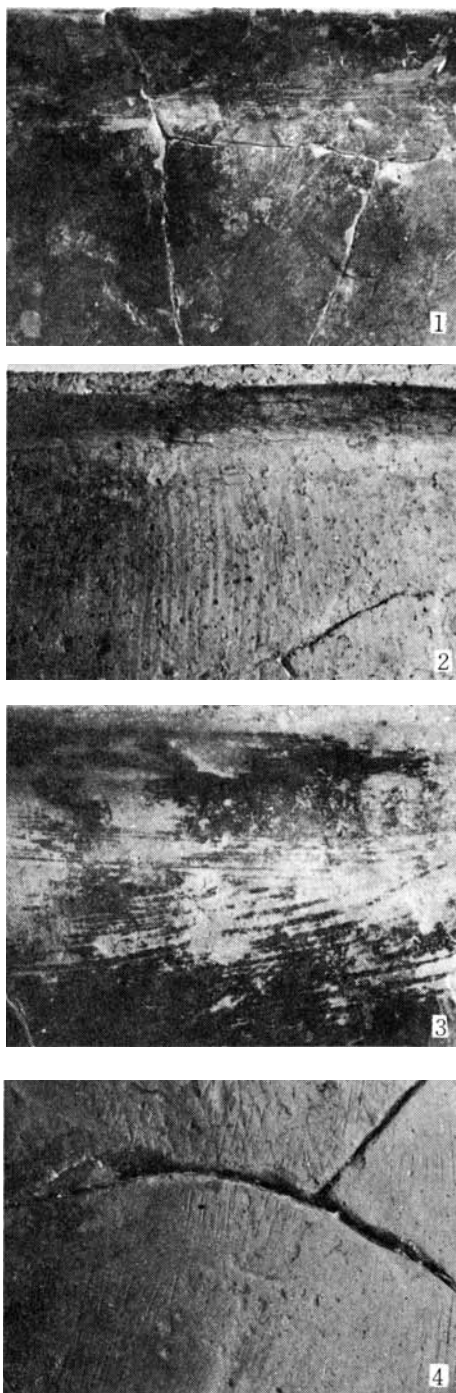


Fig. 41 土師器甕のハケ調整

一括遺物に恵まれていない。今後の発掘成果を待たねばならない。

SD25 出土土器の編年上の位置付けは、予測として、土師器皿・黒色土器碗に平安時代中期の典型をみいだせ、平城宮 SD650B<sup>註16</sup> よりも後出的で、平安時代後期と一般に認める土師器が、平安京左京四条一坊（壬生車庫跡地<sup>註17</sup>）の寛治5年（1091）に近い頃に埋没した井戸 SE08 の堀形から出土し、それとの型式差から当遺跡のものは10世紀の中頃から後半代に位置づけられよう。

次に黒色土器に関して若干ふれてみる。

長岡京期の土器で述べたように、その成立は長岡京期以前にある。またその制作については土師器と同趣であり、土師器製作集団のうちにある特定集団だけが所有する製品と推測した。その根拠として、胎土が褐色で一定していることをあげた。しかし、平安時代中期のものでは、そのほかに橙白色があり、単一ではなく、その間に形態差が認められる。これは、製作技術が特定集団からほかへ移動したことを意味するとみられよう。平安時代前期までとは異なり、土師器に匹敵する需要数があり、碗の器種ではほかの種類を圧倒する。この現象は当然、製作集団にも影響をあたえたはずである。特定集団ではその需要を賄えきれず、それに伴いほか土師器製作集団も土師器の需要の減少により黒色土器の制作技術を獲得し、生産を始めたと思われる。その結果が黒色土器 B に顕著に示される亜流の出現である。

それでは、黒色土器に後続し、平安中期の終わりもしくは平安後期の初めに出現するとされている瓦器との関係をどのように考えたら良いのであろうか。両者の子細に観察するとその関係は否である。確かに形態は類似し、共に表面を黒色化させていることで、関連性があるようにみえる。しかし、その焼成をみると、一方は土師器と同程度の窯の製品であり、一方は須恵器と同程度の高温を必要とする窯の製品である。また内面の調整を観察すると、黒色土器は回転台を使用しないミガキであり、瓦器は回転台を使用したミガキである。この違いこそが、土師器と須恵器の根本的な製作法の相違に通ずる絶対的なものである。言い換えれば、黒色土器は土師器製作集団の作品であり、瓦器は須恵器製作集団の作品である。

これを裏付けるものとして、SD25 出土の須恵器碗 C がある。これは体部はナデ調整で、その外面下半を軽くケズる須恵器であるが、焼成は瓦器に似て乳白色で柔らかく、口縁の内外面が黒変している。まさに瓦器と須恵器が同程度の構造の窯で焼かれたことを示している。これと同じ焼成のものは平安京少将井遺跡<sup>註19</sup>からも出土している。報告者はこれを土

師器としているが、図面をみる限りは須恵器の造りであり、3例は口縁の内外面が黒変し、ほかの1例は口縁内外面のみならず内面全体が黒変している。

このほか須恵器と瓦器をつなぐ役割をはたすものとして緑釉・無釉陶器があげられる。

これらは須恵器と同一生産体制のもとで造られるものであるが、無釉陶器は緑釉陶器の釉を意識して除き、白色にするために胎土を選び焼成温度を低くしている。この無釉陶器は平安時代中期のごく限られた時期にだけ出現する特異なもので、今まで、平安宮内で少量発見されただけである。無釉陶器の胎土・調整、それに緑釉陶器の調整と文様は、瓦器の胎土・調整・文様に通じるものがあり、形態を除くと須恵器製作の中に、瓦器の諸要素が充分そなわっていると考えるのは極論であろうか。

今後、須恵器の生産地内で瓦器の窯が発見されることを期待してやまない。



Fig. 42 黒色土器 (1) と瓦器 (2) の内面のミガキ

## 註

- 1 京都府教育委員会「長岡京左京三条二坊第1次発掘調査概要」  
『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』昭和50年(1975)
- 2 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』昭和50年(1975)
- 3 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪 発掘調査概報』昭和51年(1976)
- 4 注2・3の文献に同じ。
- 5 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 II』S. 昭和37年(1962)
- 6 高橋美久二「長岡宮跡第61次(NIA地区)発掘調査概要」『京都考古学第17号』  
昭和50年(1975)
- 7 京都府教育委員会「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」  
『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』昭和52年(1977)
- 8 京都府教育委員会「長岡宮跡昭和45年度発掘調査概要」  
『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』昭和46年(1971)
- 9 注3に同じ。
- 10 この数値は、長岡京の左京に残る条坊遺制(道路)から推定した。  
一坊の平均の長さ540mに近い。
- 11 注3に同じ。
- 12 左京2次の数字を使い、二条大路計画線からその南側溝までの距離を求めると、  
 $267.5m - \{(12.5m \div 2) + 6.1m + (119.7m \times 2)\} = 15.75m$ となり、三条大路の1/2  
幅よりも小さくなるが、あるいは平城京のように、さらに道路を拡幅しているかもし  
れない。
- 13 南へ3Aに向日市上植野向日神社々前の道路や長岡京市今里乙訓寺南側の道路があ  
り、4Aに一文橋、5Aに当遺跡南側の道路-府道志水西向日町停車場線-や長岡京  
市今里と開田の境界道路があり、6Aに古畑川に架かる長岡橋、7Aに長岡京市開田  
の府道伏見柳谷高槻線や馬場橋がある。
- 14 注2に同じ。
- 15 注5に同じ。
- 16 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』昭和50(1975)
- 17 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告-左京四条一坊-』昭和50年(1975)
- 18 平安博物館『少将井遺跡発掘調査報告』昭和47年(1972)

## 終わりに

幻の都・未完の都といわれた長岡京も、その内容が明らかになるにつれ、決して未完成のまま放棄されたものではなく、実態の伴った都であることが明らかとなりつつある。都城としては周辺地域にあたる当地にまで、その遺構を残していることは、それを物語るものであろう。

これによって、各界になげかける波紋は大きいと考える。歴史的立場から長岡京の位置付けも以前とは異なるものになろうし、我々現場担当者にとっても長岡宮と共に、長岡京京城にまで発掘の目を広げねばならず、長岡京発掘の転機を向えたといえるであろう。その指針となるのは長岡京の都城計画であり、具体的には条坊制度である。今回の調査では、平城京と同じくする条坊制度であることを推定したが、今までの調査成果を無理なく理解するまでには至らず、今後の課題の一つとせねばなるまい。

調査地内で検出された遺構は、古墳時代後期から平安時代中期までである。長岡京以前の生活空間とはなりにくいと考えられていた桂川右岸の低湿地帯において、建物の発見はなかったものの古墳時代後期の古道・溝の検出をみたことは、現在地上で確認するよりもまして自然堤防などが発達し、生活条件が良かったことを示している。特に古道の発見は、その行先がどのようなものであるかは不明であるが、古代集落の繋がりを考える上で貴重な資料となろう。

平安時代中期の遺構は川だけで建物はなかった。長岡京の条坊から現存条里への改変の時期はいまだ不明であるが、その考察の一資料となるであろう。

最後に、今回の成果は一に調査面積を広くとったがためであろうと考える。これに対して理解と協力をいただいた関係者に対して、敬意を表する。

PUBLICATIONS OF KYOTO ARCHAEOLOGICAL  
RESEARCH INSTITUTE (INC.)

NO. 2

**SURVEYS ON SITE OF NAGAOKA CAPITAL (KYOTO)**

**ENGLISH SUMMARY**

KYOTO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE (INC.)

1977



## CONTENTS

Chapter I	History of Research Work on NAGAOKA Capital	
1.	Historical Geography of the Surveyed Area .....	1
2.	Research Work .....	5
Chapter II	Progress of Research Work	
1.	Progress of Research Work .....	12
2.	Daily Record of Excavation Work .....	15
3.	Surveying .....	22
Chapter III	Excavation Work	
1.	Overview .....	24
2.	Strata .....	25
3.	Structural Remains of Later KOFUN-Period .....	27
4.	Structural Remains (Later NARA Period~Beginning of HEIAN Period) .....	32
5.	Structural Remains (Middle of HEIAN Period) .....	46
6.	Classification of Periods on the Structural Remains .....	47
Chapter IV	Excavated Objects	
1.	Earthenware of Later KOFUN-Period .....	49
2.	Earthenware (Later HEIJYO Capital Period~NAGAOKA Capital Period) .....	51
3.	Earthenware (Middle of HEIAN Period) .....	59
4.	Roof -Tiles .....	62
5.	Miscellaneous Objects .....	69
Chapter V	Conclusions	
1.	Planning and JYŌ-BŌ System of NAGAOKA Capital .....	73
2.	Earthenware of NAGAOKA Capital Period .....	79
3.	Earthenware (Middle of HEIAN Period) .....	85
	Post Scripts .....	89
	English Summary .....	91

## Plans and Sections

1. Surrounding map
2. Locations of structural remains
3. Trench 1
4. Trench 2
5. Trench 3

## Plates

- |                             |                                  |
|-----------------------------|----------------------------------|
| Frontispiece Excavated area | 1. Trench 1                      |
|                             | 2. Trench 1, detail              |
| Excavated objects           | 1. Green-glazed "hagama & kasha" |
1. Trench 1
  2. Drains SD01~03
  3. Structural remains and drain SB06・07, SD02・03
  4. Structural remains SB13・14
  5. Structural remains SB08~10・14
  6. Structural remains SB11・15, SA16
  7. Structural remains SB12・24 SA18・20
  8. Marsh SD21, drain SD22 and SA23
  9. Stream SD25, south-section
  10. Earthenware (SD21)
  11. Sue-type pottery (SD21)
  12. Haji-type pottery (SD21)
  13. Earthenware (SD21)
  14. Earthenware
  15. Earthenware (SD25)
  16. Roof-end tiles
  17. Roof-end tiles
  18. Miscellaneous objects
  19. Sue-type pottery (SD21, A group)
  20. Haji-type pottery (SD21, A group)
  21. Earthenware (SD21, A group)
  22. Earthenware (SD21, B group)
  23. Earthenware (Structural remains)
  24. Earthenware (Drains)
  25. Earthenware (SD25)
  26. Round roof-end-tiles (Rubbed copies and section)
  27. Flat roof-end-tiles (Rubbed copies and section)

## Figures and Diagram in Text

1. Location of NAGAOKA Capital ,palace and surveyed region.....	8
2. Surveyed area and plan of the school construction.....	12
3. Excavation of 1st trench.....	17
4. Excavation of 1st trench.....	18
5. Excavation of 2nd trench.....	20
6. Section(1sd and 2nd trench).....	24~25
7. Section(SF05 1st trench,north wall and a fill conjecturally restored).....	28
8. Procession of wooden piles(SD22).....	31
9. Section(SD22).....	30~31
10. Plan(SB06).....	33
11. Plan(SB07).....	34
12. Plan(SB08~10).....	35
13. Plan(SB11).....	36
14. Roof tiles(SB11).....	37
15. Plan(SB12,SA18).....	37
16. Plan(SB13).....	38
17. Plan(SB14).....	39
18. Section(SB14 traces of pillars).....	40
19. Direction of pulling out pillars.....	40
20. Plan(SB15,SA16).....	41
21. Plan(SB24).....	42
22. Section(SD01~03).....	44
23. Section(SD26~28).....	44
24. Section(SD21).....	44
25. Decline and fall of drain(east side,SD25).....	46
26. Section(South wall,SD25).....	46
27. Pottery(Later KOFUN period).....	50
28. Polished spiral design on black-earthenware(Inside black).....	55
29. Green-glazed Hagama-Kasha.....	56
30. Green-glazed bowl.....	56
31. Design of roof-end flat tile.....	64
32. Round tile.....	66
33. Flat tile.....	67
34. Salt baking pottery.....	69
35. Terracotta-horse.....	70
36. Stone implement,stone object.....	71
37. Coins.....	72

38. Photograph of Sue-type pottery (Section, cap and bowl) .....	81
39. Three types of Sue pottery on NAGAOKA Capital period.....	82
40. Technichs on adjustment of Haji-type pottery.....	84
41. Brush-adjustment on Haji-type pottery.....	85
42. Polished traces on black-earthenware [ inside black(1)]	
And on black bowl [ all black(2)] .....	87

**Tables in Text**

1. Past archaeological excavations on NAGAOKA Capital.....	9, 10, 11
2. Strata and Structural remains.....	27
3. Structural remains (Later NARA period ~Beginnings of HEIAN period).....	32
4. Classification of Periods on Structural remains.....	47
(Later NARA period ~Beginnings of HEIAN period)	
5. Quantity of earthenwares classified by types.....	49
(Later KOFUN period)	
6. Quantity of earthenwares(SD21-A group) .....	52
7. Quantity of earthenwares(SD21-2 trench).....	57
8. Quantity of earthenwares classified by strata(SD-25) .....	59
9. Relation between soils and types of Sue-potteries.....	80
10. Relation of material soils to every type of Sue-pottery.....	83

## SURVEYS ON SITE OF NAGAOKA CAPITAL (KYOTO)

The current report is that of the excavation studies carried out on site of the 4th Ward of Forth Avenue, Nagaoka Capital (A. D. 784~794) from December, 1976 to March, 1977.

It was carried out at Hazukashi-Hishikawa-Chō, Fushimi-ku, Kyoto City, the south-west region of Kyoto, located on an alluvium of the right bank of the Katsura-river. The survey covered an area of 7,200 square meters which were in order named from north to south as 1st trench 2nd trench 3rd trench.

The surface of archaeological remains found was about 1 meter under the ground level, between thick strata of clay.

The structural remains excavated were an ancient road, a drain of the later Kofun period, (the first half of the 7th Century) also eleven-structures, six-fences, seven-drains, a marsh from the later Nara period to the early years of the Heian period, (the second half of the 8th Century) together with a stream of the middle Heian period (the second half of the 10th Century).

The structures were all wooden houses of which plans were as follows, one of them covered 3 kens×7 kens with eave, three (of them) 3 kens×5 kens with eave, one (of them) 2 kens×4 kens up, one (of them) 2 kens×4 kens, three (of them) 2 kens×3 kens, one (of them) 1 ken, ×6 kens and one (of them) 1 ken×3 kens.

The archaeological remains were all from the later Nara period to the early years of the Heian period concentrating in 1st trench except one of them in 2nd trench.

Moreover, we can classify remains into 4 periods, that is to say, the 1st period: SB09, the 2nd periods: SB11, SB12 and SB24, the 3rd period: SB06.07 and SB14 the 4th period: SB13 and SB15. The 2nd and 3rd period are belonging to the Nagaoka Capital period.

Except a stripe of long fence running in an east-west direction and dividing a residential land into the north-south in 2nd trench, were short fences for shelting structures which belonged to 2nd and 3rd period.

Except the trenches of the later Kofun period. Most of them were parallelly running in an east-west direction and divided into the northern group in the 1st trench and the southern group in the 3rd trench. They were very shallow having a width of 1 meter to 2 meters whose bottom only remained. The northern group of drains corresponds to the Sanjo-broad street, the southern group of the drains to the street running parallelly in the south. The low alluvium occupies the eastern half of the surveyed area having a width of 20 meters and a depth of 0.8 meters where heavy-sticky clay piled up. The low alluvium was piled up in the later Kofun period, almost leaving as it until the Nagaoka Capital period and then it finished to pile nearly on the middle of the Heian period.

The survey brought to light the fact that the ancient road of the later Kofun period was found as a red-brown line running in the north-south direction in the center of the survey area and in the northern part changing in the north-west direction. It has a width of 3.5 meters at the bottom which is seen to have been repaired three times.

The drain in the same period runned from the north-west corner in an east-south direction in the 2nd trench, hammering wooden piles in the west edge of the drain.

The stream of the middle Heian period has a width of 8 meters and a depth of 1 meter running meanderingly in the center of 3rd trench.

The overwhelming majority of the relics are belonging to Nagaoka Capital period in the kind of which there are "Sue-type" pottery, "Haji-type" pottery, "Black haji-type" pottery and green glazed pottery.

A green glazed "Hagama" and a green glazed "Kasha" consisting of a pair are the precious ones excavated only a few in this country. In addition to these, a stone buckle called as "Sekitai", terracotta horses called as "Doba", and roof tiles etc. were found.

The result of the current survey was that a part of city structure of the Nagaoka Capital brought to light. By means of finding "Sanjō" broad-street and the nearly southern street, the system of the road (Jōbō System) in the Nagaoka Capital might be restored to the original state and by means of finding structures, the outline of the city brought to light.

In the result of that the Nagaoka Capital can be seen to have the same urban design as the Heijō Capital and it was enabled us to find a clue to elucidate the Nagaoka Capital known as a blurred one.